
ight in Masked Rider Vs Masked Rider Another Wo r Id

エレメントブレイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー Faight in Masked Rider
r Vs Masked Rider Another World

【Nコード】

N1396S

【作者名】

エレメントブレイド

【あらすじ】

仮面ライダーは正義の象徴である…。

人類の自由と平和のために孤独と戦う正義のヒーローであった。

だが、もし仮面ライダーが人々から恨まれ、嫌われる世界があったとしたら…。

この物語はある世界で人類から敵として認知されている仮面ライダーと…。

人類の自由と平和のために戦い続けた仮面ライダーとの…。

世界を超えた決戦の物語である…。

昭和ライダー大好きな作者が書く、昭和ライダー対平成ライダーの作品です。

昭和ライダーは（1号ライダー〜スーパー1）、平成ライダーは（クウガ〜W）を登場させる予定です。

平成ライダーは性格変更が激しく敵キャラとなっております。

それが嫌な方は「戻る」を推奨します。

仮面ライダーの恐怖（前書き）

こんにちは、エレメントブレイドです。

今回新作ひっさげて戻ってまいりました。

ストーリーがストーリーな為投稿するか迷ったんですがやることに決めました。

今までにないジャンルを目指したつもりです。

あらすじやキーワードにも書きましたが平成ライダーが好きな方は戻るを推奨します。

取りあえず今回はプロローグ編です。

仮面ライダーの恐怖

その世界には、元々1人の仮面ライダーしかいなかった。

仮面ライダーの名は古代の超戦士 クウガ。

大昔に グロンギ と呼ばれる種族を封印し、自らも長き眠りに就いた戦士である。

だがとある調査団により、長き眠りから甦ったグロンギ。

それと同時に発見された、古代のベルト アークル。

グロンギは、ゲゲルと呼ばれるゲームのルールに従い人間を虐殺し始めた。

「みんなの笑顔を守るため」…古代の超戦士へと変身する事を決意した、冒険家であり2000の技を持つ男 五代雄介。

その時から、クウガとなった雄介の長き戦いが始まったのであった。

刑事 一条薫 のバックアップや、クウガの新たな金の力を引き出す事で、遂にグロンギは最後の1体へとなった。

だが今のクウガの力では、最後の圧倒的な力を持つグロンギン・ダグバ・ゼバ には勝てなかった…。

どうすれば勝てるのか？

黒の姿になるしかないのか？

雄介が悩んでいる間にもダグバは数万の人々を虐殺していった。

迷った末に雄介は禁断の力であり、絶対になつてはいけない - 凄まじき戦士ディメット - になる事を決意する。

しかしそれになるという事は、同時に雄介の人としての心を失う姿であつた。

雄介は一条に人の心を失ったときの事を頼み、ン・ダグバ・ゼバとの最終決戦へと向かつて行った。

…だがここから悪夢が始まったのであつた。

雪原

「五代：なのか…。」

一条は不意にそう呟いてしまった。

雄介を追いかけ雪山を登つていった一条が見た物…。

それは、血塗れになり倒れたダグバに尚も殴りかかるクウガの姿…。本来ならクウガの瞳は人間の証であり、血の色である赤色の筈であ

ったが、その時のクウガはの瞳は何も映さない闇：黒色であった。

それは雄介が人の心を失ってしまった事を象徴していた。

雄介の願い通り拳銃でアークルを撃ち抜こうした一条であったが、体が動かなかった…。

それは今のクウガに感じる恐怖心であり、五代の笑顔を思い出しての事であった。

するとクウガが一条の存在に気付いたのか、首を絞め持ち上げていたダグバをゴミの様に投げ捨て一条へと近づいて行った。

殺される…。

そう思ったが、クウガは一条を気にせず横を通り過ぎ山を下りていった。

何故一条を狙わなかったのか？

雄介の人としての記憶がまだ残っていたのか？

それとも狙うに値しない存在だったからか？

だがそれを知るすべはもはや無かった…。

その後クウガは本能のままに暴れ始め、人々には地獄の様な日々が始まった。

人間を殴り、踏みつけ、時には自身の自然発火能力で焼き殺す…。その姿はかつてのダグバ以上であった。

2日も経たず内にダグバの被害人数の倍…いやそれ以上の人数を抹殺し、恐怖の対象となってしまうたクウガ…。

この暴走を止めたのは一条の銃弾であった。

これしか方法が無かったのだ…。

もうこれ以上、人々の笑顔を奪う彼の姿を見たくはなかった…。

雄介の協力者であった桜子、それに雄介の妹と悩んだ末に決めた苦肉の策であった。

「五代!!」

目の前の究極の闇へとなってしまった友の名を呼び、拳銃のトリガーを引いた。

「バァン…。」と1発の銃弾が放たれた。

強化された銃弾でもクウガには傷1つ追わせる事が出来ない…。

だがアークルの中央にある霊石 アマダム は「パリーン」と音を起てて碎け散った。

それと同時にクウガは苦しそうに蠢き、その場に崩れるように倒れた…。

原因は不明だったが、クウガの姿はアマダムを破壊されても雄介へと戻る事は無かった。

一条は急いでクウガの側に近づき、何度も彼の名を叫んだ…。

するとクウガは、ゆっくりと親指を立ててサムズアップをつくった。

「すみません…みんなの笑顔を…守れなくて…。」

それが、クウガの最後の言葉であった…。

こうしてクウガの暴走は幕を閉じた…。

だがクウガの残した爪痕は大きく、人々に仮面ライダーに対する恐怖を植え付けてしまったのであった…。

世界の破壊者誕生（前書き）

2話連続投稿です。

まだプロローグのため凄く短めです。

なるべく残酷な描写を目指して書いたのですが、なかなか上手くいきません…。

こういうときに自分の文章力の無さを感じますOrn

今回はやっと1号ライダーを出せると思います。

こんな作者ですけどよろしく願います。

世界の破壊者誕生

クウガの暴走から3年後…。

この研究所では、この世の物とは思えない様な光景が広がっていた。

恐怖の形相のまま内臓を握り潰され死に絶えた者や、体を真つ二つにされ絶命した者…。

それに、人間の力とは思えない程の力で、体を破壊され死んだ者…。

これらの死体は、この研究所に務める研究員たちであり、彼らの体から放射された体液により、研究場は信じられないどす黒い赤に染まっていた。

この研究所に残っている人は、研究所の責任者である白衣を着た男1人であった。

それ以外の者は目の前の、マゼンダ色の体に緑色の瞳を持つ悪魔に殺されてしまったのであった。

マゼンダの悪魔は返り血で真赤になった体で男へと近づいた。

目の前で何十もの人数の人を殺した悪魔に恐怖を感じた男は、足が震え立っていらなくなり、腰が抜けてその場に座り込んでしまう。「助けてくれ…。」と言い逃げようとする男を見て、怒りを感じたマゼンダの悪魔は彼の首を絞め持ち上げた。

「助けてくれ…だと？ お前等の実験材料モルモットにされた小夜は…同じ事を言わなかったのか？」

マゼンダの悪魔の腕に力が込められていく…。

「お前等のくだらない研究の為に俺達兄妹は…幾つもの世界を破壊するような事をやらされていたんだぞ…。その所為で夏海やユウスケ…それに、俺が今まで出会った全ての人物の世界が破壊されたんだぞ…。」

更に腕に力が入れられていく。

男は逃れようと必死に手や足を動かすが、マゼンダの悪は気にせず続けていく。

「それなのに今さら助けしてくれなんて都合が良すぎないか？ しかも本来ならお前は、旅から帰り真実を知った俺を処分するつもりだったんだろ？」

低い声でそう告げるマゼンダの悪魔…。

それを聞いた男は首を絞められている為、呼吸が出来ず小さな声で喋り始めた。

「な…にを言っじゃいる…わ、わたじ達の研じゅうは、この世界を思ってたのことだったんだ…。」

「この世界の為だと…？ 何がこの世界の為だ…。今この世界は、お前の行った行為の所為で居る筈の無かった化け物だらけだ…。」

男の言葉にマゼンダの悪魔はそう答えた。

「このげんじゅうのお陰で、で…ホジヤのライダーだって生まれだんだぞ…。」

「ああ、確かにライダーも生まれたらしいな…。でもそいつらは俺が巡った世界のライダー達が消滅したお陰で生まれたライダーだろ

…。」

マゼンダの悪魔がそう言うと、腕に力を込め男の首を完全に潰した。破壊者の手から自然と地面に落ちる男の体と首…。

返り血を顔一杯に浴びたマゼンダの悪魔は辺りを見回した…。
目に見えるのは、無残な研究員全の姿であった。

マゼンダの悪魔は腰のベルトを外す。
するとマゼンダの男は茶髪の青年の姿へと戻り、その場に腰をお下ろした。
服が血で汚れるなど、全く気にしていない様子であった。

「お前は世界を破壊する破壊者か…。」

これは死ぬ直前に先程の研究員が言い残した一言であった。

破壊者か…。
俺に相応しい名前かもしれないな…。

茶髪の男はもう戻ってこない仲間達、それに眼を覚ます事の無い妹を思い浮かべた…。

自分がこんな旅をしたせいで…彼らはあんな眼に遭ってしまったのだ…。
ならば破壊者という名は相応しいと…。

そう感じたのであった。

暫くすると茶髪の男は立ち上がる。

そして茶髪の男は静かに呟いた。

「確かに俺は破壊者だ……。だったら俺は……この間違った世界を破壊する……！」

そう言い残すと、茶髪の男は研究所を去っていった。

それから更に1年後……。

この世界は、破壊者……ディケイドコードネームDCCD率いる、仮面ライダーによって恐怖に陥れられるのであった……。

謎の声！！ 敵は仮面ライダー！？（前書き）

今度でプロローグ編は終わりです。

そして今回は昭和ライダーのある方がメインで、オリジナル怪人も登場させます。

ネーミングセンスも、技名もいまいちですが…。

次回から本格的に昭和ライダーVS平成ライダー編に入る予定です。
今回の話は昭和ライダーが主役の為、題名も昭和風にしました。

謎の声！！ 敵は仮面ライダー！？

暴力・略奪・破壊…。

この三原則に基づき、地球制服を目論む組織 ジンドグマ。

彼らの魔の手から人間を守る為、そして世界の平和を守る為に戦う戦士 仮面ライダースーパー1。

鬼火指令、妖怪王女、幽霊博士、魔女参謀と、卑劣な手や罠を使い挑んでくるジンドグマの幹部達に勝利したスーパー1は…。

富士の樹海でジンドグマを束ねる悪魔元帥と最終決戦を繰り広げ、見事勝利を収めた。

それと同時刻、アメリカでもジンドグマと戦う仮面ライダーがいた。

NASA宇宙開発研究所

広大な敷地と技術力を誇り、宇宙を目指すものならだれでも夢見る場所であろうNASA研究所。

まだ公開していない技術や秘密があるこの場所は、警備には細心の注意を払われていた。

だがその警備を振り払い、施設内に侵入しようとする影があった。

「バアアン、バアアン。いいかあ、よく聞くのだぞ。今から我々はこの施設に潜入して優秀な科学者を誘拐し、悪魔元帥様に差しのだ。そうすれば悪魔元帥様の宇宙侵略計画の手助けとなり、俺様ソウジキラーが幹部になる事は間違いなしだ!!」

この施設内に侵入しようとするのは人で無く怪人。

四角い頭に丸い体、右腕はホース状になっておりその先端は掃除機のバキューム…。

水色に緑色といった鮮やかな色をしたこの掃除機のような怪人こそ、ジンドグマ・鬼火指令の配下 ソウジキラー であった。

ソウジキラーは周りには赤いスーツに、顔に銀色の仮面の様なものが付いたジンドグマ戦闘員 ジンファイター が立っていた。

ジンファイターは「キー!!!」や「ギー!!!」と電子音の様な鳴き声を発していた。

ソウジキラーやジンファイターの腰にはジンドグマの紋章が刻まれたベルトが巻かれており、これはジンドグマに忠誠を誓う証であった

そもそも、ソウジキラーは海外で暗躍するジンドグマ怪人であり、鬼火指令の配下とはいえ、幹部という肩書が欲しいがための作戦であり、今回の任務は彼の独断で行ったものであった。

ソウジキラーは警備員が立ち並ぶ入口を少し離れた物陰から見ていた。

警備人は20人以上おり、幾ら怪人といえども侵入するには時間

がかかりそうであった。

「成程、数の多さか…だが俺様のこいつには無意味!!」

そう言うと、「バアアン、バアアン!!」奇妙な鳴き声を上げるとソウジキラーは、彼らに右手の掃除機を向けた。

「吸い込めえ!! ウルトラストリーム!!」

腕の掃除機が吸い込み始める。

最初は「風が強いなあ。」などと呑気な事を話していた警備員であったが、次第に風が強すぎるという事に気付く。だが気付いた時にはもう遅い。

警備員達は次々にソウジキラーの掃除機に吸い込まれてしまった。

…一瞬の間に、嚴重な警備は消えてしまったのだ。

「バアアン、バアアン。どうだ、俺様の秘密兵器ウルトラストリームの威力わあ。」

今回の計画は、ソウジキラーの身に備えられたこのウルトラストリームという技で研究員を吸い込む予定であった。

警備員も吸いこんでしまったが、無限に吸い込む事が出来る為、全く問題が無かった。

「さて…侵入するとするか、行くぞ、お前等!!」

「「「キー!!」」」

ソウジキラーの言葉にシンファイターは一斉に答え指揮内に入ろう

とする。

このままでは人類の科学がソウジキラーに奪われてしまう…。

「待てええ!!」

すると、急に彼らを制止する力強い声が響き渡った。

「誰だあ?」

「何処だあ!!」

ソウジキラーやジンファイターは声の主を探すが、
だが中々見つからない…。

「俺はここだあ!!」

声は後ろからであった。

ソウジキラー達は一斉に後ろを振り返った。

そこに立っていた存在を見て、ソウジキラーは驚いた。

暗めの黄緑色に深紅の瞳の仮面を装着し、体を纏う黒のスーツには
2本の技巧のラインが腕から足に掛けて入り、銀色の手袋にブーツ
…。

極めつけは、腰に巻かれた赤色の帯に中央に風車が付いたベルト
タイフーン。

それに赤色のマフラーを摩かせる戦士…。

この戦士こそシヨッカーに改造されし飛蝗をモチーフとした始まり

の戦士、その名を技の戦士 仮面ライダー1号。

「お前は…ライダー1号!!!」

ソウジキラーでもその名を知っていた。

今まで数多くもの歴代組織を壊滅させてきたという、伝説の戦士と語られていたからであった。

現在は、日本をスーパー1に任し世界でジンドグマと戦っていると聞いていたが、まさかここにいたとは…。

「ソウジキラー、お前の企みもこれまでだ!!!」

「ええい、黙れえ、俺様はジンドグマの誇り高き戦士!!! 何としてもこの作戦を成功するのだあ!!!」

力強くそう宣言するソウジキラーであったが、1号ライダーは「そんな作戦、もう無意味だ!!!」と言い放つ。

「悪魔元帥はたった今、スーパーによって倒された!!! ジンドグマは壊滅したのだ!!!」

ソウジキラーはこの真実を知らなかった。

悪魔元帥が富士の樹海にある宇宙研究所を襲うと情報があり、直ぐに今回の計画を実行したからであった。

だが、そんな直ぐにジンドグマの壊滅を信じられなかった。

「ええい、黙れ!!! 偉大なるジンドグマが…ましてや悪魔元帥様がスーパー1などにやられるものか!!! ジンファイター共、その大嘘つきを殺つてしまえ!!!」

「…ギー!!!」

その声と共にジンファイターは一斉に1号ライダーへと襲いかかった。

「とおうー!! はあっ!! たあ!!」

1号ライダーは襲いかかるジンファイターにキックやパンチ、それに投げ技を喰らわせる。

ジンファイターは攻撃を受けた個所は機械が剥き出しになり、壊れた機械の様な声を上げて倒れていった。

「ええい…。何をしているのだあ!! こうなればお前も吸いこんでやる。吸い込め!! ウルトラストリーム!!」

そう叫ぶとソウジキラー右手の掃除機を1号ライダーに向け、必殺技ウルトラストリームを放った。

「お止めてくださいソウジキラー様ああ!!」

「ええい、黙れ!! お前等の様な役立たずの戦闘員などライダーと一緒に吸い込んでやるわあ!!」

1号ライダーと戦っていたジンファイターは吸い込まれたくない一心でそう叫ぶが、ソウジキラーは構わずにジンファイターをも吸い込んでしまう。

次々と吸い込まれるジンファイター…。

このままでは1号ライダーも吸い込まれてしまう。

だが1号ライダーは何を考えたのか、ソウジキラーに向かって飛びかかった。

「ライダーアア…フライングチョップ!!」

胸の前で手刀にした腕をクロスさせ吸い込まれるより早く、ソウジキラーの右腕にライダーフライングチョップを喰らわした。それを受けた右腕の掃除機は破壊され、体から外れてしまう。同時に先程吸い込まれた警備員が、気絶はしているが無事全員排出された。

「お、俺様の右腕がああ!!」

自身の秘密兵器が破壊されパニックになるソウジキラー。

「よし、今だ!!」と言い、1号ライダーは勝負を決めるべくソウジキラーを抱え上げた。

「ライダーアア…きりもみシュート!!」

ソウジキラーを高速で錐揉み回転させ投げ飛ばした。回転と空中の為身動きが取れないソウジキラーは、そのまま頭から地面に叩きつけられた。

これぞ1号ライダーが幾多の改造人間^{強敵}を打ち破った必殺技、ライダーきりもみシュートである。

「バアアン、バアアン…ジンドグマは不滅だアアア!!」

そう言い残すソウジキラーは爆発してしまった。

1号ライダーはそれを見送ると、倒れた警備員達に近寄った。

「よし、大丈夫だ。これなら直ぐに目を覚ますだろう。」

警備員の無事を確認すると、彼らが目覚める前にここから立ち去ろうと、近くに停めてあった白のボディに赤と青のラインが入ったバイク サイクロン に跨った。

タ…ケテ…

タ…ス…テ…

タス…ケテ…

タス…ケ…テ…

エンジンを回そうとした1号ライダーに、突如謎の女性声が聞こえてきた。

驚いて辺りを見渡すが、倒れた警備員以外に人の気配ない…。

「もしや…。」と1号ライダーは頭を押さえた。

「俺の頭に直接話しかけているのか…。」

これは1号ライダーの頭に響き渡る声であると気づき、見えない声

の主に話し始めた。

「助けて…と言っていたが、君は一体誰なんだ？」

助けを呼ぶ声があれば、仮面ライダーは必ず助けに行く。

だが今回の場合はその声の主が誰なのか？

何を助けて欲しいのか？

何処にいるのか？

全くわからない状況であった。

すると再び声が聞こえてくる。

だが、今回の声は先程とは違い途切れることなく聞こえた。

彼らは復讐の為、ある目的の為…大切な人を、大切な時を取り戻す為に…人々を襲い始めた…。でも、彼らが大事と思っている人は誰もそんなことは望んでいない…。

悲しそうに謎の声はそう言った。

だが一体何の話をしているのか、1号ライダーにはわからなかった。だが構わず声は続けていく。

私は彼らを止めたい…でも、もう止められない…。そして彼らは人々の敵になってしまった…。どうか、彼らを…倒して、そして、罪の無い人々を助けて欲しい…。

一瞬「倒して」と言う時、声が何かを躊躇ためらったように感じた。
1号ライダーは、理由はわからないが、声の主は仮面ライダーの助けが欲しいという事を理解した。

「わかった…。だが彼ら…敵とは誰なんだ？」

1号ライダーがそう聞くと、声はゆっくりと答えた。

敵の名は…仮面ライダー…。

「なに!？」

最後の一言を聞いて、驚いた1号ライダー。

その言葉の真実がわからないまま、突如として目の前に巨大なオーロラの壁が現れた。

オーロラの壁は1号ライダーが呑み込んだ…。

オーロラの壁が消えると、そこに1号ライダーの姿は無くなっていった…。

出来れば…彼ら…仮面ライダーも救ってほしい…でも、恐らくそれは無理…。彼らの心に来た傷は消さない位大きすぎる…。

仮面ライダー Fight in Masked Rider
s Masked Rider Another World
プロローグ・完

謎の声！！ 敵は仮面ライダー！？（後書き）

今回登場したジンドグマ怪人ソウジキラー…。

前書きにも書いた通りネーミングセンスの欠片の無い名前…。

ですがジンドグマ怪人はグラスンキッドやビデオンなど日常的な物の怪人。

それで扇風機にするか迷った未掃除機の怪人に…。

オリジナル怪人は今回だけです。

次回からは既存の怪人しか使わない予定です。

プロローグ（前書き）

はい、今回はアギト編プロローグ！！

プロローグは前回で終わりじゃねーのかよお！！
と思ってる方…。

あ、痛い！！ 石や物を投げないで…。

いや前回は全体のプロローグ。

今回はアギト編のプロローグです。

最初に描きますが、この作品内ではアギトは本名・沢木哲也でなく
津上翔一で書きます。

ややこしいんですが、沢木哲也はこと本物の津上翔一は沢木雪菜の
夫・沢木哲也とします。

こうしないと無理です。

雪菜は哲也と結婚しているため、名字はそのまま沢木です。

わかりにくかったら説明しなおりますので感想をお願いします。

プロローグ

クウガの暴走から2年半…。

あの時の事件が嘘だったかのように街は復興し平和な時が戻ろうと
していた…。

だが突如として奇妙な事件が起きた…。

水の無い場所での人間の溺死、コンクリートに死体が組み込まれる
…などの人間には到底不可能な殺人事件…。

人々はこの事件を不可能犯罪と呼んだ。

殺害人数が増える中、遂に人々は目撃してしまう…。

過去人々を恐怖に陥れた古代種族グロンギに酷似した、生物の姿を
…。

この生物は、グロンギを超える謎の存在 アンノウナーと名付けら
れた。

そしてアンノウナーと同調するように現れた戦士…。

アンノウナーはその戦士を アギト と呼んだ…。

山の奥地

復興作業が続けている街から離れた場所にあるその山は、普段なら人は近づかない様な場所であった。

だが不思議とその木々の生え茂る場所に家が建っている…。

決して別荘では無い…。

そもそもこの山は別荘を建てる場所には適していない上に、人が暮らすのに適していない…。

だがそれでいいのだ。

何故ならこの家の持ち主 沢木雪菜 … 仮面ライダーアギト が世間を避けるために建てたものだからであった。

そんな山奥に集まる30人以上の老若男女といった人々…。
人々は手に鍬や鎌といった武器になる物を持っており、警官を職業としている者は拳銃を手に持ち、2人の姉弟を囲むように立っていた。

彼らの狙いは弟の後ろに隠れている姉、いや、アギト… 沢木雪菜であった

「姉さんは貴方達の為に戦ってるんですよ!!　なのに何で殺されなきゃならぬんですか!!」

弟は喉が潰れるくらいの声で叫んだ。

すると拳銃を構える警官が「黙れ!!」と返した。

「その女がアギトだからに決まっているだろ!!　今回のアンノウン事件だってその女の所為で起こったに決まっている!!」

「そうだ!!　殺しちまえ!!」

「あんな女が居るから、アンノウンが現れたのよ!!」

「姉弟共々殺しちまえエ!!」

警官がそう言うと一緒に騒ぎ始める人々…。

雪菜は急にアギトに覚醒してしまった。

それから人間ではなくなるという恐怖と闘いながら、人々の為に戦い続けた。

だが人々はアギトを人類の味方として見ていなかった。

何故ならアギトがクウガに似すぎているからであった。

それでも雪菜は人間とアンノウン…2つの敵と戦いながらアギトとして戦ってきた。

いつか分かってもらえる日が来る…。

そう信じていた…。

だがある日、雪菜は子供をアンノウンから救う為に人々の前でアギトに変身してしまった。

結果的にアンノウンを倒し、子供を救ったのだが、雪菜は人々から追われる存在となった。

彼女は夫 沢木哲也 と、弟 津上翔一 と共に住み慣れた家を捨て、こんな山奥に隠れるように住んでいた。だがその場所が人々にばれてしまった。

アギトを殺せば人々は救われる…。

そう考えた人々は雪菜を殺す為にこの騒動を起こしたのであった。

警官は銃を雪菜を庇う翔一に向けた。

「さあ、どけ…その化物を差しだせばお前は見逃してやる…。」

「姉さんは化物なんかじゃない…。」

翔一は決してそこを動こうとはしなかった。

彼の姉を守るといふ決意はそれほど硬かったのであった。

すると人々は2人の前にある物を投げ捨てた…。

それを見た瞬間、翔一と雪菜は息が止まってしまった。

「哲也さん…。」

それは血塗れになった雪菜の夫・沢木哲也であった。

既に呼吸はしていない…。

ポロポロになった服や、血塗れのその姿から何があったのか想像する事が出来た。

「そいつを捕まえたのはいいが、絶対にお前等を裏切らないと言っていてな…。仕方なくそうさせてもらった…。」

雪菜はそれを聞いて泣きそうになっていた…。

私の所為で彼がこんな事に遭ってしまった…。

しかもこのままでは弟まで…。

雪菜は翔一に「もういいよ…。」と言おうとしたが、翔一の肩が震えているのに気付き言うのを躊躇ってしまった…。

「もういいよ…。」と言わなかった事を後悔することになるとは知らずに…。

「お前等、よくも哲也さんを…。」

翔一の瞳には涙が溜まっていた。

優しかった人が…。

罪の無い人が…。

死んだのだ…。

いや、殺されたのだ…。

その涙は怒りと悲しみが混じった涙であった。

「うおおおおおお！！！」

翔一は人々に向かって拳を振り上げた。

すると「バァン、バァン」と2発の銃声が響き渡った。

「え…？」

警官の撃った銃弾は翔一の心臓と頭を貫いていた…。

自分が撃たれたという真実に気付くと翔一はその場に崩れるように倒れた。

「翔一いい！！！」

雪菜は急いで翔一の側へと駆け寄った。

「翔一、ねえ翔一！！！」

返事は返ってこない…。

撃たれた箇所が致命傷となりもう喋れないのだ…。

ああ…自分があの時弟を止めていればこんな事にはならなかった…。

雪菜は自分を呪った…。

頭に思い浮かんでくる、まだ小さかったころの弟との思いで…。

絶対死なせたりはしないから…。

そう考えある事を決意した。

「翔一…貴方なら大丈夫…、私と哲也の分まで生きて…お願い…。」
そう言うと雪菜は目を閉じ両手を翔一の腰に当てた。
その瞬間、2人の体は光り輝いた…。

「うわあああああ！！」

急の現象にパニックになった警官は、銃弾を全て光に向かって撃つた。

人々は目を瞑り光が収まるのを待っていた。

光が収まった時…。

そこには先程撃つた銃弾が体中に当たり倒れそうになっている雪菜の姿が見えた…。

雪菜は口から血を吐き倒れながら「さようなら…翔一…。」と別れを告げ倒れた…。

「何だったんだ…あの光は…。」

警官はそう呟いた。

何も起こらなかったのか？

ならばそれに越したことは無い…。

人々は雪菜の体が動かず死んでいる事を確認すると、その死体に近

づいた。

すると急に数人の首が吹き飛んだ…。

首を刎ねられ倒れていく人々の中心にいたそれを見て人々は驚いた…。

アギトである沢木雪菜は死んだはず…。

だがそこに立っていたのは、金色の角に赤い瞳を持つ戦士 アギトであつた。

手刀にしたアギトの腕は真赤になっており、アギトが人々の首を跳ねたとわかつた。

その時人々は気付いた…。

殺した筈の弟津上翔一の死体が無くなっている事に…。

「まさか…お前は…弟なのか!？」

指を差し驚いていた翔一を殺した警官であつたが、アギトはそれに答えず警官の頭を握りつぶした。

返り血は周りにいた人々にまで届いた。

「きゃあああああああ!！」

「うわあああああ!！」

「殺されるうううううう！！」

武器を捨て逃げ始める人々であったが、アギトは彼らを決して逃がさなかった…。

その日、山奥では大量の死体が発見された…。

死体のどれもが原形がわからない程無残な姿であった…。

そしてその日からアギトを…津上翔一を目撃した人物はいなくなつた。

A part (前書き)

海外でジンドグマ怪人・ソウジキラーを倒した仮面ライダー1号・本郷猛。

1号ライダーは謎の声に導かれ巨大なオーロラへと飲み込まれてしまった。

オーロラの向こうには一体何が待つのか？

A part

黒の革ジャンに茶色のジーンズというワイルドな格好をした男 本郷猛 は目に差すような太陽の光を受けゆつくりと瞼を開いた。

あれからどのくらい眠っていたのだろうか？

体の状態から長時間は眠っていない事がわかる。

それにバイクに跨りながら眠っていたことから、オーロラに呑み込まれてそのまま気絶してしまったと理解出来た。

本郷は辺りを見渡し、自分が状況を確認する。

「此処は…宇宙開発研究所じゃないのか？」

謎の声を聞く前はNASA宇宙開発研究所の前にいた筈…。

だが今本郷が居るのは家々などが建ち並ぶ住宅街であった

こんな場所に移動した記憶が無い…。

ならばあの声の主が自分移動させたのだろうか…。

街を見渡しながらそう考えていると、街の中が静かすぎることに気付いた。

静かというよりも、何処か寂れていると言った方が適切であるか…。空には太陽が昇り気持ちいい晴天だというのに、人影が何処にも無いのであった。

街の人は外出を控えているのか…？
だが何故？

本郷は周りを確認してみる…。
すると驚く物を見た…。

いや、それがある事自体は不思議ではないのだ…。
本郷も以前、世界中で戦っていた際に見た事があるからだ。
だがこの場にあるというのが可笑しいのだ。

「街の外に砂漠だと…。」

「ヒュー」と風が吹き、砂が舞い上がり本郷の頬に砂粒が当たる…。
本郷が見たのは、街の外に広がる広大な砂漠であった。

周りにはある家は日本で見る様な家ばかりであった。

だとしたらここは日本なのであろうか？

そうだとしたら砂漠があるというのは可笑しなことなのであった。

不思議に感じながら街を出て砂漠に入ってみた…。

だがその時不思議な事が起こった。

街を出た筈なのに、まだ街の中にいたのであった。

いや正確に言えば、街の中に引き戻されたのであった。
もう一度試しに砂漠に入ってみるが、同じような現象が起こった。

「何か不思議な力が街の周りに張られていて、街から出れなくなっている…。」

IQ600という驚異的な頭脳を持つ本郷は直ぐにそれを理解した。

少なくとも自分の知っている地球にはこんな不思議な力が働いている場所は無かった。

だとしたらここは…。

本郷の頭にある仮設が浮かんだ。

だが、それはとても信じられない事であった。

しかしそうと考えればあの謎の声の意味も…、敵が仮面ライダーと意味も理解する事が出来る…。

誰か…、誰か助けて…。

すると再び「助けて。」と呼ぶ声が聞こえてくる。

またあの声であろうか？

違う。

これは街の中から聞こえてきた声であった。

改造人間である本郷の耳は、普通の人なら聞こえない程の遠い場所からの声も聞こえるのであった。

謎の声は人々を助けてと頼んでいた…。

だとしたら助けを呼ぶ人を助けにいかなくてはいけない…。

バイクを猛スピードで走らせ本郷は街中へと向かって行った。

街中

ビルやマンションが建ち並ぶ街の中心部…。
しかしビルの窓ガラスは殆どが割れており、電気も付いていない…。
更には彼方此方に血痕が残っており、大量殺戮の後の様になっていた。

そんな街中を逃げ回る中学生くらいの少女。
彼女を追い掛けるのは2つの影…。
だがそのどちらも人間ではない…。

この街に突如として現れたアンノウンと呼ばれる人型の生物であった。

「はあ…はあ…。」

必死に走りアンノウンを振り切ろうとする少女であったが、アンノウンと人間では持久力に差がありすぎる…。
徐々に少女とアンノウンの距離が縮まっていく…。

するとアンノウンは急に高くジャンプして少女を飛び越え、少女の前に立つ。

最初から追い付く事など雑作ない事なのであった。
ただ追い駆けっこを楽しんでいただけなのであった。

こんな行動は普通のアンノウンならあり得ない事だが、指揮者も無

く、ただアンノウンの本能に従う、コピーされたアンノウンだからこそ、こんな行動をするのであった…。

「そ、そんな…。」

前と後ろのアンノウンに逃げ場を失くし、絶望を感じる少女…。

蛇の姿をしたアンノウン スネークロード は少女へと手を伸ばす。

だが少女に振れるより早くスネークロードの顔にバイクの前輪が炸裂した。

それによりスネークロードはそのまま吹き飛ばされ、壁に激突してしまった

バイクの男 本郷猛 は怪人が吹き飛んだのを確認すると、少女に「大丈夫か？」と聞いた。

少女は急の助けに驚きながら「だ、大丈夫です。」と答えた。

少女の無事を確認すると本郷は2体にアンノウンに眼を向けた。

「ジンドグマ怪人とは違う…。こんな怪人見た事が無い…。」

今までシヨツカーから始まりジンドグマまでの怪人を見た事があるが、目の前の怪人はそのどれとも違う姿をしていた。改造人間ではなく生物に近い姿…。

1番の違いはそこであった…。

果たしてこの正体不明の怪人は何なのか？

そう思い本郷は変身を躊躇ってしまっ…。

すると再びバイクのエンジン音が聞こえてきた。

バイクの操縦者である男はヘルメットを被っており顔が確認出来ない。

バイクの男はアンノウンに近づきながら、あの言葉を発した。
キーワード

「変身!!」

声と同時にバイクの男の姿に緑色の異形の影が重なっていく。影が完全に重なると、男は緑と黒の体に生物的な姿を持つ野獣の様な戦士へと変わっていた。

その戦士の名は ギルス。

「ウオオオオワアアア!!」

「グワツ!!」

ギルスは変身と共に変形したバイク ギルスライダー から飛び降り、スネークロードへと強烈な蹴り喰らわせた。スネークロードは先程のスネークロードと同じ場所に吹き飛ばされた。

「仮面ライダーだと…。」

本郷はギルスを見て驚いたように呟いた…。

何故なら本郷はこの仮面ライダーを知らないからであった。

すると先程まで考えていた疑惑が確信へと変わる…。

「やはりここは、パラレルワールド平行世界なのか…。」

大学時代に友人から、自分達のいる世界と異なる世界…パラレルワールド平行世界があるという説を聞いた事があった。

当時は信じていなかったが、街の外に広がっていた砂漠や、見た事の無い怪人…それに始めてみる仮面ライダー…。
パラレルワールドこれからから平行世界説を信じざるえなかった。

「葦原さん!!」

本郷の隣にいる少女はギルスに向かって叫んだ。

ギルスは「今のうちに逃げろ!!」とだけ言うと、起き上がるスネークロードへと向かっていった。

「グワア!! ウオアツ!!」

腕から鋭きカギ爪　ギルスクロー　が生え、2体のスネークロードを同時に斬りつける。

苦しそうに斬り口を抑える片方のスネークロード。

それとは反対にもう1体のスネークロードは空中に現れた光の中から杖状の武器を取り出し、それを使いギルスに襲いかかる。

しかしギルスは高く飛び上がりそれを避け、逆に腕から触手状の鞭　ギルスファイラー　を伸ばし鞭の様に扱いスネークロードを何発も叩きつける。

「グオアアアアアアアアアアアアアア!!」

後ろへとよるけるスネークロードに止めを刺すべく、ギルスは踵落としを浴びせた。

ギルスの踵には鋭利な爪　ヒールクロー　が生えており、スネーク

ロードにの肩に深々と突き刺さる…。

「グオオオオオオオオオオ！！！」

口元のクラツシャーが大きく開き野獣の如く咆哮をあげ、足に力を込めて完全に振り降ろす。

ギルスの必殺技をまともに受けたスネークロードの頭上に、天使の輪が出現する。

断末魔の叫びをあげるとスネークロードは四方八方に爆発していった。

「次だ…。」

ギルスはもう一方のスネークロードを睨んだ。

睨まれたスネークロードは最後の手段と言わんばかり手を上げる。それと同時に辺りに突風が巻き起こる。

これはこのスネークロードが持つ能力であった

その凄まじい突風はギルスや本郷達の視界を遮る。

攻撃手段にも使える風だが、今回の場合は逃げる手段にもなる。

スネークロードは後ろを向き逃げようとする…。

「はあっ！！！」

逃げるよりも早く、スネークロードの腹部に強烈な一撃が叩きこまれる。

それはギルスの拳…ましてや本郷の拳でも無い…。

「ア…ギ…ト…。」

その名を呟くとスネークロードは、先程のスネークロードと同様に天使の輪が出現し爆発していった。スネークロードが爆発すると同時に吹き荒れていた風が収まる。

風が収まると本郷は爆発音がした方向を見た。

「もう1人の…仮面ライダー…。」

目の前にいるのはギルスとは別のライダーであった。金色の角に赤き瞳を持ち、腰にベルトのオルタリングが装着されている、龍を模した戦士 アギト。

「翔一君…！」

アギトを見た瞬間、少女は悲しそうに叫んだ。

その声を聞いたアギトは小さく「真魚ちゃん…。」と呟いた。

2人は何も喋らないまま暫くの間、互いに見つめあっていた…。

本郷はアギトと少女 風谷真魚 の過去に何かある事に気付いた。

真魚がアギトの元へと駆け寄ろうとすると、それよりも早くギルス

がアギトへと駆け寄った。
ギルスのギルスクロウがアギトへと降り下ろされるが、アギトは片腕でそれを受け止めた。

「津上：何時までこんな事をしているもりなんだ…。い加減に戻ってこい！！」

ギルスクロウが受け止められている状態のまま、ギルスはアギトへとそう言った。

だがアギトはその言葉を聞こうとはせず、「葦原さん…。」と話し始めた。

「逆に貴方は何時まで人間の味方でいるつもりなんですか？」

「なにっ！！」

その質問に戸惑ってしまいギルスの腕に込めていた力が緩まる。

アギトはその一瞬の隙を突きギルスを蹴り飛ばした。

吹き飛ばされたギルスは体勢を立て直しながら「どついう意味だ！！」と叫んだ。

「言葉のままです。人間とアギト：いいや、人間とライダーは決して交わる事は出来ない…。だから姉さんは…。」

右腕を強く握り地面を見ながら悔しそうに答える。

その光景を見て真魚は再び「翔一君…。」と呟いてしまった。

その声を聞いてか、アギトはギルスの方から真魚の方に向き返る。

「真魚ちゃん…。俺は明日、この地区にいる人間全員を消しに来る

…。氷川さんにも、そう伝えてください…。」

それを伝い終わると同時に、アギトの後ろにオーロラが現れる。そのオーロラは本郷がこの世界に来た時に見たのと同じ物であった。

「待て…津上…うっ…！」

追い掛けようとするギルスであったがその瞬間に変身が解け、青年
葦原涼 へと戻ってしまふ。

ギルスへと変身した副作用により涼の体は急激な老化に襲われてい
た。

真魚は苦しみ出す涼へと駆け寄る…。

アギトは彼らをから目を逸らし、オーロラの中に消えていった。

今までの彼らの会話を聞いていた本郷は、謎の声の言っていた意味
を全て理解した。

だがしかし…本郷には1つだけ気になる事がある。

それはあの翔一と呼ばれていたライダー…の事であった。

「あのライダーには人々の敵になった理由があるように見えた…一
体それは何なんだ？」

本郷は不思議そうに呟いた…。

今この瞬間、仮面ライダーの新たな戦いが始まろうとしていたの
であつた…。

だがその事をまだ誰も知らない…。

A part (後書き)

今晩はエレメントブレイドです。

今回の作品のスタイルは、「復讐のアギト」がアギト編の題名なんです。

だからそれがA・B・C…と続いていくわけです。

ちなみに最近スランプです…。

文章書けません…。

ネタが浮かんでも文章に出来ず悩んでいました。

このA partは本当に大変でした…。

おかしな文章になってるかもしれないですが、そしたら教えてください…。

直ぐに修正します。

今回は戦闘無しのB partの予定です。

その間にスランプが抜けられるといいな…。

エレメントブレイドでした。

B part (前書き)

いやあ…ようやく完成です。

結局スランプの状態で書きました…。

今回この世界の説明があるんですけど…。

わかりにくいかもしれません…。

B part

「本郷さん、着きましたよ。」

真魚のその声を聞き本郷は前を見た。

目の前に見えるのは、自分がいた世界では日本の首都にある警視庁本庁舎であった…。

だがこの建物は殆どの窓ガラスが割られ、彼方此方にはヒビが入っていた…。

それらの状況から辛うじて建っているという印象を受けた。

本郷の知っている日本にはここまで破壊された本庁は無い…。

「やはり別世界なのか…。」

「え、何か言いました？」

自分の考えが間違いではないという事を感じてそう呟いた。

するとそれを聞いた真魚が早期言ったが、本郷は「いや、なんでも無いよ。」と答え、「それよりも…。」と続けた。

「彼を早く休ませたほうがいい…。あの怪人やライダーにやられた傷より、あの変身の後遺症…それが大きすぎる…。」

気を失い背負っている涼を見ながら本郷はそう言った。

あの後、真魚がこのビルまで涼を運ぼうとしたのだが、女の子には身体能力的に涼を運ぶのには無理があった。

それで本郷がここまで背負って運んで来たのだ。

「さつき見ただけで、そこまでわかったんですか!？」

その言葉を聞いた真魚は驚いたように聞いた。

本郷の言う通りギルスへの変身は、変身者である涼の体へと大きな負担を齎す。

だが初めて会ったのにも関わらず、そこまで理解した本郷に驚いたのであった。

だが本郷は慌てた様子を見せず「たまたまだよ…。」と答えた。

「そうですか…。」と疑問を残しつつ早く涼を休ませる為に、真魚は施設の扉に手をかけた。

「あの…本郷さん、お願いします…。中に入ったら涼さんがライダーだって事、皆に言わないでくれますか…。」

その言葉の真偽はわからないが。

この世界ではライダーは敵…、人々に恐怖の対象として見られてしま…。

恐らくその事からこのようなお願いをしたのだろう。

そう結論付けると、本郷は「わかった。」と答えた。

それを聞いた真魚は「ありがとうございます。」と言い、扉を開いた。

地下シエルター

警視庁本庁舎に入り、そこから地下シエルターへと降りていく。

外はいつ崩れるかもわからないが、地下は外壁も厚くちょっとやそつこのことじゃ壊れない。

しかもこの空間は中々広く、何千人という人数が避難できるという事がわかった。

ただ日光が入らない為、光は照明だけ…。

それも電気不足が影響しているのかわからないが、半分以上が消えていた。

本郷が中を歩いて行くと、床に毛布やシートを引き座る人々の姿が目に入った。

皆外からこの場所に避難してきたのだろう…。彼らの顔には疲れや恐怖が感じられた。

奥の方にある医務スペースへと辿り着く。

真魚に気付いた1人の青年は、真魚へと近づいてきた。

「真魚ちゃん、どうしたの？」

「真島さん！！ 実を言うと涼さんが…。」

青年 真島浩二 に真魚は涼の事を説明した

それを聞いた真島は涼を布団に寝かしてと頼んだ。

本郷は言われるがままに涼を布団へと寝かせた。

「涼さんは…僕達と同じで普通の人間じゃないからこの現象だっただろう事も出来ない。…自然の回復を待つしかないよ…。」

「そうですね…。」

話を聞いているうちに本郷はこの真島と言う人物も涼がライダーであると知っていると言う事がわかった。

だが彼の言っていた僕達と同じで人間では無いとはどういう意味なのか？

本郷が見た感じ2人共普通の人間にしか見えないが…。

「あつ！！ 真魚姉いたよ。」

「ほ、本当か太一！！」

本郷がそう考えていると、真魚を呼ぶ声が聞こえてきた。声の方を振り向くと、小学生中学年位の少年とその父親と思われる中年の男性がこちらを見ていた。

「伯父さん、それに太一…。」

真魚は驚いたように2人の人物を見ていた。

中年の男性 美杉義彦 は「ああ、良かった…。」と安心したように呟き、少年 美杉太一 は「それにつ…てなんだよ。」と少し怒り気味に真魚へと近づいてきた。

「まったく、何処行つてたんだ？ 心配したんだぞ。」

美杉は実の娘を説教するかの様に、真魚を説教し始めた。

先程真魚は美杉の事を「伯父さん。」と呼んでいた。

真魚ちゃんには父親はいないのか？

不思議に感じた本郷はそう考えてしまった。

「伯父さん、ごめんなさい…。」

説教が終わり、真魚は申し訳なさそうに謝った。それを聞いた美杉は「いや、もういいんだ。」と答えた。

「ただ、もう急に居なくならないでくれ…。本当に心配したんだぞ。」

「心臓が止まるほど心配したんだ…。」と付け足すと、美杉は真魚の隣に立つ本郷に気付いた。

「真魚、こちらの方は…。」

「本郷猛さんだよ。さっきそこで会ったんだ。」

この言葉は嘘である。

真魚と本郷が出会ったのは街の中であった。

だがこの嘘には理由があると感じた本郷はその事を言わず、代わりに頭を下げ「よろしくお願いします。」と言った。

見かけによらず真面目な人だなあ、と感じながら美杉は本郷をマジマジと見ていた。

すると真魚は大切な事を思い出した。

こんなこと絶対に忘れてはいけないほど重要な事であった。

「伯父さん、氷川さんが何処にいるかわかる？」

それを聞いた美杉は「氷川君か？」と聞き返した。

「氷川君なら…、いつものトラックにいるんじゃないのか？」

美杉がそう答えると真魚は「わかった。直ぐ戻るから。」と言いき川と呼ばれる人物がいる場所へと向かって行った。

「待ちなさい真魚。」と制止する美杉であったが、既に真魚にはその声は届いていなかった。

しかも気付いたら太一までいなくなっている…。

美杉は今日1番の溜息を吐いた。

「大変ですね…。」

同情した本郷がそう言うと、美杉は「いやいや…。」と恥ずかしそうに頭をかいた。

「お恥ずかしい姿をお見せして申し訳ない。」

「いや、いいんですよ。親が子を思うのは当然の事です。」

それを聞いた美杉は「親ですか…。」と呟いた。

そして独り言のように話し始めた。

「実を言うと…真魚は私の子では無いんですよ…。」

やはりそうか…。

先程「伯父さん。」と呼んでいた時から気になっていたが、やはり父親では無かったのか…。

「真魚の両親は2年ほど前に殺されたんですよ…。あの事件でね…。」

「あの事件？」

事件と言われても先程この世界に来たばかりの本郷は、この世界で起きた事件など分かる筈もない。

何の事を言っているのか分からないのを本郷の表情で気付いた美杉はあの事件について話し始めた。

「あの事件だよ…。数年前の山奥で起きた大量殺戮事件…。あの事件に真魚の両親も巻き込まれていてね…。」

2年前、山奥で大量の人間の死体が発見された事件…。

人間の力で殺されたとは思えない死体の姿に、警察は当初アンノウンの仕業と見ていた。

だがアンノウンは大量殺戮をしたりはしない…。

更には先日までアギトと思われる人物の死体が発見された…。

代わりにその事件から行方不明がわからなくなったのはアギトであった女性の弟のみ…。

警察はこの弟が何らかの形で事件に関与していると見たが…。

結局弟は発見されず、捜査は打ち切りになった。

真魚の両親もこの事件で亡くなっており、両親の死から心を閉ざしていた真魚を引き取ったのが美杉であった。

「真魚には太一と同じくらい愛情を注いでいるつもりなんですけど…。何か無理して元気である様に感じるんですよ…。何か隠しているというか…。」

真魚を引き取ってからまだ短い期間であるが一生懸命面倒を見てきた。

だが、真魚に美杉には言えない大きな秘密があるように感じたのだ。

それを聞いた本郷は「大丈夫ですよ。」と言った。

「先程あつたばかりですけど、真魚ちゃんにそんな心配はいらないように感じました。それにそんなこと心配する親子は何処にもいませんよ…。」

それに秘密があるとすれば、それはあの翔一と呼ばれていた金色ラのイダー アギト に関係ある筈…。

だがそれはあえて言わないでいた…。

それを聞いて元気が出た美杉は「そうですね…。」と言った。

「ありがとう。本郷君に話したら元気が出ましたよ。でも初対面の本郷君にここまで話せるなんて不思議だなあ。私は心理学を研究していたんだが本郷君には何か、その…特別な魅力を感じるんだよねえ。」

特別な魅力…。

それは本郷の元からの魅力からだろうか？

それとも機械の体になって、何年も歳もとらずに生きて出来た魅力だろうか？

だが…今更それに答えられる者はいない…。

本郷は「フツ」と笑う。

「そんな魅力なんてありませんよ…、それじゃあ僕はこれで…。」

そう言うと本郷はその場から去っていった。

美杉は首をかしげ不思議そうに本郷を見続けた。

駐車場

本郷は地下シェルターから出て駐車場に向かおうとしていた。

何故駐車場まで来たのか？

それはいなくなった真魚を探しての行動であった。

「恐らく駐車場にいますと思うんですが…。」

先程の話では真魚は氷川と呼ばれる人物を探して、トラックへと向かって行った。

トラックなら恐らく駐車場にいる筈…。

そう考えたのであった。

駐車場に着くと、直ぐに青でペイントとされた巨大なトラックを見つけた。

本郷はトラックへと近づく。

すると中から声が聞こえてきた。

「本当の話なんですか、それは？」

最初に聞こえてきたのは若い男の声であった。

すると直ぐに「はい…。翔一君は確かにそう言っていました。」という声が聞こえてきた。

それは真魚の声であった。

声から先程のアギトの言葉をトラックの中にいる人物に伝えている事がわかった。

ここに居てもしょうがない…。

そう考えた本郷は意を決してトラックの荷台へと入ってみた。すると一斉にトラックにいた人物の視線が本郷へと向けられた。

「本郷さん…。」

突然トラック Gトレーラー に入って来た本郷を真魚は驚いたように見ていた。

Gトレーラーの中には様々な武器や、装備が置かれており本郷はそれらを驚いたように見回していた。

中でも目を引いたのが仮面ライダーに酷似したマスクであった。

本郷が周りを見ていると、真魚と話していた青年が「真魚ちゃんの知り合いですか？」と真魚に聞いた。

「はい、本郷猛さんです。さっき私をアンノウンから守ってくれたんです。」

「そうなんですか。」と青年は感心したように頷いた。そして座っていた椅子から立ち上がり手を差しだした。

「警し…いいや、氷川誠です。よろしくお願いします。」

「本郷猛…よろしく。」

青年 氷川誠 と本郷は握手を交わした。
するとモニターの近くに座っていた女性が立ち上がり2人に近づいて来た。

「氷川君は凄いのよお、なんとたつてG3の装着者だからね。」

「止めてください小沢さん、僕はそんなに凄い人間じゃありませんよ。」

「なによお、だったら私の作ったG3が氷川君にとっては凄くないつてい言うの？」

「いいえ…そういうわけじゃ…。」

小沢と呼ばれる女性の言葉に氷川は困り果て黙り込んでしまった。その反応を見た小沢は「冗談よ。」と言い、本郷に同じく手を差し伸べた。

「小沢澄子、G3ユニットの設計者よ…よろしくね。」

本郷は「よろしく。」と答え、同じく握手をした。

すると先程小沢の隣に座っていたの男性が立ち上がり、2人の様に自己紹介を始めようとする。

「で、これが尾室君ね。なんか影が薄いし、究極の凡人何て呼ばれるけど、これでもG3の開発者でもあるのよ。」

「どっちも小沢さんが言いだした言葉じゃないですか!!」

G3の開発者 尾室隆弘 は余りの言われ様に泣きそうになりながらそう訴える。

本郷は苦笑を交えつつも尾室とも握手をした。

先程から出てくる「G3」という単語だが、それは恐らくこの仮面

ライダーに酷似した強化服の事であろう…。
本郷はそう理解した。

「そういえば…本郷さん、何しにここに来たんですか？　もしかして僕達に何か用があるんですか？」

氷川が不思議そうにそう尋ねた。

すると本郷は「聞きたい事があるんだ…。」返した。

「この世界…いいや、何故こんな風になってしまったか教えて欲しい…。出来ればライダーが敵であるその理由も…。」

それを聞くと4人は驚いたように本郷を見た。

今まで生きてきてそれを知らないというのが信じられなかったのだ。

…。
もっとも、この世界の住民ではない本郷は知らなくて当然なのだが

戸惑っていた氷川であったが、話しても問題ないだろうと感じ、本郷に数年前の出来事を話し始めた。

元々この世界は平和であった。

平和といっても殺人や窃盗などは起こっていたが、今の様な事件は起こらなかった。

その平和が砕かれたのはグロンギの登場…。

それにクウガの暴走からであった…。

クウガの暴走が収まり、世界は元の平和な姿に戻ろうとしていた。

しかしその平和破るかのように現れたのが、グロンギでは無い新たな怪人達…。

怪人と共鳴するように現れた新たなクウガ達…。

怪人と戦うにはライダーの力が必要であった。

だが人々はクウガの様に、また暴走し人々を襲うのではないか？

そう考え、ライダーを「巨大な力を手にする怪人」として見ていた。

ライダーが幾ら怪人と戦い人々を守ろうとも、人々はその殆どを人類の味方として認める事は無い…。

そんな日々が過ぎ。

クウガの暴走から4年後、事件は起こった…。

街を破壊し始める異形の影…。

その影はアンノウンやオルフェノクなどの怪人では決して無い…。

街を破壊する影は…マゼンダ色の悪魔であった…。

マゼンダ色の悪魔は幾人ものライダーを従えていた。

「俺は破壊者…ディケイド D C Dだ…。今からこの世界は俺が…いや、俺達

ライダーが支配する…。もし俺に従うライダーがいるなら共に来い

…。」

デイケイドがそう宣言すると、デイケイドに従うライダーが一斉に人間を襲い始めた。

人類に味方するライダーは必死に戦うが…。

デイケイドの不思議な能力と、ライダー達の圧倒的な力の差の前に次々と破れていった。

ライダーによる人間の虐殺…。

正に悪夢のような光景であった…。

この世の地獄というのは、この光景だと誰もが考えた…。

街や人間を破壊したデイケイドは次に街を幾つもの地区に分解し、それぞれの地区が干渉出来ぬようにバラバラに遠ざけた。

次に海を消滅させた。

海が消えた事により、自然は次々と消滅していき地球は砂漠になってしまった…。

更にはそれぞれの地区に、人間達が逃げられるように不思議な結界をはった。

この結界の所為か定かではないが、海が消滅したにも拘わらず結界がはられた地区に生える木や自然は消滅する事が無かった。

そのデイケイドの事件から…ライダーによる支配から今日で丁度1週間が経とうとしていた…。

人々はその間、不安な日々を送っていた。

氷川が一通り本郷に話し終えた。
そして悔しそうに腕を強く握りしめた。

「僕もG3で戦ったんですが…G3の性能を引き出せず負けてしま
った…。」

あの事件の時、氷川や涼は人々を守る為にライダー…いやこの地区
を支配することになるアギトと戦った。

だがG3は再起不能になるほど破壊され、ギルスは最後の最後まで
戦ったがアギトの多彩な力の前に敗れてしまった。

その話を聞いた小沢は「氷川君の所為じゃないわ。」と言った。

「あの時はまだG3が未完成な状態だった…。だからこそ今ある設
備を使って、前のG3を超える…G3-Xを作った。」

その後小沢は残った研究員と他のライダーの技術をつぎ込みG3を
強化し作り直した。

まだ実戦に使った事は無いが、訓練からG3-Xは以前のG3の倍
以上の力を持っている事が証明されている。

今この地区に残っている人類の味方のライダーであるギルスと同じ
で、G3-Xはこの地区の希望であった。

するとお尾室が気弱に「でも…。」と呟いた。

「でも…アギトが明日攻めてきてG3-Xがアギトに負けたら…僕
たち人類はどうなるんでしょうか？」

先程既に真魚から明日の事を伝えられていた。

その事を心配し尾室は不安げに言った。

その言葉でトレーラーの中は一気に静まり返った。

本郷は静まり返ったトレーラーを見渡し考えていた。

果たして自分はライダーと戦うべきなのだろうか…と。

B part (後書き)

今回はここまでです。

ついでにこのアギトが支配する地区は第1地区です。

次回も戦闘無しです。

よろしく願います。

C part (前書き)

更新が遅れた。

いやぁ…私は土日で仕上げるのを目標としているのですが、パソコンが調子悪くなり修理に時間がかかってしまいました…。自分でパソコンを直せる技術が欲しい…。

そして完成した内容を見ると、もうスランプではなく駄文と感じました。

何がダメと言うと同じ言葉の使い回しが多いという事です。

今回セリフが無いくせに、かなり「氷川」と言う言葉が出ました…。

そんな作品ですが、どうかこれからもよろしくお願いします。

C part

空には街が真赤になるほどの紅の夕焼けが広がっていた。

夕焼けの下には背を壁に任せ腕を組んでいる本郷の姿があった。

本郷は瞳を閉じ感覚を研ぎ澄ませ、ライダー同士を持つ精神感応^{テレパシー}の反応に集中していた。

だが幾らやってもテレパシーは通じず、返って来るのは耳障りなノイズだけであった。

「やはり…駄目か。」

「はあ…。」と軽くため息を吐く。

本来本郷の世界のライダー達は、特殊なテレパシーをライダーの機能の1つ0シグナルでキャッチすることによりどんなに遠く離れていても互いの居場所が分かり会話する事が出来る。

だがその機能はこの世界に来てから全く使えなくなってしまった。

理由は別世界だからだろうか？

それともこの地区に張り巡られている結界の仕業か？

考えれば理由など山ほどありすぎてわからないが、結果として他のライダーとの通信が途絶えてしまったのであった。

これ以上試しても結果は同じだろうと感じ、本郷は瞳を開け先程の氷川の話进行出す。

そして小さく呟く。

「俺は…ライダーと戦うべきなのか？」

この世界の事情について知ってから本郷はずっとこの事を悩んでいた。

何故悩んでいるのか？

それはライダーが敵になった気持ちだが、本郷には痛い程がわかるからであった。

本郷自身もあの時、緑川博士の助けが後少し遅ければライダーは悪の手先となり人類を襲っていた。

例えば自分が次のライダー…この場合は2号ライダーに倒されたとしても、自分の犯した罪によりライダーは人々から冷たい目で見られる存在となっていたであろう。

そうなれば自分以降のライダーも最悪この世界の様に悪の道に走っていたかもしれない…。

つまりこの世界のライダーは道を踏み外した自分自身なのだ。

本郷は機械が詰まった腕を恨めしそうに睨んだ。

今は普通の人間の姿に擬態しているにすぎない…。

自分も機械の怪人なのだ…。

ならば同じライダーとして自分はどうするべきなのか？

なにも干渉せずライダーに人間が殺される様を見ているというのか？

いや…人々が襲われるのを黙って見ているなんて事、正義感の強い本郷が出来る筈がない。そもそもあの声は人間を救って欲しいという願いで本郷をこの世界へと導いたのだ。

「どうすればいいんだ…。」

ライダーはその異形の姿で人間を守る存在…。

しかしその異形の姿を人間が受け入れる事は出来ずに、敵になってしまったのも同じライダー…。

迷い、迷い、迷い、迷い、迷う…。

本当ならこの事を他のライダーにも相談したかった。

特に自分と同じ境遇で戦い抜いた彼なら、答えを導き出すような言葉をくれる筈であった。

だがそれさえも出来はしない。

「一人で戦っていたところに戻ったようだ…。」

かつて1人悩み、1人で悲しみも罪も背負い、1人で戦っていた頃に似ている…。

そう感じたのであった。

すると「カチャ」地下施設の扉が開いた音が聞こえてくる。

扉の方を見てみると地下施設から出て来る人影があった。

地下施設から出た人影…それは真魚であった。

真魚は本郷の存在には気付いていない様で、誰も付いてこない事を確認するとある場所へと向かって行った。

「何処に行くつもりなんだ？ また怪人に襲われるかもしれないのに……。」

外に出ればまた怪人に襲われるかもしれない。

それなのに何故外に出る必要があるのか？

そもそも真魚は本郷と出会った時、何故あんな場所にいたのである
うか？

もしか、あの場所に何か用事があったのではないだろうか？

考えているうちにもこのままでは真魚が見えなくなってしまう。

本郷は真魚をこっそりと追い掛けることにした

何故本郷がこれほどまで真魚の事を気にしているのだろうか？

この世界で始めて出会った人だからだろうか？

それとも真魚といるとこの世界について情報が得られるとわかった
からか？

後者は多少なり理由に含まれるが、前者の様な理由では決してない
……。

本郷が真魚を気にする理由：それは真魚の瞳にあった。

真魚はいつも笑顔を絶やさなかったが、彼女の瞳だけはいつも本当
の意味では笑っていないかった。

数々の人達に振られてきた本郷は初めて出会った時からその事を本能
的に気付き、今まで真魚の事を気に掛けていたのであった。

彼女が真に笑わない理由…。
それは何なのか？

出来る事なら彼女の本当の笑顔を取り戻してあげたい…。

そう考えている本郷の優しさなのであった。

暫くして本郷はある場所へと辿り着いた。

そこは先程真魚が怪人に襲われていた場所から少し離れた場所にあった。
つた。

その場所は今まで見てきた、この地区の街に比べると一番破壊された場所であった。

民家や小規模な店があったようだが、その大半が瓦礫と化していた。辺りをよくよく見てみると青い金属が落ちている。

それを見つければ、Gトレーラーで氷川が言っていたアギトと戦ったという場所がここであるという事を本郷は理解した。

だからこそ道路は血で汚れており、破壊されたと言っていたG3の青い欠片が彼方此方に落ちているのだ。

本郷は青い欠片を拾う。

それにも血痕が付いていた。

「それほど…凄まじい戦いだっただのか…。」

恐らくこの惨状からして、今あの氷川が生きているのも奇跡に近いのだろう…。

顔には見せてはいなかったが、恐らくこの戦いの傷は癒えていない筈…。

それなのに氷川はそれを表情には出さなかった…。

強い人間だ…。

本郷はそう感じた。

暫くして本郷は真魚が入っていった、ある店の前で足を止めた。その店もこの辺りの民家と同様半壊しており、店の看板は半分以上読めない状況であった。

「RE…TAURAN…レストラン…AG…O…。」

どうやらこの店がレストランであるという事がわかった。

よくよく見れば本日のランチと書かれたボードが転がっている。

何故真魚がこの店へと入っていったのか？

不思議に思いながらその店へと足を踏み入れると裏の方から物音が聞こえてきた。

「裏庭に居るのか…。」そう言いながら裏庭に向かってみる。

すると裏庭には野菜を手入れする真魚の姿があった。

野菜はトマトやキュウリ、それに大根などと種類が豊富であり、そのどれもが店で置いている物より大きく美味しそうに熟していた。真魚は中腰になり雑草を抜いたり、余計な苗を切ったりと作業に没

頭していた。

本郷はゆっくりと真魚へと近づく。

「美味しそうな野菜だね…。」

その声が聞こえた真魚は突然の本郷の登場に驚いていたが、直ぐにいつもの笑顔で「そうでしょ、とっても美味しいんですよ。」と答えた。

だがその笑顔は、やはり本当の意味での笑顔ではなかった。

「これは…真魚ちゃんが作ったのかい？」

本郷がそう聞くと真魚は立ち上がり「ううん。」と首を振る。

「違うんです…。最近私が手入れしてますけど、本当は翔一君が手入れしていた野菜なんです。翔一君は自分で育てた野菜で料理するのが好きでしたから。」

懐かしそうに話す真魚。

だが本郷には彼女との会話に出てきた人物の名前に眉を細めた。

「翔一…確か、アギト…の事だったよね？」

翔一…それは真魚がアギトに向かって行った名前であった。と言う事は話しに出てきた人物はその翔一と同一人物で間違いないだろう…。

それを聞いた真魚は「うん…。」と首を縦に振った。

「彼は：優しい人間だったんだろうな…。」

野菜を美味しく育てるには根気のいる事であり、それを見れば彼の人柄が大体分かる。

それを聞いた真魚は「う、うん。」と一瞬何かを躊躇い領いた。

「何故そんな心優しくかった人が人類の敵になってしまったんだ…。」

氷川の言うにはライダーが人類から認められなかったた的になったという事であった。

だが本当にそれだけの理由なのであるうか？

本郷にはそれが理解できなかつた…。

「本郷さん、知ってます？ 氷川さんが前に言っていたんですけどアンノウンは超能力者…ううん、アギトになる可能性のある人物しか襲わないんです…。」

真魚が急にそんな話を話し始めた。

アンノウンがアギトしか襲わない…。

その言葉で本郷はある事に気付いた…。

しかしそうなるとアンノウンに襲われていた真魚は…。

「わかりますよね。私もアギト…ライダーの様なものなんです。でもアギトの様な能力は無い…、あるのは残留思念を読む力だけ…。」

真魚は自分の胸に手を当て話し続ける。

「本郷さんは知ってますよね。2年前の惨殺事件…。」
「ああ…知ってる。」

本郷は美杉から曖昧であるがその話は聞いておりそう答えた。

「あの事件で私の両親は亡くなりました…。でもその日から夢を見るんです…。あの事件の夢を…。」

話しながら思い出したくなかった事を思い出し、真魚の瞳には涙が溜まっていく…。

本郷は顔色一つ変えずに黙って続きを聞く。

「悪魔の様に翔一君を追い詰めるパパとママの姿が…翔一君の姉さんが殺される光景、翔一君がア、アギトになって皆を惨殺する…う景を、ぜ、全部夢で見たんです…。」

ある日真魚は突然、アギトが山奥で両親を惨殺する夢を見た。夢にしてはリアルな光景であったが、起きれば夢の内容を殆ど忘れており然程気にせず、両親を殺された事から自分の頭が生み出した悪夢だと考えた。

だがそれを毎日見るのだ。

しかも次第に夢は鮮明になっていく…。

自分の超能力に気付いていた真魚は「まさか…全部本当の事？」と勘が恐怖を感じた。

暫くして真相を確かめるべく、夢に出てきた山へと向かった。

最初は警官に「子供が入る所じゃない。」と止められたが、伯父である美杉の知り合いの刑事・氷川の協力を得て真魚は事件の場所へと向かった。

その場所は警官により死体などは回収されていたが、未だに彼方此方に血の跡が残っている。

その光景を見た時は本当に驚いた。

何故ならそれは夢と全く同じであったからだ。

夢で見たのと同じ場所に気が生え、同じ場所に家があり、同じ場所に血痕が残っている…。

やはりあの夢は…。

そう考えていると真魚は突如激痛に襲われた。

痛みは収まらず徐々に激しくなっていく…。

次第に氷川の叫び声さえも聞こえなくなってしまい、真魚は意識を次第に薄れていった…。

気が付くと真魚はまたアギトがの夢を見ていた。

だがいつもと違うところがあった。

それはいつもより鮮明に事件の光景が見えているという事であった。

雪菜の人間ではなくなっていくという恐怖…。

夫であるという理由だけで拷問され命を落とした哲也…。

翔一と雪菜を追い詰める人々…。

その中には悪魔の様な表情で2人を追い詰める真魚の両親の姿もあった…。

暴君と化した市民により哲也と同じように同じく命を落とした翔一…。

翔一は姉の生きて欲しいという望みを聞きアギトになる…。

だが甦った翔一には姉を殺された怒りにより、その場にいた人々を全て惨殺する…。

誰も信じられず、現実さえも信じられなくなった翔一は、その場から逃げ何処へと姿を消す…。

真魚が目を覚ますと心配そうにこちらを見る氷川の姿があった。

氷川の「大丈夫かい？」と言う声も聞かずに、真魚は「ごめんなさい…、ごめんなさい…。」と何度も何度も謝っていた…。

「翔一君は…私のお兄ちゃんのような存在で、誰よりも優しい人だったんです…。私はそんな翔一君が昔から好きだった…。でも…み、皆が…それに私の両親が翔一君の人生を変えたんです…復讐にしか生きられないような人生に…。」

全てを話し終えた真魚…。

その話を聞いて本郷は「復讐か…。」と呟いた。

「その話は誰かに話したのかい？」

「氷川さん達と葦原さんに…。2人は知つといた方がいいと思つたから。」

人類の敵になつたとはいえ翔一を恨まないでほしい…。

そう考え、2人には話したのであった。

その話を信じた氷川を含むGトレーラーの面々は、真魚も知つた方がいいと感じアンノウンが超能力者…アギトに近い存在しか襲わないという事を話したのである。

だがその言葉はより少女を傷つける結果になつてしまった…。

自分もアギトであるなら何故、翔一や雪菜だけ襲われたのか？

自分だつて襲われるはずだつたのだ…。

少女の心からその闇が消えることはなかつた…。

その日から真魚は本当の笑顔を忘れてしまった…。

全てを話し終えた真魚の瞳から涙が頬を伝つて地面へと落ちていく。本郷は中腰になり目線を真魚に合らし、そつと指で真魚の瞳に溜まる涙を拭いた。

「話してくれてありがとう。辛かつただらう…。」

そう言つと真魚の頭を優しく撫でる。

その言葉で真魚は「ありがとうございませ…。」と涙を拭きながら

お礼を言い、不思議そうに本郷を見た。

「不思議ですね。この話はもう誰にも言わないつもりだったんですよ。でも自然と口から出て本郷さんには話しちゃいました…。なんだけ、本郷さんには話さなきゃと思って…。」

美杉と同じような事を言う真魚に、美杉は心配していたが真魚と美杉は本当の親子の様なものだ…。と本郷は感じ内心嬉しくなった。

そして本郷は「変な事を思い出させてすまない…。」と謝った。真魚は「いいえ、そんな事無いですよ。」と両腕を振った。

「私は翔一君には何も出来なかった。だからせめてこの園芸だけはそのままにしてよと思って毎日欠かさずにここで手入れをしているんです…。翔一君が何時でも帰ってこれるように…。」

野菜を見ながらそう言う。

本郷と出会った時もここに来る途中でアンノウンに襲われたのであった。

「バカですよ。こんなことして翔一君は許してくれないのに…。」

それを聞いた本郷は「そんな事はない…。」と首を振る。

「その思いはいつかきつと届く…。まだ無理かもしれないが絶対に…。」

そう言いながら本郷は明日、自分がどうするべきなのかを決意した。

それはどんなに残酷な結果になると、決して揺らぐことのない決意であった。

「あつ、一番星…。」

うす暗くなってきた空に浮かぶ1番星を真魚は指さした。

2人は暫くの間1番星を見続けた。

一面に広がる砂漠で本郷と真魚と同じ1番星を見る人物がいた。その人物の腕には笑顔で写る3人の男女の写真が握られていた。

「哲也さん…姉さん…。」

星を見る人物 津上翔一 は悲しそうに…そして小さく大切な人の名を呟く…。

そして天国があるのなら、天国に逝ってしまった姉に祈るのであった。

明日どんな結果になろうと怒らないでほしい…と。

C part (後書き)

これで会話パートは終了です。

次回から戦闘パートです。

予定では後2話でアギト編終了予定です。

D part

翌日 アギトが人間を抹殺すると指定した日…。

人々の恐怖と裏腹に、その日も気持ちい程の青空であった。

G3-X 氷川誠 及びGトレーラーの小沢と尾室は、人々を絶対に地下シエルターから出ないように注意し、ギルスー葦原涼の感覚を頼りにそれぞれのバイクに跨りアギトが現れるであろう場所へと向った。

ギルス曰くアギトの感覚を感じるのは以前と同じ場所…。
それはかつて翔一が経営していたレストランの場所であった。

だが、未だにその場所へと辿り着く事はなかった。

彼らの行く先を阻んだのはアンノウンの大量発生であった。

アンノウンを倒さなければ先へ行くとは出来ない…。
仕方なくギルスとG3-Xはバイクから降りアンノウンと対峙する。

「はあっ…！」

G3-Xは専用武器であるサブマシンガン スコーピオン を駆使し、次々とアンノウンを倒していく。

続いて横からアンノウンが攻めてくるが、G3-Xはその気配に気づき、振り返りストレートパンチを喰らわせる。

アンノウンはその一撃で爆発してしまった。

「これは…。」

G3-Xは全身に武器が装備されている自身のパワードスーツを見て、かつてのG3との戦闘能力の違いに驚いた。

だがそれも無理はない事であった。

G3ではアンノウンを1体撃退するのさえ苦戦を強いられた。

それなのに、このG3-Xではアンノウンを倒すのが格段に楽になっているのだ。

これならアギトと互角に戦う事が出来る…。

そう考えると、再びアンノウンへと向かって行った。

Gトレーラー内では、その光景をG3-Xに内蔵されているカメラを使い、トレーラー内のモニターに映していた。

次々とアンノウンを倒していくG3-Xの映像を見て、尾室は「凄い…。」と呟いた。

「凄いですよ、小沢さん。アンノウンを一撃で倒すなんて!!」

喜ぶ尾室に小沢は「当然よ。」と返した。

「なんとってG3-Xは対アギトように作ったんだから。その破壊力や耐久力は以前のG3とは比べ物にならないわ。…もっとも設備不足は否めなかったけどね。」

世界が地区ごとに分岐された影響で、G3-Xは今この地区にある設備や部品だけで開発した。

一時はこれで大丈夫か？

そう囁かれていたが、この様子を見る限りG3-Xならアギトと対峙できる。

心配があるとすれば氷川の体の方であった。

以前アギトが襲撃してきた際、氷川はG3として戦ったが全く歯が立たず惨敗してしまい、G3は原形がわからない程破壊された。

それにより装着者の氷川も血塗れで動けなくなる程の重傷であった。医療設備や薬も満足になく、G3-Xの装着も絶望的か？

そう思われていたが、氷川は己の精神力で怪我を治し再びG3-Xの装着に志願した。

訓練の時も「苦しい。」や「辛い。」とは一言も言わなかったが、小沢は氷川が誰もいない所で苦しそうな表情をしていたのを知っている。

だが氷川が自ら志願したのだ。

ならば大丈夫…とそう信じるしかなかった。

だが…アギトとの戦いでもう1度傷口が開いてしまったら…。

それにもう1つの心配の種はG3-Xの隣で戦うギルス…。

ギルスである涼は、以前Gトレーラーの面々に変身するたびに体が急激に衰える副作用があると話していた。

昨日もアンノウンとの戦いで変身し副作用が起き、夜中まで眠って

いた。

つまり2人とも何時倒れるかもわからない、危険な状態であった。

果たして大丈夫であろうか？

隣で嬉しそうに戦いを見ている尾室とは違い、小沢は不安げにモニターを見ていた。

「グワアオオ!!!」

ギルスのヒールクロウがアンノウンへと直撃し、アンノウンは呻き声と共に爆発していった。

時間はかかったがこれで全部である…。

また現れるかもしれないがもう構ってはいられない…。

先に進まなければ…。

早くアギトの場所へ行かなければ、アギトと戦う前にまた副作用が来ってしまう…。

そう考えたギルスは急いで専用バイクであるギルスライダーに跨る。それを見たG3-Xも近くに停めてあった、白をベースとし青の模様が入った大きめのバイク。ガードチェイサーに跨った。

エンジンを鳴らすギルスであったが、急にエンジンを止めた。行き成りエンジンを止めたギルスをG3-Xは驚いたように見えた。

「どうしたんですか葦原さん？」

G3-Xがそう聞くがギルスは何も答えない…。ただ黙って後ろを見続けていた。

「来るぞ…。」

ギルスがそう呟くと、ゆっくりこちらに歩いてくるアンノウンが目に入った。

鯨をモチーフとした姿に青と紫の体を女性タイプのアンノウン。

手には鉄の様な武器持たれており、それをギルスとG3-Xへと向ける…。

そのアンノウンの名は神の使徒 水のエル。

水のエルからは今までのアンノウンとは違い、天使の様な神々しさ、それに危険な気配を感じる…。

アギトの能力の無いG3-Xでさえ身のエルを見た瞬間それに気付いた。

「珍シイ…アギトノ出来ソコナイノギルス。ソレ二人ガ模シタアギト…。中々興味深いワ…。」

ギルスとG3-Xを見てく水のエルはそう静かに呟く。だがその声には見えない恐怖が感じられる…。

G3-Xは今までとは違い喋るアンノウンに「このアンノウン…喋るのか？」と驚いていた。

「何故カハワカラナイ…。デモ、アギトハ始末シナケレバイケナイ…。ダカラギルス、貴方ヲコロサセテ…」

水のエルは怨嗟のドウ・サンガと呼ばれる武器を構え、ゆっくりと2人に近づいてくる。

今の言葉に恐怖を感じ、ギルスは体全身に寒気を感じた。

「く、来るぞお!!」

「はい!!」

震えながら声を振り絞りギルスは叫んだ。

それを聞いたG3-Xは足に装着されていたスコープオンを手に取り、水のエルを待ち受けた。

ギルスとG3-Xが大量発生したアンノウンと戦う数分前…。

今まで何も無かったその場の背景が歪みオーロラが出現した。

そこからゆっくりと現れるアギト…津上翔一。

翔一が出てくるとオーロラは自然に消滅し、その場に翔一だけが残えう。

またここを選んでしまった…。

懐かしそうに辺りを見渡しそう心の中で呟く…。

そこはかつて自分がレストランを経営していた場所であり、1回目

の襲撃の際、ギルス達と戦った場所であった。
初めて店を開いた時、嬉しそうに笑っていた姉や義兄の姿が今でも
思い浮かぶ…。

あの時はあの幸せがまだ続くと思っていた…。
だがそんな生活一瞬にして崩れてしまった…。
あの事件の所為で…。

「翔一君!！」

突然、背後から自分を呼ぶ声が聞こえてくる。
翔一はその声の主を確認せずともわかった。

「真魚ちゃん…。どうしてここに?」

後ろを振り向きながらそう尋ねる。

背後にいたのは翔一が考えていたとおり真魚であった。

しかし何故この場所にいるのか?

昨日、わざわざ襲いに来る日を知らせたのだ。

それならば絶対に避難場所から出無い…いや、出させられない筈…。

そう考えていると真魚は「勝手に出てきたの…。」と答えた。

「どうしても翔一君と話したくて…。それで…。」
「復讐…ですか。」

真魚が途中まで話していると、突然それを翔一が遮る。

その言葉に真魚は思わず「えっ？」と言ってしまった。

「ようは復讐ですよ？ 真魚ちゃんの両親を殺したのは俺だ…。だからこそ避難施設を出てまで、この醜い、人間でもない化物に復讐しに来たんですね？」

翔一は真魚を睨みつけ、力強い口調でそう言った。

酷い事を言っているのは自分でもわかっていた…。ただ信じられないのだ。

真魚個人ではなく、人間全体を…。

どんな罵倒が返ってくるかと思っていたが、真魚はいきなり「ごめんなさい。」と謝った。

この様相がいの行動に翔一は驚いてしまった。

「私は…翔一君に謝りたかった…。私の両親の所為で翔一君のお姉ちゃんを…翔一君の人生を滅茶苦茶にしちゃったから…。」

地下シエルターを出るという危険を冒してまで真魚がしたかった事…。
それは翔一に謝る事であった。

真魚はその後も畑の野菜を育てている事や、翔一の事件の夢を見る事などを話した。

「人間を信じられない気持はわかるよ…。でも、それでも翔一君には戻って来て欲しい…。だから…。」

そこまで話すと翔一は「もういい…。」と静かに呟く。

「何と言われようとも…姉さんや哲也さんを殺した人間を許せない…。」

翔一は右腕をゆっくりと前に出す。

「姉さんを殺された時からずっと…人間の復讐だけを目的に生きてきた…。だから…ごめん、真魚ちゃん…。」

悲しそうに言うと、翔一の腰に金色のベルト　オルタリング　が出現する。

そして先程前に出した右腕を引き、次は戻した右腕をゆっくりと前に出していく。

「変身…！」

その叫びと同時にオルタリングの両端のスイッチを両腕で力強く押した。

その瞬間、翔一の体は眩い光に包まれる。

光が収まると、そこには黒のスーツに金色の鎧、金色の角と赤い瞳をもつ戦士がいた。

言わずともその戦士の名は仮面ライダーアギト…。

アギトはゆっくりと真魚に近づいて行く。

「俺は姉さんを殺した人間を許さない…。でも…今は真魚ちゃんには逃げて欲しい…。やがて殺すことにはなるだろうけど…。今は逃げて欲しい。」

それは復讐の鬼になったアギトの優しさであった。
昔からの知り合いであり、ただ1人自分に謝ってくれた真魚を、出
来れば殺したくはなかった。

逃げて欲しい…。

そう考えていたが真魚は逃げようとはしない。

真魚にも覚悟は出来ているのだ…。

家族のしてきたあの事件を報いる覚悟が…。

一向に逃げようとならない真魚を見てアギトは「そうか…。」と悲し
そう腕を振り上げる。

「さようなら…真魚ちゃん…。」

せめて苦しめない様に一瞬で…。

アギトの拳が真魚の頭に向かって振り下がる。

自分に迫って来る拳…。

だが不思議と怖くはない…。

真魚は目を瞑らず、自分に迫ってくる拳を見続けた。

「さようなら…伯父さん、太一…それに翔一君…。」

口に出してきたもの以外も、氷川や小沢それに葦原…出会ってきた
全ての人間に別れを告げる…。

これで両親に会える…。

両親にあつたら今度は一緒に翔一君に謝ろう…。

アギトの拳が真魚に直撃しようとしたその瞬間…。
その拳を受け止める腕が現れた。

突然現れたその腕により、アギトの腕が掴まれる。

「う、受け止めた!？」

それは確かに人間の腕であった。
だが人間がアギトの腕を受け止めるなんてありえない…。

アギトの拳は一瞬で岩をも砕くほどの力だ。
それを受け止めるなんて…。

驚きながら突然現れた、自分の腕を受け止めたその男を睨みつけた。

「本郷さん…。」

真魚は突然自分の隣に現れた人物 本郷猛 の名を驚いたように呼んだ。

本郷は腕を掴みながら、真魚の方を見た。

「さよならなんて言っちゃ駄目だ…。生きるんだ…。例えそれがどんなに辛くても、死んじゃ駄目だ…。」

そう言つと掴んでいた腕を放しアギトを蹴り飛ばす。
その一撃は重く、とても人間が出した蹴りとは思えなかった。

本郷はアギトを睨みつけた。

「復讐：その気持ちはわかる。ただ、奪っていい命なんて無い…。それにわかってるはずだ、復讐がなにも生み出さないと…。」

それを聞いたアギトは嘲笑うように「奪っていい命なんて無い？」と呟いた。

「貴方に何がわかるんですか。俺や姉さんはただの人間だったんだ、急にこの力を手にした瞬間、人間から化物や悪魔…そう見られ続けた俺の気持ちが！！ 復讐にしか生きられない俺の気持ちが！！」

アギトがさそう叫ぶと、本郷は「お前の気持ちはわからない、でも苦しみはわかる…。」と静かに返した。

そしてゆっくりと革ジャンを開け、腰に装着されたベルト タイフーン を見せた。

「俺もライダーだからな…。」

そう言うと左腕を腰に置き、右腕を左肩の斜め上に伸ばす。

「ライダーアア…。」

右腕を大きく旋回させ、丁度右肩の位置まで持ってきて旋回を止め、右腕を天が差すように伸ばす。

そして先程とは反対に右腕を腰の位置に引き、左腕を右肩の斜め上に伸ばした。

「…変身!！」

その掛け声と同時にベルトのタイフーンが輝き、中の風車が回転する。

風と光が本郷を包み込み、徐々にその姿を戦士へと変えた。

「本郷さんも…ライダー…。」

ライダーは恐怖の対象…。

しかし真魚には、本郷が変身したライダーに優しさと強さを感じた。

「俺は知らない…、こんなライダー…。」

自分の知らないライダーの登場に驚くアギト…。

いや姿こそは自分と酷似しており、アギト系のライダーとも感じる事は出来る…。

だがアギトとはまた違った感じがした。

ポロボロのスーツや触角からは、スーツの劣化などではなく歴戦の勇士が感じられた。

「俺は…。」

首に巻かれたマフラーが美しく風で靡く…。

銀色の手袋を力強く握りしめる。

昨日決意したのだ。

例えそれがどんな結末になろうとも…。
過ちを犯したのがライダーなら、仮面ライダーとして人間を守る決
意を…。

1号ライダーは力強く叫んだ。

「俺は…仮面ライダー。別世界から人間を守るためにやって来た、
正義の戦士…仮面ライダー!!!」

D part (後書き)

纏まらなかった…。

本当は戦闘シーンも入れるつもりでしたが、セリフもまだ入れてないような下書き状態で1万3千文字以上…。

無理…。

と言う事で2話に分けました…。

恐らく後3話くらいは続く様子…。

早く響鬼&スーパ―1編を書きたい…。

この世界で最強のアンノウンは水のエルです!!

他のエルではギルスとG3では倒せないような気がして…。

そこで取りあえず強化版でも何にもない水のエル…。

ついでに水のエルはあるサイトで、ある絵を見て女性の怪人にしました。

そもそも憑依?していた人間も女性なわけですし…。

それに女性怪人の方が恐ろしさが出ませんか?

私はそう思っています。

それと話は変わりますが、最後の台詞は原作版を参考にしました。

いやあ、原作版は面白いですね。

あの鬱エンドが最高です。

同じ理由で原作版Blackやキカイダー、スカルマンも好きです。

それでは次回から本格的な戦闘シーンです。

E part (前書き)

Eパート投稿です。

時間が掛かった…。

はつきり言って文章が変かもしれません…。

もしおかしな個所があったら言ってください直ぐに直します…。

人間を守る為、復讐に溺れたアギトを救う為、本郷猛が変身した正義の戦士 仮面ライダー1号。

自分の知らないライダーの登場に驚いていたアギトであったが、「別世界から…。」という言葉である事を思い出す。

「別世界…。そうか、別世界から来たのか。」

アギトは恩人であり、この世界を支配しているライダーの事を思い出す。

彼も以前「別世界」を旅したなどと話していた。

最初は別世界があるなど俄か信じられなかったが、彼の能力を見た以上信じざるえなかった。

別世界があり、自分達の知らないライダーがいるなら1号ライダーの登場も納得が出来る。

しかしある疑問が残る。

別世界から来たなどというが、そう簡単に別世界から「この世界」に来れるのであるのか？

彼ならそれが可能かもしれないが、目の前のライダーは彼とは異なる姿をしている…。

その事から彼とは違う種類のライダー…。

だが、そんなことどうでもいい…。

上手くいけばこれで済むのだから…。

1号ライダーはゆっくりと真魚の顔を見た。

何をされるのだろう…。

幾ら本郷が変身したライダーだからと言っても敵でないとは言いきれない…。

そう思い、心臓を鳴らしていたが、1号ライダーは優しく語り始める。

「真魚ちゃんは、誰が何と言おうと人間だ。だから、死んでもいいなんて思っちゃいけない…。生きるんだ。例えばそれがどんなに苦しい事でも、生き続ければいつかきつと希望が見える。」

幾つもの戦いから人間の弱さ、人間の強さを見てきた1号ライダーだからこそ言える台詞であった。

本当に希望があるのか…。

そんな事はわからない…。

だがその言葉は暗闇の中にいた真魚の心に波紋を投げかけたことは間違いない。

真魚は力強く「はい…。」と返事した。

「アギトは助ける…。だけど、もし止められなかった時は…。せめて彼の心を苦しみから解放してあげたい…。」

その言葉の意味を真魚は理解出来た。

最悪の結果、翔一を殺すという事を…。

人間である自分には生きる事を望み、アギトである翔一は殺してしまいかもしれない…。

果たしてその答えに1号ライダーもどれほど苦しんだか…。

人間を守る為に戦ってきた彼は、何があっても人間を守る…。それが導き出した答えであった。

その会話が聞こえたアギトは「ははははは…。」と小さく笑い始めた。

「残念ながら俺は止められませんよ…。人間を一旦消す…。これが、彼の…そして俺達の決意ですから…。」

「人間を一旦消すだと…？ それに彼とは一体誰だ！！」

人間をただ消すというのはまだわかる。

今まで戦ってきた歴代組織も人間を邪魔ものとし、幾度となく抹殺しようとしていたからだ。

だが人間を一旦消すとはどういう意味なのか？

それに彼とは誰だ…？

そう疑問を感じ質問する1号ライダーだが、アギトは「それは教えられませんよ。」と答え、「だけど…。」と続ける。

「俺を倒したら教えてもいいですよ…。」

そう言いながらアギトは戦闘態勢をとる。

その答えを聞いた1号ライダーは残念そうにアギトを見た。

「戦うしかないんだな…。それしか、お前を救う手段は無いんだな

…。」

「俺を救えるかはわかりませんが…、戦うしか道はないですよ…。」

「そうか…。」と呟くと、真魚に少し下がっているように頼むと1号ライダーも戦闘態勢をとった。

真魚は言われた鳥に数歩後ろへと下がる…。

後ろへ下がった事で気付いたが、2人の周りの空気が張り詰めていた…。

誰も2人には近寄れない…。

一陣の風が吹くと2人同時に動きだした。

「とおうつ!!」

「はぁあっ!!」

拳を構えながら互いへと向かっていく。

まだどちらも大技も出さずに、単純なキックやパンチのぶつかり合い…。

だが、互いに御互いの技を腕や体全体を駆使し防いでおり、一回も体へと拳が入らない。

格闘が得意な姿 グランドフォーム と互角に戦う1号ライダーに、アギトは内心驚く…。

こんな仮面ライダーがいたなんて…。

これなら、本当に自分の願いに近づけるかもしれない…。

そう感じながら、パンチを繰り出した。

1号ライダーは左腕でそれを受け流した。

強い…。

1号ライダーは今まで数多くの怪人とは戦ってきたが、ライダー同士戦った事がなかった。

最も、自分が洗脳された振りをしていた時や、同等の能力を持っていたシヨッカーライダーとの戦った時は別だが…。

初めてのライダーとの戦い、それに自分に勝る劣らず強さを目の前のライダーは持っている…。

どうせなら、違う形で仲間として出会いたかった…。

だが、彼にも敵となった理由があるのだ…。

そう同情を感じた為か1号ライダーの繰り出した蹴りに一瞬の間が生じた。

それを見逃さずアギトは右足を受け止め、腕に力を込めて後方へと投げ飛ばした。

投げ飛ばされた1号ライダーが地面に腹を向けて倒れる姿を想像したアギトであったが、1号ライダーは空中で数回転して体勢を立て直す。

そして華麗にに地面へと着地すると、大地を強く蹴り空高く飛び上がった。

「フライングライダーアアア… パアアンチ!!!」

落下速度が加わり空中から繰り出される力強いパンチ。

両腕をクロスさせ、直撃を防いだアギトであったが、それでも体全体に鋭い痛みが走り、後ろへとよろけてしまった。

1号ライダーはその隙に両足でアギトの頭を挟みこんだ。

「ライダーアアアシザアアス!!」

頭を挟みこんだままアギトを投げ飛ばす。

急の攻撃に対処出来ず地面に叩きつけられたアギトは苦しそうに蠢く。

攻撃の手を休めてはいけない…。

起き上がって来るアギトへと更なる必殺技を喰らわすべく一気に駆け寄った。

アギトはその行動を見て不敵に笑う…。

「待つてましたよ…。」

そう言うとオルタリングの右側のスイッチを叩いた。

その瞬間オルタリングの中央から炎の力を宿した刀 フレイムセイバー が出現し、それを掴むと同時にアギトの姿が変わる…。

赤色へと変わった右腕と胸部の鎧…。

これこそアギトの持つ第2の姿であり蝶感覚の姿 フレイムフォーム である。

「姿が変わった…。くっ!!」

「たあああああああつ!!」

突如の姿の変化に驚いた1号ライダー…。

だが無理もない…。

彼の知っているライダーはそんなフォームチェンジなどしないのだから…。

強いて言うならストロンガーのチャージアップや、スーパー1のフ

アイブハンドに通じるところがあるのかもしれない…。

1号ライダーは振り下ろされるフレイムセイバーを避けきれず、胸部に大きな傷を付けてしまった…。

幸い致命傷とはならなかったが、それでも傷は大きく、その場に片足を突いてしまった。

互角…。

2人の戦いはまだ始まったばかり…。

どちらが勝つのかはまだ、誰にも分からない…。

それはこの世界を支配する存在さえ分からない…。

1号ライダーとアギトが死闘を繰り広げる頃…。

ギルスとG3-Xも水のエルと死闘を繰り広げていた。

「グアツ!!!」

水のエルの一撃を受け、地面を転がり倒れるギルス。

先程発した言葉の通り、水のエルが狙うのはアギトの力を不完全ながらもつギルスのみ。

ギルスと共に戦うG3-Xに関しては、アギトの力を持たないただの人間が装着している為、興味はあるが基本的に無関心…。

攻撃を受ければ、殺さない程度に反撃する…。

それでもその一撃一撃が重く、それを喰らったG3-Xはギルスと反対側で倒れていた。

「何ナノ？ モウオ終イナノ？」

不気味に笑いながら水のエルはギルスへと近づく。

だが、水のエルが近づいてきているのに、ギルスは倒れたまま動かない…。

激痛で今の言葉が聞こえなかったのか？

それとも、もう意識がないのか？

もっと苦しめて殺そうと思っていたのに、もう死んでしまったのか…残念。

そう考えながら、更にギルスへと近寄る…。

「かかったな…。」

水のエルが自身の射程に入った瞬間、ギルスはそう小さく呟き、右腕を水のエルに向け触手状の鞭　ギルスファイラー　を伸ばした。ギルスファイラーは真直ぐ水のエルへと向かっていく。

不意打ちが成功した…。

致命傷とはいかずとも多少なりのダメージを負わせる筈…。

そう考えが、現実はそのほど甘くはなかった。

水のエルは慌てる様子も見せず、難なくギルスファイラーを片手で掴む。

そして、ギルスファイラーを引つ張った。

途中、宙に浮きながらギルスは水のエルの足元へと引き寄せられる。

「カカッタナ？　コノ程度ノ攻撃ガ…。ダケド、所詮アギトノ不完

全体ナンテコンナモノカ…。」

そう言いながら、片足でギルスの腹部を踏みながら、自身の武器である怨嗟のドウ・サンガの刃をギルスの右腕へと深々と刺していく。右腕から発する想像を超える痛みに、ギルスは「アガア…ア…ア…ア…。」と呻き声を上げる。

「グシャ…」と辺りに鈍い音が響き渡った。

それはギルスの右腕が切断された音であった。水のエルに赤い鮮血が飛び散る…。

「綺麗ナ血…。」

ギルスへとそう吐き捨てる。

右腕を切断された痛みはギルスの全身をかけ廻った。腹部を水のエルに踏まれているが、そんな事構わずにのたうち暴れまわった。

「苦シイ…。大丈夫、コレデ楽ニシテアゲル…。」

そう言いながら再びドウ・サンガを構える。

刃の先はギルスの心臓…。

避けなければ殺される…。

だけでももう避ける力すら残っていない。

なにもせず、このまま死んで行くのだ…。

ドウ・サンガが心臓目掛けて振り下ろされた。

「うおおおおおお!!」

心臓に刃が突き刺さる瞬間、先程まで倒れていたG3-Xが雄叫びを上げ水のエルに体当たりをしかけた。

予想外の体当たり回避られなかった水のエルは、体勢を崩しギルスから離れてしまった。

たかが人間如きが余計な事を…。

苛立ちを感じながら、「はあ…、はあ…。」と息を切らしながら構えるG3-Xを睨みつけた。

その冷たく、鋭い眼光を感じたG3-Xは、思わず目を逸らしてしまいそうになる…。

だけど、目を逸らしてはいけない…。

戦うんだ。

人間として…。

ギルスである葦原涼を守る為に!!

「うわあああああ!!」

左腕に装着されている小型の剣 ユニコーン を手に持ち、水のエルへと向かって行く。

何度もユニコーンを水のエルへと振り下ろすが、先程の不意打ちとは違いこんな攻撃当たる筈がない…。

水のエルは難なくかわし、逆にドウ・サンガを腹部に命中させ弾き飛ばした。

強化服から火花が散る程の一撃に倒れそうになるが、手を地面につ

き何とか持ち堪えた。

何故だ…。

その姿を見た水のエルは、G3-Xにある疑問が生じた

「何故…何故、才前八私二立子向カウ？ 私達八決シテ人間ヲ襲ワナイ…。ダカラ、ソコデ倒レテイレバソレ以上傷ツカナイデ済ンダンダゾ…。」

人間をアンノウンが襲わないという事を、人間達の一部は気付いているようであった。

目の前にいる人物らは恐らくそれに気付いているであろう。

だったら何故、ただの人間であるG3-Xが必死にアンノウンを倒そうとしているのか？

それが水のエルにはわからなかった。

それを聞いたG3-Xは「だったら…。」と自信が感じた疑問を口にし始める。

「そもそも何で貴方達はアギトしか襲わない？^{アンノウン} 何で人間を襲わないんだ？ 誰かに命令されているのか？」

この世界ではアンノウン以外にも様々な怪人は確認されていたが、その殆どが人間を襲っている。

だとしたらどうして、アンノウンはアギトの可能性を持つ者しか襲わないのか？

何か指導者の様な存在に命令されているのか？

これは今まで氷川や小沢達が疑問に感じていた事であった。

それを聞いた水のエルは静かに話し始める…。

「何故アギトシカ襲ワナイカ？ ソンナノ…。」

そこで言葉が止まる…。

ソンナノ…何ダ？

何故自分はアギトしか襲わないんだ…？

人間に対して特別な感情があるから？

…違う。

アギトに恨みでもあるのか？

…違う。

誰かに命令されたのか？

…違う。

特に感情など無い。

誰かが人間を殺すなと命令したわけでもない…。

ならば何のために、人間を襲わずアギトだけ抹消しようとするのか？

本能？

何の？

そもそも今までの行動に理由があるのか？

ワ…ラ…イ…。

ワカ…ラ…イ…。

ワ…カ…ラ…ナ…イ…。

ワカラナイ…。

ワカラナイ…ワカラナイ…ワカラナイ…ワカラナイ…ワカラナイ…
ワカラナイ…ワカラナイ…ワカラナイ…

水のエルは頭を下げ考える…。

考えた事もなかった疑問…？

当たり前だと思っていた行動の理由がわからない…。

その理由がわからない、理由もわからない…。

何故…？

暫くして水のエルはゆっくりと頭を上げ、再びG3-Xを睨みつけた。

その時感じたのは、先程とは全く別の雰囲気…。

今までとは明らかに違う、殺気や禍々しさの様なものが感じられた。

「何故…アギトラ襲ウカ…。理由ナンテナイ…。アギトアギトアギトアギトアギト…アギトダカラ殺ス…。オ前モアギトカ？ ナラバ殺ス…！」

先程の冷静な感じとは違う…。

暴走したのか？
先程のあの一言だけで…。

「アギトアギトアギト…死ネエエエエエエエ！！」

水のエルはドウ・サンガを振り回し、自身の念動力を發揮し辺りの物を片っ端から破壊していく。

明らかにアギトにだけ危害を加えるという先程までの水のエルとは違かった。

もし自分がここで水のエルを止めなければ、地下シエルターに避難している超能力者以外の人々も殺されてしまうかもしれない。
何とかして止めなければ…。

そう考えたG3-Xは近くに停めてあったガードチェイサーから、ユニコーンより大型の剣 デストロイヤー を取り出し右腕に装着した。

デストロイヤーの刃が振動させと水のエルへと駆け寄る。

「はあああつ！！！」

飛んでくる瓦礫や、繰り出されるドウ・サンガを避け、デストロイヤーを暴走する水のエルへと振り下ろした。

暴走している為か、先程のユニコーンの時の様に避けようとはせず刃が体に直撃した

それにより水のエルの体には大きな傷跡が残った。

この戦い初めての手応えのある一撃にG3-Xは「やった…。」喜びを感じた。

だがその一瞬の喜びも束の間、水のエルはG3-Xを念動力で吹き

飛ばした。

吹き飛ばされ、激しく地面を転がる。

その一撃で通信機能が故障したらしく、小沢達との通信が出来なくなってしまうた。

必死に起き上がろうとするG3-Xだが、今の一撃はアギトとの戦いの際に出来た傷に響き、上手く動く事が出来ない…。

その間にも水のエルが止めを刺そうと近づいてくる。

暴走している水のエルはただの人間であるG3-Xもとい…氷川を殺すことを全く躊躇わない。

先程ギルスにしようとしていた様に殺そうとしているのだ。

G3-Xは必死に体を動かそうとするが、水のエルの行動はそれよりも速い。

このままではG3-Xが殺されてしまう…。

その光景を右腕を切断され、薄れゆく意識の中でギルスは見ていた。

アギトの時も感じたが、自分はまだまだ弱い…。

精神的にも、肉体的にもだ…。

ギルスへの変身の能力を手に入れた時から何も変わっていない…。

交通事故に遭い生死の境を彷徨い一命を取り留めた際に手にした変身能力…。

その時はただ単純に怖かった…。

ライダーは人間から恐怖の対象として見られており、この変身を知

った家族からは拒絶され…。
この力を手にした所為で、アンノウンが自分を狙ってくるようになった。

ギルスの方でアンノウンと戦い倒す事が出来るが、変身の副作用により自分が何時死ぬかも分からない…。
その恐怖から、今まで付き合っていた恋人と別れ、子供の時から憧れていた水泳選手という夢も断ち切った。

毎日、毎週、毎月…アンノウンに追われる日々が続いた。

全てに疲れながらも何とか生きていたある日、涼はギルスに変身しアンノウンに襲われる少女を助けた。
その少女こそが風谷真魚であった。

真魚はギルスへの変身を見ても涼を拒絶することはなく、自身をG3関係の氷川や小沢達に紹介してくれた。

その時ギルスになってから初めて人間に受け入れられた。

真魚や小沢と話しているうちに、アンノウンに襲われるのが超能力者だけという事を知る…。

同時に真魚が超能力者という事も知った。

その時から、この力で人間を守る事も悪くない…そう感じ始めた。

暫くして真魚から自分と同じ能力を持つ男の話が聞かされた。
それこそが津上翔一アギトの話であった。

彼が信じていた人間によって自身も殺され、姉を殺された事…。
人間に復讐し始めた事…。

本当はとても優しい人物であった事…。

その全てを聞き、真魚の悲しそうな顔を見て涼は津上翔一止める事を決意した。

そう意気込んでDCDディケイドが人々を襲い始めた時、敢然とアギトへと挑んだ。

絶対に連れ戻してやる…。

そう意気込んでアギトへと挑んだ筈であったが、結果としてアギトの力の前に敗れてしまった…。

何故負けたのか？

それは自分が弱いからだ…。

人間を守るとしても、自分の力では下級なアンノウンからしか守る事は出来ない…。

精神面でも決して強いわけではない…。

無力なのだ…。

なにも守れず、なにも倒せやしない…。

今だって自分を助けてくれたG3-Xさえ守れやしない…。

力が欲しい…。

アギトを止める事が出来る力を…。

自分を受け入れてくれた人々を守る力を…。

水のエルがその攻撃を避けている隙にGX-3はその場から移動した。

「はあっ!! うりゃああ!!」

「ナっ…馬鹿ナ!？」

ギルスクロウが水のエルへと何度も命中する。

幾つもの攻撃に正気を取り戻していった水のエルはドウ・サンガを突きですが、今度はエクシードギルスがそれを避けていった。

凄い…。

自分でもそう感じた。

この力は通常のギルスとは比べ物にはならない…。
水のエルの攻撃が止まって見える…。

肩のギルスアームクロウで水のエルを切り裂く。

流石にこのままでは危ないと感じ、水のエルは念動力でエクシードギルスを無理やり吹き飛ばした。

「不完全ナギルスガアギトノカラ得ルナンテ…。」

明らかにこちらの方が歩が悪い、一旦ここは逃げなければ…。

逃げようとする水のエルだったが足に何かが巻きついており、逃げる事は出来ない。

足に巻きついていたのはギルスの触手　ギルスステインガー　であった。

「これで終わりにする!!」

その声と同時にエクシードギルスはその場から離れ、水のエルに向かってに向かってロケット弾が発射された。逃げようにも再びギルスステインガーが体に巻きつかれていた…。

「オ…オノレエエエエエエ！」

断末魔の叫びを上げると、ロケット弾が見事命中し水のエルは爆発していった。

2人の戦士はその光景を見て「やった。」感激の声を上げた。

するとその光景をGトレーラー内から見ていた小沢と尾室が、Gトレーラーから降りて2人の側へと駆け寄った。

「やったじゃないの氷川君！！」

「はい、小沢さん達の作ったG3-Xのお陰です。」

仮面の下で頬笑みを浮かべながらそう答えた。

すると隣ではエクシードギルスが何を考えたのか変身を解いた。

このままではまた副作用が起きてしまう…。

そう考えた一同であったが、涼は自分の両腕をまじまじと見ながら「やはりか…。」と呟いた。

「あの力のお陰なのか…、副作用が起こらない…。」

エクシードの力で完全のアギトと同様の力を手にした涼にはもうギルスの副作用は起こらない…。

それを聞いた尾室は「本ですか？」と嬉しそうに聞いてきた。

涼は軽く頷くと、ある方向を見た。

それはアギトがいるであろう場所であった。
水のエルとの戦いで気が付かなかったが、アギトは先程から全く移動していない…。

「行きましょう、アギトを止める為に…。」

G3-Xがそう言うと涼は力強く頷いた。

一体何が起こっているのかはわからない…。

だがアギトを止めるんだ…。

この力で…。

2人はそれぞれのバイクに跨り、小沢と尾室はGトレイラーに乗り込みアギトの場所へと向かって行った。

その頃、1号ライダーとアギトの死闘が続いていた。

どちらも肩で息をしており、常人なら倒れてしまいそうなほど体中に傷が付いていた。

互いに一定の距離をとり動かなかったが、このままでは決着が着かないと感じ、先に動いたのはアギトであった。

「はあああああつ…！」

アギトはフレイムセイバーを構えながら1号ライダーに向かって走り出した。

雄叫びを上げながらフレイムセイバーを前1号ライダーの右肩目掛けて振り下ろした。

その攻撃を1号ライダーは左側に体を動かし避ける。

「掛りましたね…。」

仮面の下でが不敵に笑うアギト…。

そして両腕で掴んでいたフレイムセイバーから左腕を放し、オルタリングの左のスイッチを押した。

ベルトが青く輝くと、フレイムセイバーと同じようにベルトから薙刀状の武器 ストームハルバート が出現した。

左腕でストームハルバートを掴むと、ストムハルバートの刃が展開し左側に避けた1号ライダーへと突き刺した。

「ぐおう!!！」

その攻撃を喰らった1号ライダーは後ろに吹き飛んでしまった。

「もう一発…喰らえ!!！」

ストームハルバートとフレイムセイバーを同時に前に突き出した。後ろに飛び、それを避けた1号ライダーであったが苦しそうに斬られた箇所を抑えた。

「まさか…まだ変身能力があったとは…。」

1号ライダーは先程のグランドフォームともフレイムフォームとも違う新たな姿のアギトに眼を向けた。

右腕はフレイムフォームと同じ赤い装甲、だが左腕は第3のフォームであるストームフォームの青い装甲…。

そして体の装甲は最初の姿、グランドフォームと同じ金色…。

ベルトの色も最初と同じ金色であった。

これぞアギトの第4のフォームであり、異なる3つの能力を同時に使用する事が出来る三位一体形態 トリニティフォーム。

過去アギトがこの姿になったのはギルスとの戦い一度のみ…。

ギルス戦もそうだったが、トリニティフォームになるのはどうしても勝てない相手の時のみ…。

それ程に1号ライダーを強敵と認めていたのであった。

「行きますよお!!」

そう言うと、アギトはフレイムセイバーとストームハルバートを降り回し、1号ライダーを斬りつけようとする。

1号ライダーは左右から繰り出される2本の刃を両腕で弾き、致命傷となる傷を防いでいく。

全てを弾かれて、一向に斬りつけられない…。

ならば…これなら…。

「はあああっ!!」

先程と同じ様にストームハルバートで突きを繰り出す。

それを待っていたと言わんばかりに、1号ライダーはストームハルバートを左腕で掴んだ。

「しまった!!」

そう感じた時にはもう遅い…。

何とかしなければと、残ったフレイムセイバーで斬りつけようとするが、1号ライダーの右腕が手刀へと変わっており自分に振り下ろ

「とおあああああああああああああ！！！！」
「はあああああああああああああああ！！！！」

1号ライダーとアギトは雄叫びを上げると、相手の顔を目掛けて拳を突き出した。

その拳は互いの顔へと見事直撃する。

口の中一杯に鉄の味が広がっていく…。

倒れそうになるが、互いに耐えて先程とは逆の腕で相手を殴りつける。

次は互いの体へと拳が炸裂したが、まだ倒れない…。

それを互いに確認すると再び殴りかかる…。

ただ単純な力と力のぶつかり合い…。

その凄まじい光景を間近で見ていた真魚は「凄い…。」と呟いた…。
こんな痛々しい戦いだが、そんな感想しか浮かばない…。

するとサイレン音が耳へと届いた…。

これはガードチェイサーのパトライトの音だ…。
後ろを振り返るとやはり、こちらに向かってくるG3-Xと涼、それにGトレーラーが目に入った。

G3-Xは真魚に気付き、ガードチェイサーから降りると真魚へと近づいた。

「何で真魚ちゃんがここに…。危ないから地下シェルターで待ってって言ったのに…。」

「ごめんなさい…。どうしても、翔一君に会いたくて…。」

真魚が簡単だが此処に来た理由を話した。

それを聞いても「此処にいると危ない…。」と真魚に戻るように言うG3-Xだったが、涼の「あれを見る…。」の一言で一斉にアギトの方を向いた。

「あれは…アギト。それにアギトと戦っているライダーは…。」

G3-Xは勿論、アギトと叩く別世界の1号ライダーを見た事が無い。

その為始めてみるライダーに驚いていた。

しかも、そのライダーはギルスをも倒したトリニティーフォームのアギトと互角に戦っている。

あのライダーは何なんだ？

そう疑問に感じていると真魚が口を開く。

「あのライダーは…本郷さん。別世界から私たちを助けにやってきた…。」

「本郷さんって…昨日の…。」

その言葉にG3-Xと涼は衝撃を受けた。

本郷の事は知っている。

昨日真魚をアンノウンから助けたという人物だ。

彼がライダーだったなんて…。

しかもアギトと互角に戦う程の人物…。

しかし、別世界とはどういう意味なのか？

真魚にそれを尋ねてもいいが、それよりも先に彼女を避難させなくては…。

「真魚ちゃん、ここは危険だ…せめてGトレーラーの中に居てくれないか。」

そう頼むG3-Xだが、真魚は「でも…。」と躊躇った。

見てみたかったのだ…。

この戦いを…。

この結末を…。

その気持ちをわからなくもないが、まだ子供である真魚がこれ以上ここにいるのは危険だ。

G3-Xはそう考えたのであった。

真魚はその場で立ち止まっているとGトレーラーから尾室が降りてきた。

「真魚ちゃん、こっち…！　こっち…！」

小沢に真魚を連れてくるように言われて、尾室は真魚を迎えに来たのだ。

流石に観念した真魚は「はい…。」と答え、尾室に連れられGトレーラーの中へと入っていった。

G3-Xは真魚がGトレーラーの中へと避難したのを確認すると、アギトと1号ライダーの戦いへと目を向けた。

この戦いは見る者を圧倒させる…。

涼は既に戦いにくぎ付けであった…。

G3-Xも同じように戦いに夢中になっていた。

その頃、この地区の廃墟となったビルで1号ライダーとアギトの戦いを見つめるライダーがいた。

マゼンダ色の体に、緑色の瞳…。

腰にはベルトが巻かれており、そこには幾つものライダークレストが描かれていた。

興味深いのはベルトの上に書かれている文字…。

そこにはこう書かれていた…。

DECADE と…。

彼はベルトに装着されているライドブッカーと呼ばれるカードケースから1枚のカードを取り出した。

「特別だ…力を貸してやる」

ベルトの両端を引っ張り中央のバックルを開くと、そのカードを装填し勢いよくバックルを閉じた。

するとベルトから光球が出現し、真直ぐへとアギトへと向かった。

「…ぐおっ!?!」

「ぐはっ…!!!!」

アギトと1号ライダーは既に何十発という回数を殴り合っていた…。最後に互いの顔に繰り出した同じ必殺技名のライダーパンチにより、2人は遂に後ろへよろけてしまう…。

殴り合う音も聞こえなくなり辺りが静寂に包まれる。

聞こえるのは、2人の口から「はあ…、はあ…。」と吐かれる吐息だけであった。

「強いですね…貴方…。」

「お前もな…。人類の敵というのがもつた位ない位だ…。」

互いに、互いを称えあう…。

アギトは既にトリニティフォームからグランドフォームへと戻っており、2人の体にはこの戦いにより数えきれない程の傷跡が付いていた。

だが、それでも互いの技と力の勝負に清々しさを感じていた。

「さあ…行くぞあ…!!」

「はい、行きますよあ…。」

2人のライダーは走り出し互いに近寄っていく。
再び互いの技が交わろうとした刹那、上空から光球が現れアギトの
ベルトのオルタリングへと入っていった。

その瞬間を見た1号ライダーは動きを止め「何だ、今のは？」と呟
いた。

光球がオルタリングの中へと入っ途端、アギトは苦しそうに暴れ始
めた。

体の内から溢れ出て来る、抑えられない力を感じたのだ…。

熱い…。

体が熱い…。

抑え切れない…。

FORM RIDE AGITO… BURNING!!

「うわぁ…ウガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

謎の電信音が響き渡るとアギトは業火の炎に包まれた。

1号ライダー達はただその光景を見ていることしかできなかった…。

E part (後書き)

疲れた…。

文字数一万越え…。

ギルスのエクシードへの変身は映画版参考です…。

次回も戦闘シーンメインです。

ただこれより長くないと思います…。

それとGW中に更新できずにすみません。

おかしなことがあったら明日修正します…。

F part (前書き)

こんにちは、テストがやっと落ち着いてきました。
と言ってもまだ4教科残っていますか…。

取りあえずFパート更新です。

アギト編も残すところあと1話です。

頑張ります。

追記：先程いくつか修正し、この章に第1話と付け加えました。

F part

見つけたぞお!!

お前が…お前が俺の息子を殺したのか!!

何で? 何で…ママを殺したのよお!!

この…人殺し!!

この言葉をもう何回聞いたであろうか?
数えきれない…。

この言葉を聞く度に、自分の中で何かが音を起てて崩れ落ちる…。

2年前…。

山奥で、体中に真赤でドロドロとした液体を浴びた男がいた…。

男の瞳に映るのは自分が体に浴びたのと同じ液体を被った人々…。
彼らはピクリとも動かない…死んでいるのだ…。

殺したのはアギト…津上翔一…。

翔一の頭の中で様々な感情が渦を巻く…。

怒り、悲しみ、恐怖、狂気…。

どの感情をこの場合使うのか翔一にはわからなかった。

ただ唯一わかる事は、自分がもう【人間】として生きられないという事であった。

いや、姉さん達を殺した奴らと同じ【人間】として生きるなんてこ
つちからお断りだ…。

ここにはもういられない…。

逃げよう…何処か遠い場所に…。

人間と二度と会わないような場所に…。

既に息のない姉と義兄に「さようなら…。」と別れを告げると、1
枚の写真を持って翔一はその場を去っていった。

一般的に家族は不思議な絆がっているとされている…。
正にその通りだ…。

警察は山奥の惨殺事件の犯人を不明にしたが、殺された家族や親類
には犯人が翔一である事が何となくわかった。

自分の家族が翔一達にしてきた事は棚に上げ、殺された家族の無念
を晴らす為…。

聞こえはいいであろう立派な信念を持ち、人々は逃げた翔一を探し
始めた。

人のいない場所へと逃げようとしたが、この広い地球で人間のいな
い場所という方が珍しい…。

それに情報電子機器の普及なども助けになり、翔一が彼らから逃げ
ようとも、次第に彼らに追いつけられていく…。

生物は睡眠をとらなければ生きていけない…。

それは翔一も例外ではなかった。

翔一が睡眠へと入った瞬間、彼らは襲いかかった。

彼らの存在に気付き、咄嗟に起き上がるが既に囲まれている…。

その時に、彼らが口々に言い放つのが冒頭の言葉であった。

だが、その言葉の意味を翔一には理解する事が出来なかった。

何で殺した…？

人殺し…？

何を言っているんだ…？

最初に家族を殺したのは…。

俺の大事な人達を殺したのは…。

お前等じゃないか…。

心の中で何かが壊れ、頭の中が真っ白になっていく…。

何も考えず、腰にオルタリングを出現させアギトへと変身する。

アギトへと変身した途端、彼らの恐怖の声が聞こえた気がした…。
だがそんな事はどうでもいい…。

彼らに向かつて手を伸ばす…。
記憶にしているのはそこまでであった。

意識を取り戻した時、アギトの目の前に広がるのは先程の人々の無
残な姿…。

自分の腕には、あの時と同じ生温かい液体がこびり付いていた…。

それで全てを理解出来た…。

怒りに身を任せ、また…人々を殺してしまったのだ。

変身を解くと翔一はその場から逃げて行く…。

今度こそ、誰とも出会わない場所へと向かう為…。

だが、復讐は連鎖であり、終わりが無い…。

殺された者の家族は、家族や親類の仇をとる為に再び翔一へと襲い
かかる…。

只の人間がアギトに勝てるわけもなく、翔一は彼らを返り討ちにす
る…。

何故、こいつ等は自分を正当化する？

そんな、人物に生きている価値があるのか？

次第に、翔一の心にも雪菜達の復讐心が芽生え始めてきた…。
復讐にしか生きられなくなるのも、時間の問題であった。

逃亡生活から1年…。

山奥の中で翔一は心身共にボロボロになっていた。

何故自分は生きているのだろうか？

それは姉である雪菜に「生きて…。」とお願いされたからだ…。
それが唯一の支えであり、翔一は今日まで生きてきたのだ。

だけど…もう疲れた…。

人々の復讐は終わる事無く、翔一の心に芽生えた復讐心も消える事が無い…。

生きている事自体に疲れた…。

気付けば死ぬ場所ばかり求めていた…。

本当は死ぬならば自分の店か、姉さん達と生まれ育った家がよかった。

だけど、それは無理か…。

もう…何処でもいいかな…。

疲労や餓えにより翔一は遂に倒れてしまった。

指一本すらまともに動く事が出来ない…。

そんな状況の中、自分へと近づく足音が聞こえてきた。

また自分に復讐しようとする奴等か？

それとも自分の肉を狙ってくる獣だろうか？

まあ…どの道、この様では栗鼠にすら勝てやしない…。

どうやらここまでの様だ…。

業炎がアギトを包み込み、地面を揺るがす咆哮が響き渡る…。
苦しそうに体を掻き毟るアギト…。

近づこうとする1号ライダーだったが、炎が壁となり近づく事は出来ない。

炎から感じるのは圧倒的な力…。

その炎はアギトの体へと吸い込まれるように入っていく…。
それに伴いアギトの体は徐々に変化していく…。

「何が起こっているんだ…。」

全くわけがわからない…。

アギトのベルトへと入りこんだ、あの光球は何だったのか？
それにあの電子音は一体…？

「まさか…。」と1号ライダーは辺りを見渡す。

「いるのか？ 俺達の戦いを見ている奴が…。」

周りにいるのはG3-Xや涼、それにGトレーラーの中にいる小沢と尾室…

少なくとも彼らでは無い…。

だがいる筈だ。

自分たちの戦いを監視し、アギトに何らかの力を与えた存在が…。

敵を感知するOシグナルからは何も感じなかった。

Oシグナルが感知できないというと、奴は何処か遠くの場所にいる…。

そう考えていると、再びアギトの咆哮が聞こえてきた。

アギトを包み込んでいた業炎を全てその身に吸収し終えたのだ。業炎を身に纏ったそのアギトは、先程までの姿とは明らかに異なっていた。

「ウゴオオオオ…グガアアアアアアアア！！」

体の奥底から出される、聞く者を震えさせる叫び声…。

溶岩の様に沸騰し、血管が幾つも浮かび上がっている赤い鎧。鎧と同様赤へと変わった頭部のクロスホーンは6本に展開し、瞳は鎧の色と反するように黄色…。

腕には鋭い爪が生えており、腕の鎧には刃が幾つも取り付けられている。

ベルトのオルタリングには赤い爪が入っており、中央の賢者の石は青へと変わっていた。

この姿こそがアギトの幾つもある中で最強のパワーを持つと言われる…、燃え盛る業炎の戦士 アギト・バーニングフォーム。

だが、高い攻撃力を制御できないため、アギトはその自我を失う…。発する声は呻き声と咆哮のみ…。

「ウガアア…。」

アギトは1号ライダーを睨みつける。

先程までの記憶はもう残ってはいない…。

自我は無くとも、本能的に1号ライダーが自分の敵であることを理

解したのだ。

アギトは一気に1号ライダーへと駆け寄った。

「ウグオオオオオオ！！」

咆哮を上げながら左腕で1号ライダーを殴りかかる。

咄嗟に両腕をクロスさせ受け止とめるが、腕から全身に痛みが走った。

先程のアギトまでの力とは桁違いであった。

「ぐっ…、防いだはずなのに何て威力だ…。」

左腕の拳を防いでいる間に、アギトは残った右腕の拳に業火を纏わす。

両腕で左腕を防いでいる1号ライダーには、次に繰り出されるその拳を防ぐ術は無かった。

「グオアアアアアアア！！」

「ぐおっ…。」

アギトは炎を纏った右腕で1号ライダーを殴りつけた。

これぞバーニングフォームの必殺技であるバーニングライダーパンチであった。

ご…。

と辺りに乾いた鈍い音が響く…。

1号ライダーの腹部にバーニングライダーパンチが炸裂したのだ。

その威力は計り知れない物であり、1号ライダーのクラッシャーが

ら鮮血が滴る…。
ダメージが大きく、目眩がし吐き気まで生じてくる…。
次第に立っていることすら出来なくなり、1号ライダーは膝を折り
ゆっくりとその場に倒れていった。

その光景を見ていたG3-Xは「そんな…。」と呟いた。

先程までアギトと互角に戦っていたライダーが、こんなにもあっさり
とやられてしまう事が信じられなかった。
だが、これが現実だ…。

今のアギトは明らかに今までとは違う…。
今までのには、まだ人間らしさがあつた…。
しかし、今のアギトは本能のままに戦う、アンノウンみたいなもの
だ…。

1号ライダーが倒れたのを確認すると、アギトは次の獲物を…G3
-Xと涼を睨みつた。
アギトはゆっくりと2人に歩み始める。

「くっ、変身!！」

人間のままじゃ勝てる筈がない…。
変身しなければ殺される…。

そう感じた涼は咄嗟にギルスへと変身した。
ギルスの姿は、先程新たに手にした姿であるエクシードギルスであ
った。

アギトは2人に歩み寄りながら、ベルトの右腕のスイッチを押した。するとオルタリングから刃が閉じられたアギト・バーニングフォームの武器 シャイニングカリバー が出現する。

シャイニングカリバーを握った途端、刃が展開しエマージユモードから長刀型のシングルモードへと変形する。

それを構えると、G3-Xに向かって走り出した。

「グオアアアアー!!」

G3-Xに向かってシャイニングカリバーを振り下ろした。

危ない…。

そう感じたG3-Xは、ユニコーンを引き抜き盾の様に前に出したが…。

「なっ…!!?」

その行動も虚しく、シャイニングカリバーの一閃によりユニコーンは切断されてしまった。

ユニコーンは切断された事によりシャイニングカリバーはG3-Xの体を斬り付けた。

「ガシャアン」とパワードスーツが破壊された音が響き渡る。

G3-Xは力なく地面に倒れる…。

「氷川あー!!」

エクシードギルスはG3-Xの名前を叫んだ。

すると、G3-Xは「う…う…う…。」と苦しそうに呻き声を上げていた。

どうやら今の一撃だけでは命に別状はなく意識もまだあるようだ。だが、顔が露出する程仮面が破壊され、全身に纏っているパウードスーツにも大きな切り傷が刻まれ、体中から火花が飛び出していた。水のエルとの戦いも癒えていない、G3-Xにはこれ以上動く事が出来なかった。

G3-Xのパウードスーツの損傷と同時に、Gトレーラー内に映し出されていた映像が途絶えた。

どうやら今の一撃で、G3-Xに内蔵されているカメラまでもが破壊されてしまったようだ…。

水のエルとの戦いで、既に通信機能が破壊されてしまっている…。つまり、これにより内部から全く外の戦いが確認出来なくなってしまうのだ…。

「どうしましょう、小沢さん？」

「どうするって…どうしようもないでしょう…！」

情けない声を上げながら聞いてきた尾室に、小沢がそう答えた。

本当にどうしようも無い…。

それは尾室もわかっていている事であった。

一旦G3-Xを連れて退いた方がいいのかもしれない…。

だが、そうしてしまったら、獲物を失ったアギトは自分達を追いかけて地下シエルターの人々を襲うだろう…。

それだけは何としても避けなければいけない…。

小沢達がそう考えている間に、真魚は気付かれないようにそっとG

トレーラーを抜け出した。

「グオアアアツ!!」

「グガアツ!？」

シャイニングカリバーに切り付けられ、エクシードギルスは後方へと吹き飛ばされた。

はつきり言つて、今のアギトは強すぎる…。

アギトとの戦いを想定して作られたG3-Xを一撃で破壊し、アギトと同様の力を持つエクシードギルスさえ凌駕する力…。

それに、互角に戦っていた1号ライダーをも一撃で倒す必殺技…。勝てる筈がない…。

それでもエクシードギルスは立ちあがった。

倒れていたほうが楽にも関わらず立ち上がった。

「ウガアアアアアアア!!」

全身全霊を込めてを込めて、雄叫びを上げながらギルスクロウを振り下ろした。

シャイニングカリバーでそれを防ぐアギトだが、予想以上の力にシャイニングカリバーが後ろへと吹き飛ばされた。

シャイニングカリバーを吹き飛ばす…。

これで精一杯であった。

今の一撃で全ての力を使い、次第に立っている事さえ辛くなってい

く…。
ゆっくり倒れこもうとするエクシードギルス。

だが、アギトは倒れる事すら許さず、片腕でギルスの首を絞めながら持ち上げる。

首を絞める腕に徐々に力が込められていく…。

このままでは見るも無残な姿でエクシードギルスの体が地面へと落ちる。

「翔一君っ!!」

エクシードギルスの首が完全に絞められようとした瞬間、アギトを呼ぶ声が聞こえてきた。

アギトはエクシードギルスを放り捨てると声の主を見た。

声の主は真魚であった。

「翔一君…。もう止めて。こんな翔一君の姿見たくない…。」

真魚は涙目になりながらアギトへと話し始めた。

しかし、アギトの耳にはそんな言葉届いておらず、ゆっくりと真魚へと近づいて行く。

バーニングフォームのアギトにとって真魚はただの新たな標的ターゲットにしか過ぎないのだ…。

「私はね、翔一君が大好きだったよ。料理を作る翔一君とか、面白い駄洒落を言う翔一君とか…。全部大好きだったよ。」

していた。

決死の攻防の後、バーニングライダーパンチをまともに喰らい、立っているのさえやっとの筈…。

倒れていたほうが楽だった筈だ…。

そうにもかかわらず、1号ライダーは再び立ち上がったのだ。

ゆっくり起き上がるアギト…。

暴走しているとはいえ、1号ライダーが立ち上がった事に疑問を感じているらしく、1号ライダーを睨みつけていた。

その視線を感じた1号ライダーは右手を強く握りしめた。

「お前は…さっきの方が強かった。あの拳には魂がこもっていた。

だが、今のお前は違う！！ どんなに力強い拳だとしても…あんな魂のこもっていない拳では、仮面ライダーは決して死なん！！」

力強くアギトに向かって叫んだ。

バーニングライダーパンチは確かに威力の強い必殺技である。

だが、暴走しているアギトには必殺技に気持ちや魂はこもっていない…。

そんな必殺技では1号ライダーは…いや、仮面ライダーは敗れたりはしない…。

1号ライダーは真魚の前に庇うように立つ。

「あの状態から、元の状態に戻して見せる…。約束する…。」

真魚には頷くことしか出来なかった。

1号ライダーが復活したのを見た小沢や尾室は、危ないからと真魚にGトレーラーへと戻る事を促すが、真魚は「見ていたいんです…。」とだけ答えた。

彼女の強い意志が変わらない事を知ると、1号ライダーに任せ小沢と尾室は倒れたG3-Xとエクシードギルスの側へと向かった。

1号ライダーはアギトの方を睨んだ。

復活した事に納得していないアギトは、怒り狂ったような雄叫びを上げた。

「グアガアアア…アアアアア！」

一気に1号ライダーへと駆け寄り、灼熱の力を込めたバーニングライダーパンチを放つ。

一度はこれで倒せるまでとはいかなくとも重傷を負わせる事が出来たのだ。

今度こそ、これで地獄へと送ってやる…。

繰り返されるバーニングライダーパンチ…。

だが、1号ライダーは逃げる事も、避ける事もせず、ただその場で構えた。

拳を振り下ろすと、アギトは驚く光景を見た。

あり得るわけがない…。

バーニングライダーパンチは自身の最強の破壊力を持つ必殺技なのだ…。

それを片腕で受け止めるなんて、絶対にあってはならない事であった。

「グアアア…!?!」

「言ったたろう…。俺はそんな技じゃ倒せないと…。今度はこっちから行くぞお!?!」

驚くアギトに1号ライダーはそう答える。

そして、アギトの拳を受け止めたまま、もう片方の腕でアギトの肩を掴み空中へと投げ飛ばした。

空中で身動きが取れないアギトに向かって、1号ライダーは大地を蹴って高く飛び上がった。

「ライダーアアア…ニイブロオック!?!」

相手の腹部へと膝蹴りを喰らわせる必殺技、ライダーニーブロックをアギトへと喰らわせる。

バーニングフォームは強靱な力の代わりに防御力が低い…。アギトは痛みから痙攣を起こし動けなくなる…。

1号ライダーは攻撃の手を休めず、更なる必殺技を喰らわせるべく両足でアギトの頭を挟んだ。

一見は最初に放ったライダーシザースの様に見えるが、それはその発展形の必殺技…。

ライダーシザースと異なる点は、最後に相手の頭を地面へと激突させることであった。

「ライダーアアア…ヘッドクラッシュアア!?!」

必殺技ライダーヘッドクラッシュシャーが炸裂し、コンクリートへと叩きつけられるアギト…。

その衝撃によりコンクリートに亀裂が走った。

それ程の威力だったのだ…。

「グオオオ…グガアア…。」

頭を地面へと叩きつけられたアギトは、苦しそつにのたうち暴れまわる。

必殺技を連続して喰らい、防御力の低いバーニングフォームでは耐えられないのだ…。

「ググググ…。」

「やはり、まだ立ち上がるか…。」

それでも本能に従うまま、フラフラになりながらもアギトは立ち上がる。

立ち上がる最中、先程エクシードギルスに吹き飛ばされたシャイニングカリバーを見つけ、それに手を伸ばす。

シャイニングカリバーまであと少し…。

そう思った瞬間、2発の銃声が響き渡りシャイニングカリバーが弾かれた。

銃弾を撃った方を確認すると、小沢に支えながらスコープオンを構えるG3-Xが目に入った。

言わずとも銃弾を撃ち、シャイニングカリバーを弾いたのは彼だ…。傷つき、動けなくなるほど重症だとしても、彼はまだ戦っているのだ。

「本郷さん、今です…！」

「おう…！ とおお…！」

G3-Xのその声と同時に、1号ライダーはアギトを殴り飛ばした。後ろへとよろめくアギトへと、更にキックとパンチを喰らわしていく。

一方的にアギトへと攻撃を喰らわしていくが、1号ライダーから恐怖や残虐性は感じられない…。

それどころか、戦いを通じてアギトに何かを教えようとしている様に感じられた…。

「最初に話を聞いた時から思っていた。お前は俺だ…。」

戦いながら1号ライダーが話し始める。

元の世界では伝説と称されるだけあり、会話しながらというのに攻撃の手が全く緩まない。

「やり方を一歩間違えてしまった俺だ…。そして、今のはお前は脳改造を施された俺だ…。」

ずっと感じていた。

この世界のライダーも、アギトも自分達と変わらない存在という事を…。

そしてバーニングによる自我の暴走は、脳改造を施され何も感じず、何も考えられなくなり、ただ目の前の物を破壊するだけの自分…。

今のアギトは最悪な結末になってしまった自分自身なのだ。だからこそ、決めたのだ…。

「俺は…お前を苦しみから解放してやる!!」

力強くそう言うと、アギトの顔面に拳を放った。

後ろへと倒れそうになるアギトだが、何とか踏ん張り1号ライダー

に向かってバーニングライダーパンチを放つ。
だが、それは簡単にも避けられてしまった。

「俺はさっきまでのお前になら負けてもしょうがないと思っていた
…俺も全力で戦ったからだ…。」

仮面ライダーの敗北は決して許されない事であった。
何故なら、仮面ライダーの敗北が人類の未来を絶望へと向かわせる
からだ。

しかし、それを踏まえてもアギトとの戦いでは負けてもいいと思っ
ていた。

だが、今は違う。

今のアギトには絶対に負けては駄目なのだ。

「思い出すんだ！！ お前を信じている人がいる事を！！ 自分自
身の力をコントロールするんだ！！」

キックで吹き飛ばすと拳を強く握りしめる。

この一撃で正気へと戻して見せる。

大地を軽く蹴りアギトに向かいながら腕を大きく振りざす。

その一撃に対抗しようとアギトも腕を振りかざそうとする…。

が、振りかざそうとした瞬間アギトの腕に触手が絡まり、思いつき
りが引つ張られる。

触手の正体はエクシードギルスのギルスファイラーであった。

エクシードギルスもG3-X同様に動けないながら、戦っているの
だ…。

全てはアギトを元に戻す為に…。

ギルスファイラーに引つ張られた為、アギトは体勢を崩し体が曝け出される。

「うおおおおおお…。」

無防備に曝け出された体目掛けて1号ライダーの拳が繰り出される。

「翔ーくーうううううううん!!」

1号ライダーの必殺技が繰り出される瞬間、真魚は喉が潰れるのではないかと思わずほどの大声でアギト…翔一の名を叫んだ。

それは、1号ライダーの拳へと伝わる…。

真魚の思いと一緒に必殺技が放たれる。

「ライダーア… パアアアンチ!!」

真魚の思い、それに皆の思いが詰まったライダーパンチがアギトへと炸裂する。

その瞬間、辺りが静寂に包まれる…。

どうなったのか…。

この思いは伝わったのか？

それとも駄目だったのか？

誰もがそう感じていると、「バリーン」とガラスが割れたような音が響き渡った。

それはバーニングフォームの鎧が崩れ音であった。

灼熱の鎧が崩れ、その下から現れたのは純白の鎧…。
先程まで待感じられた体中の禍々しさは消え、新たな鎧からは神々
しさが感じられる…。

この姿こそが暴走する力を抑え、新たに手に入れた純白の鎧をもつ
光輝への目覚め シャイニングフォーム。

シャイニングフォームへと変わったアギトは後ろへとよろめく…。
体勢を立て直すと息を切らしながら話し始める。

「迷惑掛けてすみません…。」

シャイニングフォームに進化したことにより、失われていたアギト
の自我が甦る。

自分を暴走から救ってくれた者たちに礼を言うと、真魚の方を見た。

「俺は今まで暗闇の中にいた、何も届かないし、何も聞こえない暗
闇の中…。でも、真魚ちゃんが俺を呼ぶ声は聞こえたよ…。」

「翔一君…。」

バーニングフォームへとなっている間、アギトは心の暗闇に捕らわ
れていた。

その暗闇の中でも1号ライダーのライダーパンチと共に真魚の声は
聞こえてきた…。

シャイニングフォームになるには本来なら太陽の力…光の力が必要
である。

今回、アギトをシャイニングフォームへと進化させたのは真魚の声
…それが暗闇を照らす光となったのだ。

この力さえあれば、人間を全滅させる事など雑作ない事だ…。人間への復讐…それこそがアギトの目標であり、生きる希望であった。

だが、アギトが本当に望んでいたのはそんな事ではない…。

全てを決めるべく、ゆっくりと1号ライダーへと向き返る。

「もう貴方なら分かってますよね…。俺が何を望んでいるのか？ どうして欲しいのか？」

そう聞くと1号ライダーは「ああ…。」と頷いた。

長い戦いの内に、1号ライダーはアギトの望んでいる事を気付いた。

しかし、本当にそれでいいのか？

まだアギトを救える方法があるのではないのか？

いや…他の方法は無いだろう。

アギトを救える方法はこれだけなのだ。

「これしかないんだな。お前を救うにはこれしかないんだな…。」

その問いに今度はアギトが静かに頷いた。

それを見た1号ライダーは「そうか…。」と呟いた。

その声には悲しみが感じられた。

「ならば、行くぞっ！！ アギトオ！！」

「来いっ！！！！」

その掛け声が引き金となり、互いに後ろへと下がる。

長期化した戦いと、体に受けた幾つもの必殺技により、どちらも体力はもう限界であり、もうこれ以上戦う事は出来ない…。最後の一撃で全てを決めるべく、残った全ての力を込める…。

「はあああああ…。」

アギトは左腕をベルトの側に置き、右腕を前に出し、腰を落としていく。

それと同時に、青く燃える6本角を模したアギトの青白い炎が1号ライダー目掛けて出現する。

これは最強形態であるシャイニングフォームのアギトが持つ、最強の必殺技を放つ為の動き…。

その必殺技に應えるべく、1号ライダーも腰を下ろし自身が持つ最強の必殺技を放つ体制をとる…。

互いに右足に全エネルギーを込めると、同時に相手へと向かって飛び上がった。

アギトは青く燃え上がるエネルギーを通る毎に、前に突き出す右足に力が溜まっていく…。

1号ライダーは右足を前に出し、幾多の相手を葬った必殺技を放つ…。

「ライダーアアアアアアアアアア！！ キイイック！！」

「てりやああああああああああああ！！！！」

空中で1号ライダーのライダーキックと、アギトのシャイニングライダーキック…2つのライダーキックがぶつかり合う。互いの最高の一撃が衝突した事により、1号ライダーとアギトは眩い光に包まれる…。

真魚達はその光により、眼を瞑ってしまふ…。

1号ライダーとアギトがどうなったのかはわからない…。

だが、分かっている事は…。

次に目を開けた時、この勝負に決着が付いているという事であった。

F part (後書き)

「心に愛が無ければ、真のスーパーヒーローにはなれないよ」
By キン肉万太郎

行き成り名台詞を書いてみたりして…。

キン肉マンの初代OPの歌詞としても有名なこの言葉…。

でも、仮面ライダーにしてもウルトラマンにしても心に愛が無ければスーパーヒーローではないというのは本当の言葉ですよ…。

実際そう言うのが無いのがヒールキャラですし…。

私はこの言葉が大好きです。

もし要望があれば、これからも少しずつキン肉マンの名台詞を紹介したいと思います。

エレメントブレイドでした。

エピソード（前書き）

更新遅れて申し訳ないです!!

テストが終わりいざと書くことと思うと、大学見学や奨学金等やる事が山程…。

それが終わり、気合を入れて書き始めると…。

書くことが真央まらない…再びスランプへと入る。

「仮面ライダー 1971」と「仮面ライダーEVE 上下」を読み直し、書き方を思い出させ、試行錯誤しながらどうにか完成…。今回も1万時超え…。しかも、雑な文章…。

取りあえず、今回でアギト編終了です。次回のライダーの事も少し書きました。

エピソード

皆の思いがバーニングの呪縛を解放し、最強の姿シャイニングフォームへと進化したアギト…。

だが、シャイニングフォームへの進化は1号ライダーとアギトの戦いの決着を意味していた。

今、お互いの全てを掛けた必殺技が放たれた。

「ライダーアアアアアアアアアア！！ キイック！！」

「てりやああああああああああああ！！」

空中でぶつかり合う2人のライダーの、全く異なったライダーキック…。

2つの必殺技がぶつかり合った衝撃で辺りは閃光に包まれ何も見えなくなる。

聞こえてくるのは激しい爆音や、何かが砕け散る乾いた音のみ…。

数秒後、次第に聞こえ続けていた様々な音が聞こえなくなり、それと同時に光は収まっていく…。

真魚達は少しずつ視力を取り戻していき、ゆっくり瞼を開く。

目に入ったのは先程と逆の位置に立つ1号ライダーとアギトの姿…。

果たしてどうなったのだろうか？

辺りに静寂が訪れる。

聞こえてくるのは自身の鼓動のみ…。

息遣いが荒くなるとともに鼓動も大きくなっていく…。

すると、まるでこの沈黙を打ち破るかのように一陣の風が吹き荒れた…。

「ぐおっ…。」

悲痛の声と共に片膝を地面に付けてしまう…。

地面に足を付けたのは銀色の手袋とブーツと、深紅のマフラーが特徴のライダー…。

1号ライダーであった。

口元のクラッシュャーから鮮血が吹き出る。

それはシャイニングライダーキックの威力を物語っていた。

1号ライダーとは反対の方向のアギトは、何事もないかのように立っていた。

誰もが1号ライダーの敗北を感じていた。
が…。

「く…ああ…あ…あ…ああ。」

次の瞬間、アギトは仰向けに地面へと倒れた。

それと同時にアギトの体から光が放出され、変身が強制的に解け津上翔一の姿へと戻った。

1号ライダーは片膝を付いただけで、倒れていなければ、変身も解けていない…。
つまり、ライダーキック同士の激突、及びこの戦い勝利したのは1号ライダーだ。

「翔一君!!」

戦いの勝者である1号ライダーへの歓声や労いの言葉など無い…。

真魚は翔一の名を叫に側へと駆け寄ると、その場に座り込む。
血や土で服が汚れるなどは気にしていない。

真魚に続き、小沢と尾室に支えられながら氷川と涼も翔一の側へと近づく。

「翔一君、翔一君!!」

何度も名前を呼び掛けるが返事は返ってこない。
ライダーキックは確実に致命傷を突いており、体中から血が溢れ出ている…。

もう翔一が助からない事は一目瞭然であった。
恐らく、もう痛みすら感じていない…。

何で…。

確かに翔一が倒されることを真魚は了承していた…。
でも、そうだとしても…救ってほしかった。

このまま死んでいって、復讐も何も果たせないまま死んでしまっ…。

それは絶望に落ちたまま死んでしまう事だ…。

元凶は自分の親を含めた人間の所為…。
その為に、翔一君は変わってしまった。

だから、勝手な話とは分かっているが翔一を救ってほしかった…。
瞳から流れる涙と共に、色々な感情が溢れ出る。

その涙に気付いた翔一は、血塗れになり痙攣している腕で真魚の手を握り締めた。

握られた手からは消えて行く命の灯と、人の温かさが感じられた。

すると、反対方向にいた1号ライダーが片足を引きずりながら歩いてくる。

1号ライダーもバーニングライダーパンチやシャイニングライダーキックの必殺技を立て続けに喰らい、立っただけでやっとの状態であった。

「本当にこれしか無かったのか？ お前は倒されることでしか救えなかったのか？」

「無いですね…。俺を…救うにはこれしかなかった…。」

この言葉に真魚を驚いた。

この言い方ではまるで、翔一が倒されることを望んでいたかのようにであった。

だが、その通り。

アギトは…翔一は殺されることを望んでいた。

1号ライダーは戦っているうちにその事に気付いた。

「わかっていましたよ…。復讐が何も生み出さない事を…。でも止められなかった…。止まる事が出来なかった…。」
まだ喋るくらいの力は残っている。
掠れており、聞き取りにくいで声で話し続けた。

復讐の為に生きていたが、それでは駄目ということに気付いていた。

だが、姉を殺された怒りと悲しみから復讐を止める事も出来ず…。彼の仲間になつてからは、もうどうする事も出来なくなっていた。

だからこそ、止めて欲しかった。
復讐から解放してもらいたかった。

どうすればいいのか？

考えた末に、導き出した答えは「死ぬ事」であった。

しかし、この命は姉から貰ったものであり、今は彼の物である。
自分で死ぬ事など出来ない。

だからこそ、「全力で戦つて殺される事」を望んでいた。

わざと負ける事は彼の仲間として許されない。
だから昨日も、万全な状態で自分と戦わせる為に真魚に伝えたのだ。
自分を殺してくれる可能性を上げる為に…。

「はあ…。」とため息を付くと、翔一の眼に青空が入った。
日光が自分を照らし、寒くもなく熱くもない天気である事に彼はそ

の時初めて気付いた。

「忘れてたな…空ってこんなに青かったっけ…。」

昔はどんなに辛い事があっても、空が青いからという理由だけで笑顔になれた。

でも、雪菜達を殺されてからはその事も忘れていた。

徐々に痛みや苦しさが薄れていく。

何も感じなくなっているのだ…。

自分はこのまま死ぬだろう。

死ぬ事で自分は復讐から解放され救われるのだ。

だが、まだ死ぬわけにはいかない…。

彼らに最後の言葉を伝えるまでは…。

「氷川さんに涼さん、それに小沢さんと尾室さん…色々と迷惑かけてすみません。」

翔一は氷川達の顔を1人ずつ見るとそう謝罪する。

氷川は涙を噛みしめながら「謝らなくていい、だから死ぬなあ！！」と叫ぶ。

それが無理なのは誰が見ても明らかだが、生きて欲しかった。

翔一は真魚を見て軽く微笑む。

「真魚ちゃん…俺の所為で苦しい思いをさせてごめんね…。」

「ううん、苦し思いなんてしてないよお、だって翔一君がこうなっ

たのは…。」

そもそも、翔一がこうなってしまったのは自分の両親の所為だ。真魚はその十字架をずっと背負い続けていた。

瞳から「ポツ、ポツ」と何滴も涙の粒が零れ落ちる。

それに気付いた翔一はもう動かすのも辛い血塗れの腕を動かし、真魚の頭をゆっくりと撫でる。それは、とても温かかった。

「ありがとう…。真魚ちゃんは…やっぱり優しいね…。その言葉だけで俺は十分救われたよ…。だから…もう苦しまなくていい…笑ってればいいんだよ…。」

涙が止まらず「うん…、うん…。」と頷く事しか出来ない。

最後に翔一は1号ライダーを見る。

「貴方のお陰で俺は救われました…。そうだ、俺に勝ったらあの言葉の意味を教えるって言いましたよね…。いいですよ、1度しか言わない…じゃなくて、言えないか…。取りあえずよく聞いてくださいね…。」

力なく笑うとゆっくりと話し始める。

1号ライダーは黙って話を聞く。

「人間を一旦消す…あれはですね…この世界の破壊と再生を意味しているんです…。俺にもよく意味はわかりませんが、それで亡くなった大事な人が救われる、そう俺は教えて貰いました。」

一旦世界が破壊される事で、この世界は再生してもう一度やり直す事が出来る…。

ただ、それには人間を一旦消さなければいけない。

そうしなければ、世界の再生は出来ないという事であった。

どの道、自分の命はもう自分の物では無く彼の物なのだ。

それに仲間達も賛成している…。

仕方がない…。

それで姉さん達に会えるなら…。

そう考え翔一は人間を抹殺し続けた。

それが間違っていると知っていても…。

「あの方っていうのはですね。…多分近くに居ますよ…。それでわかる筈です…。」

遠くを眺めながらそう言う。

その場所はアギトをバーニングフォームへと変えた光球が飛んできた方向だった。

すると、突然翔一は吐血をする。

何度も…。

何度も…。

血が垂れ落ちて体が赤く染まっていく。

次第に目の前で悲しそうにこちらを見ている真魚の顔さえ見えなくなってくる。

何か言っているがそれも聞き取れない。

もうあまり喋る事も出来ない…。

どうやら自分はここまでの様だ…。

今までの人生が走馬灯のように振り返って来る。
生まれてきてから味わった数々の場面…。

最後に浮かんできたのは姉である雪菜と義兄の哲也…、それと目の
前にいる筈の真魚であった。

もう限界だ…。

このまま死ぬ…。

だが、まだ言っていない言葉がある。

その言葉を言うまで死ぬわけにはいかない…。

自分の為に涙を流してくれている彼らに…言うのだ。

最後の力を全てその一言の為に絞り出す。

「皆…ありがとう…う。」

こんなに俺なんかの為に泣いてくれる人がいて、俺は幸せだよ…。

ああ…あ、俺にもあったのかな…。

念さんの死を乗り越えて貴方の様に人間の為に戦う…別の未来が…。

翔一の瞳が閉じられ、真魚と握っていた腕は力を失くしゆっくりと
地面へと落ちる。

真魚は大声で翔一の名前を叫ぶと再び涙を流した。

普段は感情をあまり表に出さない真魚が、喉が潰れるのではないか
という位大きな声で泣いた。

氷川達はそれを見て涙を噛みしめた。

自分達の無力さが悔しかった。

1号ライダーもその光景を悔しそうに見ていた。

「本当は救いたかった…。俺は、お前の事を…。」

ただ救いたかった。

同じ仮面ライダーとして、人間として…。

だけど、それが出来なかった。

悔しさと悲しさが溢れる。

歴戦の戦士が肩を震わせていた。

本当にこれが正しかったのか？

翔一は倒されることでしか救えなかったのか？

まだ、別の方法が…一緒に人間と戦っている未来があったのではないか？

翔一が死んだ今、それは誰にもわからないことだった。

パチパチパチ

「津上翔一…いや、アギト。最後の最後まで俺を裏切らない…負けはしたが立派だったぞ…。」

突如背後から拍手と共に聞こえてきた声を聞き、1号ライダーや氷川達は一斉に後を振り向く。

背後に立つのはマゼンダ色の体に胸には十字架のようなマークと頭に数枚のプレート差し込まれているライダー…。

1号ライダーにとっては初めて見るライダーだが、氷川達はそのライダーを知っていた。

忘れる筈がない…。

このライダーこそが元凶なのだ。

「お前は…ディケイド…。」

氷川が静かに呟く。

このライダーこそ、この世界を恐怖に陥れたDCD…通称ディケイド。

ディケイドの腕には数枚のカードが握られていた。

一見ただのカードのようにも見えるが、カードから不思議な魅力が感じられる。

驚きなのはカードに描かれている絵柄だった。

カードに描かれているのはどれもアギト…。

その中には先程のバーニングフォームの絵柄もあった。

それを見た1号ライダーは全てを理解した。

翔一の言っていた彼とはこのディケイドである事を…。

1号ライダーの視線に気付いたディケイドは「ああ…これか？」とカードを前に出す。

「これはアギト関連のカードだ…。さっきの様にライダーを新たな姿へと強制的に変化させる事が出来る…。最もアギトへの変身能力はたった今取り戻したがな。」

最後のの意味は理解できないが、アギトをバーニングフォームへとしたのはディケイドで間違いなさそうだ。

1号ライダーは拳を力強く握りしめる。

「何故だ？ 何故アギトを暴走させた！！ 彼はあのままでも十分強かった筈だ！！」

力強くそう言うと、ディケイドは「強い？」と聞き返す。そして「はははははは…。」と笑い始めた。

「強いつてグランドフォームのアギトがか？ 言っとくけどグランドフォームのアギトはそのギルスよりも弱いんだぞ。」

戦ってみてわかる事だが、確かにバーニングフォームのアギトはグランドフォームのアギトより力強い。

ただ、戦っている最中も言ったが強いのは力だけだ。

精神や気持ではグランドフォームの方が圧倒的に強かった。事実がどうであれ、1号ライダーはそう感じていた。

ディケイドは軽い態度で「まあ…いいや。」と言う。

「アギトを倒したお前…。俺達が人間を抹殺する目的を聞いたんだろ。どうだ？ 俺に手を貸すつもりはないか？ 人間を一旦殺すといっても運が良ければ人間達は甦る事が出来るんだ。苦しいのは最初だけ、悪い条件じゃないだろう？」

1号ライダーは力強い声で「断る！！」と返す。

「苦しいのは最初だけとか、一旦消すだとかは関係ない！！ どん

な理由があるうと人間を殺していいわけがない！！ 人類を守るのが…。」

そこで一旦言葉を切ると足に力を込めて地面を思いつきり蹴りディケイドへと突っ込んでいく。

「…仮面ライダーだあ！！」

腕に力を込める。

何としてもディケイドを止める為に…。

ここで倒す為に…。

「やれやれ…、そんなボロボロの体で戦うつもりか？ まあ、久々にこのカードを使ってみるか。」

突っ込んでくる1号ライダーにディケイドは慌てた様子も見せず、手に持つ数枚のカードからグランドフォームのアギトが描かれているカードをベルトのバックルへと装填する。

K A M E N R I D E … A G I T O …！！

その瞬間、電子音が響き渡りディケイドは光に包まれる。

今の電信音はアギトがバーニングフォームに変化した時に聞こえてきたのと同じであった。

光が収まるとディケイドの姿が変わっていた

その姿を見た1号ライダーは「何だと…。」と呟いた。

「はああ…！！」

蹴り飛ばされ1号ライダーは後ろへと吹き飛ばされる。

地面に落ちても勢いは止まらずに何度も転がり真魚達の前で止まる。本来なら幾ら傷ついた体とは言えあの程度の攻撃なら防ぐ事が出来た。

しかし、今のディケイドの姿を見て防御を怠ってしまった。

金色の体と角に赤い複眼…ディケイドの姿はアギトそのものであり、変わっていないのはベルトぐらいであった。

これがディケイドの能力なのか？

立ち上がるうとする1号ライダーだが、足が笑い体に力が入らない…。
アギトに受けたダメージが今頃になって現れた。

殺される…。

そう思ったが、Dアギト^{ディケイド}はベルトのバックルを開けディケイドへと戻る。

そして1号ライダー達に背を向ける。

「今日のところは見逃してやる…俺もいろいろとやる事があるからな…。」

後ろにオーロラが現れ、ディケイドはその中へと入っていく。
ディケイドの姿は消えたが、何処からもなく声が聞こえてくる。

アギトを倒した事でこの地区を覆っていた壁は消えた筈だ…水のエルも倒したようだし、暫くはアンノウンも現れないだろう。そ

のお前等の努力に免じて、俺も暫くの間はこの地区には手を出さないでやる。精々束の間の平和を楽しむんだな。

その言葉が嘘か誠かはわからない。

だが、嘘を言う必要もない筈であり信じるしかない…。

いいか、これからも俺達の邪魔をするならば、俺は仲間たちがお前を殺しにかかる。だが、それでも俺と戦いたいというなら、俺の所までで来い、相手をしてやる…。最も、それがお前等の最後になるがな…。

そう言い残すと声は聞こえなくなる。

残された1号ライダーは悔しさで地面を叩きつけることしか出来なかった…。

正午過ぎ…。

地下シェルターに避難していた人々にアギトの死と、アンノウンの消滅が告げられた。

もつともギルスや1号ライダーの事を告げるわけにもいかず、人々にはG3-Xの活躍ということになったが…。

今までその2つの恐怖に脅えていた人々は、その報告を受け歓喜の声を上げた。

確かにこれでアギトやアンノウンに襲われるという恐怖はなくなつた。

人々が歓声を上げるのもわかる…。

しかし、その報告を告げ、歓声を聞いている小沢と氷川は複雑な気

持ちであつた。

街と砂漠の境目…。

あの後、本郷は真島から簡単な手当てを受けた。

改造人間の体は回復も早い…。

その為、簡単な手当てを受けただけで急速な回復を遂げていた。

自分の体が十分に動けることを確認すると、本郷は自身のバイクへと跨った。

ディケイドの場所へと向かう為に…。

氷川や涼も一緒に行くと言っていたが、彼らは今回の戦いで傷を受け過ぎた。

特に氷川に限ってはG3ⅡXが破壊された上に、度重なる戦いの傷が開いたため暫く絶対安静が必要だろう…。

それにディケイドの言葉だけでこの地区にライダーやアンノウンが攻めてこないとも限らない。

その時に戦うライダーがいなくなるという理由からここに残るようにと頼んだ。

氷川と涼もそれに了承した。

本郷が向かうのはディケイドの居場所…。

それはかつてライダーを仲間にしようとした時に、様々なライダーにその場所を伝えていたらしく、当然ライダーである涼もその場所を知っていた。

ディケイドに居場所…それは全てのライダーの始まりの地。

現在の第0地区…。

第0地区が何処にあるかはわからない。

しかし、そのうち見つかるだろう…そう本郷は考えていた。

本郷の見送りに小沢に尾室、それに包帯体中に巻いている氷川と涼が来ていた。

だが、真魚の姿はどこにもない…。

昨日の事からまだ気持ちの整理が付いていないのだろう。

そう考えていた為、真魚について聞く者は誰もいなかった。

「僕たちじゃどうする事も出来ませんでした…ありがとうございます。」

氷川達は本郷にお礼を言うと握手を交わす。

涼、それに小沢に尾室とも同じように握手を交わしていく。

本当にその結果が正しかったのかはわからない…。

だが、翔一が救われ、人々が救われたのも事実だ。

別れのあいさつを終えると、本郷はバイクのエンジンを回し始める。

「本郷さん!!」

バイクを走らせようとしたその瞬間、真魚の声が聞こえてきた。

後ろを振り向くと、走ってここまで来て、息を切らしている真魚の姿が目に入った。

まだ翔一の死から立ち直れたわけではない…。

だけど、翔一は自分の為に苦しまないでほしいと死ぬ間際に頼んでいた。

だからこそ、その願いに応えようと思ったのだ。

真魚は本郷の側に近づく。

「本郷さん…、もう誰も悲しませない様にする為に…頑張ってください。」

真魚は笑顔で本郷にそう告げた。

それはまだぎこちない笑みであったが、今までの様な作り笑いとは違く、本当の笑顔であった。

その笑顔と、言葉を聞いた本郷は「ああ…頑張るよ。」と優しく…そして、力強く返す。

バイクのエンジンを回し猛スピードで走らせ砂漠へと向かって走り出す。

遠ざかっていく本郷の姿は見る見るうちに1号ライダーへと変わっていく。

「ありがとう…。本郷猛…仮面ライダー…。」

その姿を見て真魚は小さく呟いた。

砂漠へと消えて行く1号ライダーの姿を見えなくなるまで見続けた。

本郷が1号ライダーに変身したことにより、バイクもサイクロンへと変形した。

サイクロンのアクセルを全開にしようとした瞬間、本郷のOシグナルがある反応をキャッチした。

それは驚きの反応であった。

「まさか…、そんな…。」

何故だかわからないが、先程まで通じなかった筈の〇シグナルが急に通じるようになった。

アギトを倒した事により、テレパシーを遮っていた障害が消えたからか？

それとも、デイケイドの仕業か？

だが幾ら考えても1号ライダーがその原因に気付くはずがない。

これが、1号ライダーをこの世界へ連れてきた存在のお陰だという事を…。

「一文字…風見…神に沖…。それだけじゃない…まさか…。」

〇シグナルから感じられる反応は1つや2つだけではない。幾つも感じられる。

仲間である仮面ライダーの反応が幾つもだ。

「まさか…8人、全員がこの世界に居るのか？」

自分1人がこの世界に飛ばされたと思っていたが、それは違かった。共に戦った仮面ライダー、8人の反応がある。

自分含めれば9人…。

つまり、全ての仮面ライダーがこの世界に居るのだ。

1号ライダーは辺りを見回す。

反応はどれもバラバラ…。

つまり、ここに世界のどこここに居る…。

精神通話は向こうからの声は聞こえないが通じ、こちらの声を送る

事が出来るまでに回復していた。

だとしたら、伝えなければ…。

自分の知っている事全てを…。

この世界の事や、ライダーの事…、それにディケイド度の事を…。

1号ライダーは自分の知っている全てを8人のライダーへと伝え始めた。

その間にも、新たな戦いが始まるうとしている事も知らずに…。

第5地区

幾つか分けられた地区の中では珍しく、その地区には街が無い。

街というよりも文明自体が少ない。

それもそのはず、何故ならこの地区が気と草が生い茂る山だからだ。

街が無いと言っても人間がいないわけではなく、数人の人々が村を興して暮らしていた。

文明は少ないがある程度ならあり、車もあれば電化製品も所持しており平和に暮らしていた。

D C Dがライダーを引き連れて現れるまでは…。

「さ〜か〜な〜が〜い〜る〜ぞ〜、た〜く〜さ〜ん〜い〜る〜ぞ〜
…。」

魚が優雅に泳ぎ回る河原の近くで、機嫌良い様子で鼻歌を歌う男…。
年齢は30過ぎなのだが、男の身に纏う服装が実年齢よりも若く見

せた。

歌が終わりに近づこうとすると、河原に近づいてくる足音が聞こえてきた。

しかし、男は慌てた素振りも見せなければその場から移動する様子もない。

徐々に足音が近づいてくる…。

「見つけたぞお！！ ヒビキイ！！」

その声と共に密林から2つの異形の影：ライダーが現れる。だが、彼らは普通のライダーとは異なる姿をしていた。

全身に纏わり付く装甲はアギトの様に神秘的な装甲というよりも、筋肉が強化された生の肉体という印象が感じられた。

腰にベルトこそは装着されているが、何枚ものディスクと小型の音叉の様な者が取り付けられている。

何よりも一番の違いはその顔であるう。

彼らの顔にはライダーの特徴である複眼と触角が無い…。

その代わりに顔の周りには幾つもの模様が施されており、頭部には鬼の面、それと角があった。

ライダーという言葉が周りに定着するまで、彼らの様なライダーはこう呼ばれていた…。

鬼…と。

橙色のライダー…いいや、鬼は男へと近寄る。

「さあ、はつきり決めて貰おうか。俺たちに付くのか？ それとも腑抜けの轟鬼のように人間側につくのか？」

「仏の声を聞いた。場合によってはお前をここで殺さなければならぬと…。」

橙色の鬼 鬪鬼 が力強くそう聞くと、隣に立つ白色の巨体な鬼 凍鬼 が低い声で言う。

その言葉を聞いてもヒビキと呼ばれる男は慌てない。

それどころか、呑気に池の魚を眺めていた。

その姿に剛鬼が「ええーい！！」と声を荒げる。

「キサマあ！！ 聞こえているのかあ！！」

この声には流石にヒビキも後ろを振り返り「聞こえてるよ。」と答える。

「とうよりもトウキさんと…あつ、どちらもトウキさんか…。」

「うわあ、凄い発見だな」と感心しているヒビキだが、鬪鬼と凍鬼のWトウキにとってはそんなことどうでもいい事だ…。

そんな呑気な会話をする為にヒビキを探していたのではないのだ。流石に2人の鋭い視線を感じたヒビキは話を元に戻す。

「兎に角さあ、そんなに騒ぐから魚が逃げちゃったじゃない…。それに…俺の答えはいつも変わらないよ…。」

そういいながらポケットから鬪鬼達がベルトに付けているのと同じ音叉を取り出す。

これはヒビキ専用の変身音叉 音角。

鬼に変身する為に用いる道具である。

それを指で弾くと辺りに「キーン」と澄んだ音色が響き渡る。

「俺は鬼にも人間にも付かない…。取りあえず、今はあの青年に付くとするよ…。」

言い名が無変身音叉をゆつくりと額に近づける。

その瞬間、ヒビキの顔に鬼の面が出現し、体が紫色の炎に包まれる。

「はあああああああ…。」

炎により纏っていた衣服は燃えて無くなり、体の内から徐々に強靱な肉体へと形成されていく…。

次第に外観にも変化が現れ、筋肉が一気に強化され体が紫色へと変化し腰に太鼓の様な者が装着されたベルトが出現する。

顔に赤い牙の様な模様が施され、頭部の左右に角が出現する。

「…でりやあああああ…！」

右手を勢い良く振り体を纏っていた炎を払う。

紫色の炎が消えると、ヒビキの姿はない…。

そこに立つのは紫色をした鬼 響鬼。

響鬼はベルトに装着されている2本の鉢 音撃棒・烈火 を手に持つ。

「さあ、生かしてはおけないんだろ。でも、俺はまだ死にたくはないからさあ、掛ってこいよ…！」

そう挑発すると、闘鬼と凍鬼はそれぞれの武器を構え響鬼へと向かっていった。

この戦いから数キロ離れた場所に、蛇と言うには生易しい大蛇の様な頭が落ちていた。

この大蛇は、近づく動物の意識が失う程の禍々しいどす黒い瘴気を放っていた。

オ、ノレエ…コノ恨ミ…コノ痛ミ…必ズ…必ズ…返シテヤル…イヤ、返スタケデハ生温イ…倍以上ノ苦シミヲアジ遭ワセテヤル…沖一也…スーパー1メ…。

頭だけになっても尚生き続けるこの生物は、ある人物への恨みだけで生き続けていた。

すると、この頭だけの生物へと近づいてくる影…ライダーがいた。そのライダーは鬼とは違った意味で変わっており、体の丁度中央で左右の色が別々に別れていた。

「成程ぞくぞくするねえ…。」

左右別々の色をしたライダーはそう呟くと、1本のUSBメモリを取り出した。

s M a s k e d R i d e r A n o t h e r W o r l d
復讐のアギト・完

N E X T S T A G E 悩む響鬼

エピソード（後書き）

アギト編終了です…。

長かった…今回を含めてアギト編だけで8話…。

今回はこの世界の説明についてなどで長くなりましたが、次回からはもう少し短くなると思います。

今回は翔一、それと真魚の性格や言葉などが変に仕上がってしまったような気がして心配です…。

皆さん、どう感じましたか？

前書きに描いた通り、全体的に雑な文章になってしまい、凄く読みにくいと思います。

本当にすみません。

デイケイドの登場や、デイケイドの場所へと向かう1号ライダーの場面など一気に文章が雑になった感があります…。

響鬼と組むライダーは、首だけの生物（わかる人はわかりますよね？）が言っている通りです。

やはりどちら日も日々鍛える者と言う事で…。

さて、日々鬼編では鬼が何人出るのか…。

鳥畔凶響鬼を含めて3人は出しましたが轟鬼を含めれば4人…。

それと次回から響鬼編となっていますが、その前にデイケイドとその仲間達の集合を書きたいと思います。

修正箇所が多いと思いますが次回に直します。

それでは皆さん、次の話で会いましょう。

エレメントブレイドでした。

A part (前書き)

更新遅れて申し訳ありません。

今回の事で書けないときは、何をしても書けないという事がわかりました。

さて、今回は響鬼編に入る前に、この世界を支配するディケイド側のライダー編を書きました。

今回の話の時間軸は、1号ライダーが第0地区へと向かう 今回の話 前回の最後の響鬼の場面…となっております。今回はひどく乱雑ですが、よろしく願います。

A part

第0地区

そこは、かつてこの世界最初のライダークウガ誕生の地であると同時に…。

暴走したクウガの消滅の地…。

この地区に広がるのは破壊されたビルや家の瓦礫と、それらを覆っている砂のみ…。

草や木は一本も生えておらず、生物の影は全くない…。

4年前のクウガの暴走…。

それが引き起こした被害で一番大きいのがこの地区であった。

この何も無い地区に聳え立つ城…。

黒を強調とした外壁に、中央に刻まれる「DCD」の3文字…。

これはこの世界を支配するライダー…ディケイド率いるライダー達の拠点であった。

何故、この地区が他の地区と違い第0地区と呼ばれているのか？

そもそも何故、ディケイドはこんな禍々しい地区に自身の城を建てたのか？

それはディケイドしか知らない事であり、それを知るのもう少し先の話…。

各地区でライダーが人間を抹殺する際中…。

突如、ディケイドは幹部ライダーへ第0地区への収集を掛けた。

これにより、それぞれの地区を支配していた幹部ライダー達は第0地区へと集まる。

「はあ…、めんどくせえな。」

深く溜息を付くと、躊躇いもなく城へと向かって歩いて行く男が1人…。

この男は第3地区を支配するデイケイドに従える幹部ライダーの1人 乾巧。

巧も今回の収集を受けても第0地区へと戻ってきたライダーの1人…。

「たつくよ、何時も行き成りなんだよな、土^{あじ}は…。」

指定された時間になりギリギリだが、巧はそれを気にせずはゆっくりと向かっていく。

しかし…。

巧は城の前で足を止め辺りを見渡す。

何時来ても嫌場所だ…。

クウガが暴走した忌まわしき場所…。

ここで何十人…、いや何百人の人々が命を落としたのか…。

そこには一生消える事のない血の匂いが染みついている。
その匂いは鼻を通して脳に響いてくる。

恨みや、悲しみ、苦しみ…、それらが感じられ気分が悪くなる…。

今は少し慣れてきたが、デイケイドに助けられこの場所に連れてこられたばかりの頃は10分も経たないうちに目眩や嘔吐に襲われた。だからこそ、なるべくなら第3地区から離れたくなかった。

逆にこの場所を拠点としている、デイケイド含む数人の仲間が普通でいられるのが巧には不思議でしょうがなかった。

とっとと終わるといいけどな…。

そう考えながら巧は城へと足を踏み入れた。

城の中は黒一色であり飾りや装飾物は全くなく、酷く殺風景であった。

だが、その代わりに幾つもの部屋が備え付けられている。
最も使われている部屋はごく一部なのだが…。

城の中を歩いているうちにある扉の前に到着する。

そこは、他の扉とは明らかに違う雰囲気を出していた。
巧は迷いなく扉を開き、その中へと入っていく。

この部屋は、この城の何処よりも不思議な空間であった。

何処を見回しても暗闇なのだ。

室内が暗いとかそんな次元ではない。
暗闇が何処かまでも続いているのだ。

それなのに自分の体ははつきりと見え、幾つか用意されている椅子もしっかりと見る事が出来る。

それがまた無気味であった。

備え付けられている椅子も特殊なものらしく、椅子というよりも大理石で出来た玉座に近い印象があった。

巧は、何時来ても慣れない場所だと感じながら、ギリシア文字のと刻まれている玉座に腰を下ろす。

辺りを確認すると、既に何人が来ている事がわかった。

自分が一番最後であろうか…？

そう考えていると「バン」と勢いよく扉が開く音が響き渡る。

「ふう…何とか間に合ったみたいだなあ。」

逆立っている黒髪の中に赤いメッシュが入っており、赤い瞳が特徴的な男が「はあ、疲れたあ。」などと言いながら入ってくる。

この男は第7地区を支配している 野上良太郎。もともと、今の彼は野上良太郎では無いのだが…。

良太郎は「よいつしょつと…。」と言いながら席に着く。

その光景を見て、良太郎の隣に座る男は「ふっ…。」と鼻で笑う。

「何だあ…てめえ、今笑いやがったなあ…！」

それに気づき不良の様に男へと詰め寄る良太郎だが、男は何も答えようとはしない。

というよりも、良太郎の事を完全に無視していた。

その行動に苛立ちを感じた良太郎は「何か言いやがれえ!!」と叫ぶ。

すると男は良太郎の顔を見ず不敵に答える。

「お祖母ちゃんが言っていた…。馬鹿に構うな、馬鹿がうつる…。」
「ゼツテエお祖母ちゃんの言葉じゃねえだろ!! どう考えても今作っただろう!!」

男：第6地区の幹部ライダー 天道総司 の言葉に、良太郎が突っ込みを入れるが、それには答えようとはしない。

「畜生、テメエ!!」と良太郎は総司の胸倉に掴みかかろうとする。

『ちよつと、止めてよ、モモタロス!!』

その瞬間、良太郎の体から謎の光球が弾き出される。

光球が飛び出ると、良太郎の髪が逆立った状態から寝ている状態へと変わり、同時に瞳の色も黒へと変わる。

物腰も先程の不良みたいな印象に比べて、優しい印象に変わっていた。

「すみません、総司さん。」

「いや、別に構わない。」

この良太郎に対しては普通に受け答えをする総司。

この光景を見て先程まで彼が何も言わないわけがない。

「テメエ、良太郎とは喋れて俺とは喋れねえってか!!」

良太郎から飛び出た光球がそう叫ぶ。

この声は先程の良太郎と同じ声であった。

光球は生物の様な姿に変わっていた。

だが、問題なのはその姿である。

鬼の様な面立ちに灰色の砂で出来た体…

それにどうという理由か地面には上半身、空中に下半身が浮いていた。

世の中にこれ以上に不思議な光景が後幾つあるか…。

「もおう、今はモモタロスが悪いよ。」

砂の怪物　モモタロス　に向かつてを良太郎がそう言う。

モモタロスはこの世界に突如として現れた怪人　イマジン　であり、
怪人でありながらも良太郎の大切な仲間であった。

イマジンとはどういう存在で、どういう経緯で良太郎の仲間となっ
たのか？

それを知るのはまだ先の話…。

先程の良太郎は、モモタロスが憑依した姿であった。

自分が叱られることに納得していない様子のモモタロスは「でもよ
お…。」と呟く。

総司はその姿を見て再び鼻で笑う。

「あつ！！　テメエ、また鼻で笑いやがったな！！　オイ！！　聞
いてんのかあ？　オオオオオイ！！　いい加減何か言いやがれエ！
！　…おゝい…。頼む！！　頼むから何か言ってくれよおお！！！！
！」

総司は決してモモタロスとは喋ろうとはしない。

その為、モモタロスは1人で騒いでいた。

その光景を見ていた一同は「またか…。」と思う位で、特に何とも思わなかった。

「騒ぎ立てるのはその位にしとけ…。」

するとその空間に声が響き渡る。

その声が聞こえてきた途端、先程までの騒ぎが嘘のように静まり返った。

この声こそ彼のものだ…。

暗闇の奥から自分達と同じように玉座に座る、首にマゼンダのカメラをぶら下げている男が現れる。

彼こそこの世界を破壊へと導こうとしているディケイドー門矢士である。

士の隣に玉座には座らずに立っており、手に分厚い本を持っている少年がいた。

何が面白いのか、少年は薄気味悪く笑っており、それから不気味さを感じられた。

巧達はこの少年とはあまり話した事がない。

しかも、話したと言ってもこの少年からの一方的な説明のみ…。そんな素性のわからない人物であるが、現時点で士が一番信用している人物であるという事は知っていた。

士は集まってきた人物たちを見渡す。

「まあ…これで全員か。」

今この場に居る人数は士と少年を抜くと5人…。

この世界には9つの地区がある。

それを支配する者たちが今回集まる筈であり、この人数は少なすぎる。

それを証明するかのように、4つの空席があった。

それに気付いた総司が「あいつはどうした？」と小さな声で聞く。

「まだ決まっていない第4地区はともかく、前にお前の側にいたあの第2地区のライダーはどうしたんだ？」

4日前、最後に士の会いに来た時には、士の隣にあの少年とは別にもう1人の男がいた。

変身するライダーの種類から、てっきり第2地区の幹部ライダーと思っていたが…。

総司の言葉を聞いた士は「ああ、あいつか…。」と呟く。

「俺はあいつに第2地区を任せると言ったんだけどな…。あいつが、まだそんな資格はないって言ってな…。取りあえず、そいつも含めて第2地区で厳選中だ…。」

会話に出てきた「あいつ」とは、この中の誰よりも士に忠誠心が高い人物であった。

他のライダーと同じで彼も士に救われた。

その時に何かあったらしく、以来彼は誰よりも士に忠誠を誓っている。

た。
もし、士が死ねと言えば喜んで命を差し出すであろう…。
だからこそ第2地区の幹部の誘いを断ったのだ。

それとは別で、第4地区にはまだ幹部ライダーがいない。
理由はわからないが、まだ第4地区を支配するのは早いそうだ。

「でも、第2と4はわかりましたけど…。第1地区のアギト…。それに第5地区のヒビキさんはどうしたんですか？」

優しく微笑みながら、小さな声でそう聞くのは第8地区の幹部ライダーである 紅渡。

渡の周りには金色の蝙蝠が飛んでいた。

それを聞いた士は「今からそれを説明する…。」と答える。

「第5地区に関しては恐らく今回は欠席だろう…。まあ、あのおっさんの事だし大方、携帯電話が未だに使いこなせないとかだろうな。」

呆れたように士は言う。

響鬼が欠席したなら自分も休めばよかった…。

巧は心の中で後悔した。

だが、第5地区はともかく何故第1地区のアギトがいないのか？
響鬼と同じでただの欠席か？

いや、今からそれについて説明するという事はもっと別の理由の筈…。

だがそれは…。

そう考えている最中モモタロスが土を指さし怒鳴り始める。

「おい、てめえ！！ 何で俺達をこんな場所に呼び戻したんだよ！
理由によつちや承知しねえからなあ！！」

「ちよつと…、駄目だつてモモタロス、そんなこと言つちや…。」
必死に止めようとする良太郎だが、体が砂であるモモタロスを制止
できる筈もなく、モモタロスは砂を撒き散らしながら暴れまわる。
その光景を見た土は慌てた様子もなく、逆にわざとらしく大きくた
め息を吐く。

「だから、それを説明するつて言ってるだろう…。相変わらず単細
胞だな…バカタロスは…。」

「ンだとお、てめえ、誰がバカタロスだ！！ 俺はモモタロスだよ
！！ モ・モ・タ・ロ・ス！！ わざつとらしく間違えんじゃねえ
！！」

騒ぐモモタロスを無視して土は「今回集まってもらつたのは…。」
と説明に入る。

自分を無視して説明に入る土を見てモモタロスは「無視かよ…。」
と呟いた。

土が説明を始めた瞬間、先程の静寂を取り戻す。

「でも、確かに長つたらしい説明もあれだからな。今日お前達に集
まってもらつた要件だけ言つぞ…。」

そこで一旦言葉を切ると、ゆっくりと話していく。

「第1地区の幹部ライダー、アギト…津上翔一が殺された。」

その一言は衝撃をもたらした。

アギトが殺された…？

何を言っているのさっぱり分からない。

巧は「ちょっと待てよ！！」と叫びながら玉座から立ち上がる。

「アギトが殺された？ そんな馬鹿な話あるかよ！！ 津上が…アギトが殺されるなんて！！ あいつの強さはお前だってわかってんだろ！！」

アギトの強さはここに居る誰もが知っている。

だからこそ信じられなかった。

そして、それはここに居る全員が巧と同じ気持であった。

巧の言葉を聞いた土は「騒ぐな…。」と答え話し始める。

「そう言えば、お前はあいつと仲良かったな…。だから信じられない…いや、信じたくないのか？ だがな、そんな縁起でもない事冗談で言っただろう？」

確かに土の言う通りこんな事冗談で言っでもしょうがない。

だが、誰がアギトを殺したのか？

「それについては今から説明する…来人、頼む。」

士がそう頼むと「わかったよ…。」と答え少年 来人 は指を「パチン」と鳴らす。

その瞬間、真っ暗の空間に映像が映し出される。

それは第1地区でのアギトと1号ライダー戦いであった。

「これはディケイドライダーに記録されたアギトと、アギトを倒したライダーの戦いの映像だ。信じられなくてもこれを見れば信じるしかないだろう？」

グランド・トリニティ・バーニング・シャイニングフォームと、計5つのフォームに変化し戦うアギト…。

幾多の技と、華麗なる動きでアギトと攻防を繰り広げる1号ライダー…。

最後に、2つのライダーキックがぶつかり合い、アギトが地に伏せる…。

アギトも凄いがそれと互角、それ以上に戦う1号ライダーも凄い…。

だが、見ているうちにある事に気付く。

こんなライダーこの世界に居たのか…ということであった。

ベルトの風車や飛蝗を思わす仮面、首に巻かれる赤いマフラー…。

こんなライダー見た事がない。

以前ディケイドがこの世界に存在するライダーを見せてくれた事があるが…。

そのどれとも違う。

となると…。

「見た事無いライダーだろう。 だがな、俺もこいつについては知らない…、わかっている事は、こいつが別世界から来たということだ。」

「別世界…って、前に士さんが旅してつたいう別世界の事ですよね？」

士の言葉に恐る恐る良太郎が尋ねると「そうだ。」と返される。

今この場に集まっている幹部ライダー達は、士が以前別世界を旅していたという事を知っていた。

しかし、知っているのは旅をしてライダーの情報を手に入れた事だけ…。

それ以外の事は何も知らない…。

士が何故別世界を旅していたのか？

旅の中で何を見たのか…。

何故、世界を破壊しようとしているのか…。

何も…知らなかった。

「別世界から来たライダー…か。しかし、このライダーはお前と違うタイプのように見えるが…、こいつもお前の様に別世界を渡れるのか？」

胸の前で腕を組みながら総司が質問する。

ライダーで別世界を渡れるのはディケイドだけ…。

少なくとも、ディケイド以外のこの世界のライダーは別世界を渡る事が出来ない。

このアギトと戦うライダーは渡る事が出来るのであろうか？

すると士「いいや、違うな…。」と言っ。

「そもそも、俺が別世界を渡れたのは昔の話だし、こいつは恐らく別世界を自由にわたる事は出来ない…。」

「言い切れるのか？」

「ああ…多分、言い切れる。」

そう答えると士は来人に別の場面を映すように促す。

再び来人が指を鳴らすと、アギトと1号ライダーの映像が切り替わる。

次に映し出されたのは10の区分に分かれた地図…。

10地区に分けられたこの世界の地図であった。

その地図の中で一か所だけ赤く点滅している地区があった。

それは、アギトが支配していた第1地区である。

この赤い点滅については来人が説明し始める。

「これは昨日確認された次元の歪みの反応…。恐らく、この次元の歪みを使って、このライダーはこの世界にやってきた。」

来人が淡々と説明を続けていく。

「だけど、これは可笑しな反応だった。何故なら、この次元の歪み

がこの世界から生じているんだよ。可笑しくないかい？ 仮にもし、彼に次元を渡れる能力があるとすれば、この世界から次元の歪みが発生するのは可笑しい事なんだよ。」

それを聞いた一同は「成程：。」などと呟く。

今の説明だけで彼らは来人が言っている理解する事が出来た。

「ん、何だ？ 何だ？ 一体どういう意味なんだよお、もっと、わかりやすく説明しやがれえ！！」

ただ1人…というよりも1匹は理解に苦しんでいた。

これにはモモタロスの契約者である良太郎も溜息を吐いてしまった。

来人は「わからないのかい？」と言うと、もう1度説明し始める。

「僕的にはわかりやすく言っただけで、わからないというのは理解に苦しむね…。まあ、要点だけ纏めると、この世界から次元の歪みが発せられた、つまり、このライダーが別世界を渡れるのではなく、この世界の誰かが、彼をこの世界に連れて来たんじゃないか…ってことだよ。」

1号ライダーには別世界渡る能力などはない。

来人の言う通り、この世界の誰かが1号ライダーをこの世界に連れて来たのだ。

だが、それは誰なのか？

誰もがそう考えていると、奥に座っていた来人と同じもう1人第9地区の幹部ライダーであり、来人が推薦して連れてきた人物が口を開く。

「無礼と分かって言わせてもらおう。もし、こいつが来人の言う通り、この世界の誰かがこの世界に連れてきたというなら…そんな芸当出来るのはお前くらい、もしくは連れてきたやつに心当たりがあるんじゃないのか？」

ゆっくりと土を指さしながら言う。

別世界関係の事で一番疑わしいのは前に一度別世界を旅した事がある土である。

それにそのような人物に心当たりがあるかもしれない…
そう考えていた。

「成程な…。」と土は返す。

「俺が疑われるのは当然か…。だが俺はそんな事はしない、第一俺にはもう世界を渡る事は出来ないし、自分達の計画を潰そうとしている奴を自分で連れてくるか？」

確かに正論である。

現在の^{いま}ディケイドには世界を渡る能力などはない。
それが土がこの世界に留まっている理由である。

「ならば心当たりは…。」

「心当たりは…無いわけじゃないが、絶対に違うな。」

今度はきっぱりと断言する。

「何故だ。」と聞き返すと、土は懐かしそうに…そしてどこか悲しそうに答える。

「そいつがもう…死んでいるからだ。」

ディケイドは本来その今は亡き、その人物の能力を駆使して別世界へと渡る事が出来たのだ。

だが、その人物はもういない…。

だからこそ、その人物である筈がない。

「だけどよお、敵は1人だろ？ だったらこんな会議を開くまでもなかったんじゃないのか？」

巧は面倒くさそうに言う。

敵はたったの1人だけ…。

それだけなら特定の2人に声を掛ければ、幾らアギトを倒したとはいえ、2対1なら倒せるはず…。

今回の会議を開く必要などまったくない。

なんなら、誰かと協力して今から倒しに行ってもいいぐらいだ。

「ああ、確かに…敵が1人だけならな。」

この言葉は再び衝撃を与えた。

今の言葉はどういう意味だ…。

まるで敵が1人だけでは無いみたいではないか。

「さつきも言った通り、これは昨日の時点での事だ…。今日の時点で更に確認された。」

今度は来人ではなく土が指を鳴らす。

その瞬間、第0地区を除いた全ての地区に赤い点滅が出現する。

「敵は全部で9人だ…。それも、ここを除いた全ての地区に1人ずつな…。」

アギトが倒された後、新たに8つの異次元の歪みの反応が8つの地区で確認された。

1人ならともかく、流石にこれは見逃すわけにはいかない。その為に今回の会議を開いたのだ。

「新たな8つの反応…これはアギトを倒したライダーの仲間と考えるのが普通だろう。ならば、奴らはそいつと同等の力を持ち、人類の平和…ってやつのはめに戦っているらしいからな。つまり人類の抹殺する…俺達の敵だ。」

敵…。

恐らくは自分達と戦うことになるライダーだろう…。

アギトを倒したようなライダーの仲間に果たして自分達は勝てるのだろうか？

「いいな、地区を封鎖している結界はお前等が倒されれば消える…。これから戦うことになるかもしれないが…絶対に負けるなよ…言いたい事はそれだけだ。」

この空間が静まり返る。

誰も話そうとはしない…。

士は軽そうに言ったが、こんな重い事態に口が開かない…。

「下らないな…。」

そんな状況を打ち破るようにそう言い放つ男が1人…。
それは天道総司だ。

総司はゆつくりと玉座から立ち上がり、土に背を向ける。

「要はそいつらを倒せばいいだけの話だろう？ そんな事でいちいち会議など開かなくてもよかったですね。」

「ほおう、ずいぶん自信ありげだな…。アギトを倒した奴の仲間に負けないと言い切れるのか？」

土がそう聞くと、総司は人差し指を伸ばし、それを高く上げる。

「お婆ちゃんが言っていた…。俺は天の道を往き、全てを司る男。

そんな俺が負ける筈がない…。」

言葉の意味はわからないが、兎に角凄い自信があるという事はわかった。

そう言い残すと、総司は土から授かったこの世界を自由に移動できる能力ちからを使い、オーロラを出現させる。

「そうそう、最後に1つだけ言っておくけど、出来れば彼らを生け捕りにしてくれないか？ 彼らの体や能力の事を考えただけでぞくぞくするだろう。」

オーロラに入る直前に来人が総司に言う。

「一体捕えて何をするつもりなのか…。」

「余り考えたくはない…。」

総司は何も答えずにオーロラの中へと入り、自身が支配している第6地区へと戻っていく。

これが引き金となったようで、その場にいた幹部ライダー達も次々とそれぞれの支配する地区へと戻り始める。

「そうだ、良太郎にモモタロス！」

士は戻ろうとする良太郎とモモタロスを引き止める。

モモタロスは「名前覚えてんじゃねえか！」などと騒いでいるが、それに構っている時間は無い。

「お前等の7地区で捕えているあいつに、この事態について説明しといてくれるか？ あいつは俺の復讐心で生きている。今回の事件も、もしかしたら関わっているかもしれないからな。」

士の言う「あいつ」の事が誰か分かったらしい良太郎は「わかりました。」と返事をする。

モモタロスは「もう2度と来ねえからな！」と捨て台詞を言うと、2人はオーロラの中へと消えていく。

渡も周りを飛んでいた金色の蝙蝠と共に移動を始める。

「戻るよ、キバット。」

「おっ、やっと終わりかあ…待ちくたびれたぜえ〜。」

オーロラを出現させ、金色の蝙蝠 キバットバット？世 と共に第8地区へと帰っていく。

次々に解散していく仲間たちを見て、巧も移動を始めた。すると士に「待てよ。」と引き留められた。

「何だよ…。」と言いながら後ろをり向くと巨大な箱の様なトランク型の物が投げられた。

巧はそれを見事キャッチする。

渡されたトランクを見てみると、幾つもの番号キーが付いており、よくよく見れば銃口の様な物も見え、何か武器のようにも感じられる。

それにこの差し込み口は…。

ポケットから黒い携帯電話を取り出し差し込もうとするが上手く差しこめない。

大きさがこれとは違うらしく、この携帯電話では駄目なようだ。

「一応そいつは持っておけ…。いずれファイズのベルトを取り戻したら使う時が来るだろう…。」

「ありがとよ…。ただ、1つだけ聞いていいか？」

礼を言うと、真面目な顔で土を睨む。

土は「何だ？」と聞き返す。

「あんだ、デイケイドライバーの映像から戦いを映し出したって言うってたよな？ つまりあんだはあいつらの戦いを近くで見てたってことだろ？ だったら何でアギトを助けなかったんだ？」

巧の言う通り、土はあの戦いを見ていた。

だとしたら、何故土がアギトを助けなかったのかを知りたかった。幾ら相手が強敵だろうと、2対1で行けば負ける筈がない…。

「何故助けなかったか…か。」と呟きながら、土は顎に手をあてる。

「助けなかった理由か…。強いて言うならば男同士の戦いに誰かが割って入るのは無粋だから…。だな。」

さも当然の様に言う士…。

そもそも、士は力を全く貸さなかったわけではなく、アギトをバーニングフォームへ進化させた。

その行為はアギトを暴走させるようなことになってしまったが…。

「戦いに粋なんて言葉はねーだろ…。」

巧は静かにそう呟く。

士は「確かに…戦いに粋なんて無いのかもな…。」と返した。

その言葉に苛立ちを感じた巧は軽く舌打ちをする。

「俺は助けてくれたことには感謝してる…、でも俺はあんたの事を好きにはなれない。」

そう言い放つと、出現させたオーロラを潜り巧も自らが支配する地区へと戻っていく。

これにより、この部屋に残されたのは士と来人、それと来人の相棒だけになる。

「好きになれないか…。随分の言われ様だね。」

笑みを浮かべながら言う来人…。

だが、士は先程の言葉はそれほど気にしてはいない様で「さて…。」と玉座から立ち上がり、次の行動に移る。

「来人：悪いが第5地区のヒビキに今回の事を伝えてくれないか？
俺は第2地区のあいつに報告と、第4地区の様子を見てくる…。」
「わかったよ。…行こう」

そうと答えると、来人は相棒と一緒にオーロラの中へと消えていく。
遂に、その場に残ったのは土だけになる…。

誰もいなくなり静まり返ったその空間で土はオーロラを出現させながら、先程の巧の言葉を思い出す。

「好きになれないか…。どうせ、俺は破壊者だ。誰からも好かれようなんて思っていない…。」

過去の出来事を思い出し…。
吐き捨てるようにそう呟くと、オーロラの中へと消えていった。

…。
この世界へと集まり、人間の為に戦おうとする9人の仮面ライダー

そして、本格的に動き始めようとしている、ディケイド率いるこの
世界のライダー…。

果たして、この世界での仮面ライダー同士の戦いはどうなるのか…。

A part (後書き)

読み終わって…。

何だこの話は？と思っっている方が大勢いるでしょうね…。

第一読みにくい。

わかりづらい。

全体的に雑…。

と3拍子揃っています。

モモタロスの台詞書くのが楽しかったな…。

取りあえず、今回名前を伏せている人物や、登場の無かった人物は、その人物が昭和ライダーとの戦いまでは伏せていきたいと思えます。ですが、第2地区や第4地区などのライダーは順番的に皆さまお分かりですよね？

さて次回から響鬼編です。

頑張っただけ沢山の鬼を出していきたいと思えます。
エレメントブレイドでした。

プロローグ（前書き）

こんにちはエレメントブレイドです。
今回は響鬼編のプロローグです。

プロローグでありながら読んでて熱くならない戦闘シーンがメインです。

それと最初に言いますが、私は響鬼をあまり視聴していません…。
なので知識不足が目立ちます…。

響鬼編は全話視聴したスーパー1で埋められたらいいな〜などと呑気な事を考えています。

誰か1話〜22話までの響鬼編の知識を…。

それと今回から後書きのスペースに『キン肉マン名台詞コーナー』を始めました。

そちらの方もよかったら読んでみてください。

プロローグ

クウガが誕生するよりも昔…。

太古よりこの世界には妖怪や化物と呼ばれ、人間を襲う生物が存在していた…。

人々がそれらに脅えながら過ごしている中、人間を守る為妖怪に立ち向かう集団が現れた。

彼らは特殊な訓練で体の内に眠る鬼の力を目覚めさせ…。

音撃 と呼ばれる音により魔を滅し、人々を救う存在 陰陽師 。

陰陽師はその力で妖怪を滅して人間を救ってきた。

だが人間は妖怪の数が少なくなってくると、次は陰陽師達を恐れた。

彼らはいずれその強大な力で人間を襲うのではないだろうか…と。

それらの理由から、この時もまだ普通の人間の姿であるにも関わらず、陰陽師は人間に無い巨大な力を持つという理由で、人々から白い目で見られ続けた…。

それから幾年と時代が経過していく…。

クウガが暴走してから2年半が経過し、この世界にはアギトやアンウンが出現した様に幾つもの異常な出来事が起き始めていた。

妖怪や陰陽師も例外ではない。

ある時、妖怪は急にその姿を凶暴な物へと変えていった。例外を除き2種類の生物を合成したかのような姿…それはもはや怪人と呼ばれるレベルである。

人々は彼らの事をグロンギの様な怪人とし新たな名前 魔化魍 と付けた。

そして同じように陰陽師にも異変が起こった。

元々、体内に眠る鬼の力を使っていた為か、彼らは突如人間離れした力や能力を持つ超人 鬼 に変身した。

だが普通の鬼とは違い、その姿はどちらかと言うとクウガの様なライダーに酷似していた。

この姿から、陰陽師は「鬼」と呼ばれるようになり、人々は益々恐怖した。

ライダーに酷似したその姿…。

もしかやクウガの様に自分達を襲うかもしれない。

しかしそうだととしても、魔化魍から自分達を救ってくれる存在は必要…。

そこで人々は鬼を自分達の配下へと置く事を考え、鬼と不平等な条約を結ぶことにした。

この条約の一部上げてみると、鬼は決まった集落に纏まらなければならぬ、そこから魔化魍出現の時以外は出てはいけぬ、人間と付き合ってはならぬ…などなど。

この話を聞いた鬼達は激怒した。

これでは鬼の迫害ではないか…と。

それでも最初は人間と争うことを避け、渋々の条件を受け入れた。だが鬼への差別は日に日に増していくばかり…。

次第に鬼達の間ではこの仕打ちに耐えられず、人間へと下剋上を狙う側と人間を守る側に分裂し、鬼同士で争うようになった。しかも人下剋上を狙う者は、人間を守る側の倍以上の人数…。

それでも人間を守る側の鬼と戦うしかなかった。

例えそれがどんなに無謀な事だろうと…。

戦いが続くにつれ、この戦いに嫌気がさし鬼の力を捨てる者までもが現れてしまった。

そして現在から約1年前…。

木々の生い茂った山奥で2人の鬼が互いのプライドを賭けて死闘を繰り広げていた。

1人は緑色を基盤とし赤の模様が入った派手な姿した鬼 歌舞鬼。
もう1人は紫色の鬼 響鬼。

人間を守る側のリーダー的存在である響鬼はどんなに人間から嫌味を言われ、避けられようと人間を守る側についていた。

仲間である轟鬼や弾鬼等もそんな響鬼の姿を見て人間の為に戦い続け、響鬼の事を心から尊敬していた。

対する歌舞鬼も人間に下剋上を狙う側の鬼のリーダーである。
最初に、人間への下剋上を唱えたのも他では無い歌舞鬼なのだ。

そんな2人が互いの尊重を掛けてぶつかり合う。

昔は互いに鍛え、高みを目指しあった仲間である筈が、皮肉なこと
に今は敵同士になってしまった。

「せいやあああ!!」

「はああああ!!」

響鬼の太古の鉢を模した武器 烈火 と、歌舞鬼の剣状の武器 音
叉剣 がぶつかり合い火花を散らす。

互いに手に力を込めるが、ぶつかり合った武器は全く動かない。

その状態の最中に歌舞鬼が「何故だ…。」と呟く。
それを聞いた響鬼は「ん…何がだ？」と聞き返す。

「決まっているだろ!! ヒビキ、何故お前は人間なんかに行く
だ!! その力さえあれば人間から権利を奪取…いや、そこまで行
かないとしても対等な立場を求めることだって出来る筈だ!!」

腕に込める力を緩めずに歌舞鬼が叫んだ。

人間が鬼達にしてきた迫害…。

それは人間の為に戦う響鬼だって例外なく受けている。

響鬼の力は鬼達が誰しも認めている程…。

その力さえあれば人間から、人間と同じ権利を求めることだって可
能なはず…。

しかし、響鬼はそんな事はせず、人間の為に戦い続ける…。歌舞鬼にはそれが理解出来なかった。

それを聞いた響鬼は「人間から権利を奪取か…。」と言うと、優しい口調で話し始める。

「確かに鬼に対する迫害はやり過ぎだと俺も思ってるよ。でも、元々俺達のご先祖様は人間を守る為にこの力を使ってたんだらう？ だったら、この力で人間を守るのは当然じゃないのか？」

思わず「それは…。」と言い返せなくなってしまう。

鬼の力は人間を守るために開発された。確かに響鬼の言う通りだ。

だが、そうだとしてもこんな力で人間を守ることに意味がるのか？ あんな汚い奴らを…。

自分達は人間を守る為に鬼の姿をしているが、人間の心の方が鬼より醜い悪魔だ…。

「ヒビキ、お前は人間を買い被りすぎだ。例え人間を守る為の力だと言っても人間は何をした？」

吐き捨てるように歌舞鬼は続けていく。

「自分達が守られることは考えても俺達の事はどうでもいいというのか？ 俺たちだって元は人間なんだ。人間達と同じ立場を要求して何が悪いというんだ！！」

人間達から白い目で見られ続けていた事を思い出す。

歌舞鬼は人間…特に子供が好きだった。

今まで子供の為に戦ってきたと言っても間違いではない。

だが、大人は子供に「鬼が悪魔である。」と教えていた。

それにより歌舞鬼…いや、鬼全体は子供からも石礮を投げられるような立場になってしまった。

許せなかった…。

俺達は何のために鬼になり戦っているというのだ…。

全てはお前たちを守る為だったんだぞ…。

その時から、歌舞鬼は人間を守る事を止め、人間から下剋上を狙う様になった。

彼の考えには沢山の鬼が賛同してくれ、徐々に人数が増えていった。鬼の誰もが歌舞鬼と同じ事を思っていたのだ。

それを黙って聞いていた響鬼は静かに答える。

「それでも人間にだって俺達の事を考えてくれる奴はいる…。1人でもそんな奴がいるなら…人間の為に戦ってもいいんじゃないか？」

まるで鬼全体にそう語りかけるように言った。

わかっている…。

歌舞鬼にだってそれくらいの事はわかっている…。

人間にだって良い奴はいる…。
そう、あの少年なんて正にその通りではないか。

人間でありながら、鬼である自分たちを気遣ってくれていた。
だが、もう遅いのだ…。

悩みから歌舞鬼の力を込めていた腕が弱まり、響鬼はその隙を見逃さずに腕に力を込め音叉剣を吹き飛ばした。
音叉剣は空中で何回転もすると地面に突き刺さる。

「はあああああ！！！」

腹部に烈火を叩きこもつとする響鬼だが、歌舞鬼は瞬時に体勢を立て直しベルトに装着されている響鬼が使用する烈火と同じ鉢状の武器 烈翠 を握りしめる。
激しい音を立て互いの武器はぶつかり合い、2人は数歩後ろへと後退する。

「響鬼…やはり俺は駄目だ！！ もう俺は止められない！！ 人間を許す事が出来ない！！！」

歌舞鬼は力の限りに叫ぶ。

「そうか…。」と響鬼は悲しそうに返す。

「お前の言う通り明日夢の様な人間もいる。でも、そんな人間ばかりでは無い。だからこそ、俺達鬼は迫害を受け続けたんだ！！！」

怒りと悲しみをすべて吐き出す。

鬼の面の下では涙が溢れ出てくる。

「お前にもわかる筈だ…。何が正しいのか…、何が間違いなのか…。」

「わかりたくないな…、そんな事…。」

2人の戦いは既に長期化している。

これ以上の戦いは互いに危険…。

短時間で決める…。

「はあああああああああ！！！」

「たあああああああああ！！！」

雄叫びを上げると腕に力を込め、互いに突っ込んで行った…。

時間は経過する…。

「ぐはっ…。」

両手に握りしめていた烈翠が音を起てて地面に落ちる…。

そしてゆっくり歌舞鬼も空に背を向け地面へと倒れる。

負けた…。

互いのプライドを掛けて戦い、遂に響鬼には勝つ事が出来なかった。

体中に攻撃を受け過ぎた…。

痛みや苦痛から歌舞鬼は強制的に変身が解除され、人間態へと戻っ

てしまう。

人間態へと戻ったその姿は衣服を一切身につけてはいない。

これは鬼が変身する際に体から噴き出る炎や風、果ては雷により衣服が消滅する為であった。

敗者には相応しい不様な姿だな…。

顔を上げる力は残っていないが、目の前には烈火を構えた響鬼がいる筈…。

焦点も合わない状態の瞳を動かしカブキは響鬼を睨みつけた。

止めを刺すなら刺せばいい…。

死ぬ覚悟を決める。

だが、一向に自分の命が奪われることはなかった。

それどころか、響鬼はカブキに背を向けて歩き出した。

「何故…だ…。何故、殺さない…。」

カブキは響鬼を引きとめる。

何故止めを刺そうとしない…。

それが不思議でしようがなかった。

自分を生かしておけばいつ復讐に来るか分からない。

ここで自分を殺すのが一番の筈だ…。

顎に手を当て「うん。」と考える響鬼。

そしてゆっくりと話し始める。

「理由なんてないよ…。」

気楽にそう言った。

「だってさ、わざわざ命まで奪う必要はないだろ。傷を治してまた挑んでこいよ。次も俺は絶対に負けないぞ。」

「シュッ!!」と敬礼のようにも見える独特なポーズをとると、響鬼はカブキの前からいなくなる。

元々響鬼には歌舞鬼の命を奪うつもりはなかったのだ。

変った人だ…。

響鬼からは不思議な魅力が感じられる…。

それが他の鬼達に認め、慕われる理由なのかも…。

思わず頬笑みを浮かべてしまう。

サツサツ…カサツ…

突如として謎の音が耳に入った。

これは何か生物が自分に近づいてくる音…。

動物や獣か？

いや、違う…。

これは人間の足音だ。

それに気付いた時にはカブキの背中に激痛が走った。
カブキは痛みから大声で叫んだ。

それは周りにいた獣や小鳥が逃げてしまふ程の叫び声であった。

「はあ…はあ…」

突如として聞こえてきたカブキの叫び声を聞き、響鬼は先程の場所まで急いで戻って来た。

そこで響鬼が目にしたのは、血塗れになり、顔が潰され元が人間であったとは思えない姿をし息を引き取ったカブキ…。

周りには、血で染まった鈍器や鋭い刃物を持った5人の男…。

響鬼は彼らの事を知っていた。

確か、鬼の事を毛嫌いしており、鬼が悪魔だと唱えていた中心人物達だ。

それだけで何が起きたのか予想が付く…。

彼らが動けなくなったカブキを寄って集^{たか}って殺したのだ。

男達は響鬼に気付く、狂気を宿した眼で睨みつけてきた。

「これはこれは、表向きは人間を守ろうとしている鬼ではないですか？ 何しに来たのですか？ 私達はわざわざ貴方が止めを刺さなかった鬼に止めを刺してあげたんですよ。」

男達はずっと響鬼と歌舞鬼の戦いを監視していた。理由は人間から下剋上を狙う鬼のリーダー的存在である歌舞鬼の不様な最期を見る為…。

彼らの予想通り響鬼は歌舞鬼に打ち勝った。

だが止めを刺す事はしなかった。

だからこそ彼らは歌舞鬼を殺した。

カブキは痛みや苦痛の表情のまま息絶えていた。

それを見れば、どのような残酷な方法で殺されたのかが想像できる。

響鬼は彼らを睨みつけた。

「おや？ まさか貴方は僕達を殺す気ですか？ そんなことすれば今の鬼の立場が更に悪くなりますよ？」

不敵に笑いながら男がそう言う。

しかし、響鬼の耳にはそんな言葉が入ってこない…。

これが自分達が守ろうとしていた人間の本性なのか？

先程の歌舞鬼の言葉が脳内で響き渡る…。

何が正しいのか…。

何が間違っているのか…。

自分は間違っていたのか…。

こんな人間を守ってどうするのだろうか…。

先程自分は人間にもいい奴がいるから戦うといたが…。

本当に彼らは良い奴なのか？
目の前の様な奴らが人間の本性なのか？

答えが出てこない…。
何も考えられない…。

気付いた時には烈火を手に持ち、渾身の力で振り下ろしていた。

それから数分後…。

山奥で聞こえてきた巨大な爆音に気付き、人間を守る側に付いている鬼の1人 トドロキ と、人間でありながら鬼の事を信頼する少年 安達明日夢 は急いでその場所に向かっていった。

彼らは音の発信地であるその場所に辿りつく。

「何があつたんすか？ こじ…。」

その場所は巨大な力により大木が何本も薙ぎ倒されていた。

一対何が起きたというのか…？

そう思いながら辺りを見回すと、その中心に居た人物に気付く…。

それは響鬼だ。

更に、周りには倒れる5人の男達がいた。

死んでいるのか？

そう思いながら見てみるが、これといった外傷は見えない。
どうやら、驚いて失神しているだけの様だ…。

だが、響鬼の隣で倒れている人物には既に息が無い…。

その人物は顔が潰されており、一目見ただけでは誰だかはわからない…。

しかし、明日夢にはその人物が誰であるのか直感でわかった。

「もしかして…カブキさん…。」

それを聞いた響鬼は黙って頷いた。

周りに散らばる血の付着した鈍器や刃物を見る限りカブキを殺したのは響鬼ではなく、失神している男達だということがわかる…。

恐らく、カブキの死で怒り狂った響鬼が暴れまわったのがこの惨状なのだ。

人間に手を出さなかったのは響鬼だからと言ったところであろう…。

響鬼は彼の愛用していた音叉剣をカブキの側に置くと、トドロキと明日夢に背を向けた。

「わからなくなってきたよ…。何もかも…。今まで自分がやってきた事が正しかったのか、それとも間違えていたのかも…。」

そう言い残すと響鬼は山奥へと消えていく。

初めて弱気な響鬼の姿を見たトドロキと明日夢は驚きと動揺で後を追いかける事が出来なかった。

だがそれが間違いであった。

この時、無理にでも追いかけるべきだったのだ…。

そして、その日より響鬼は姿を消した。

プロローグ（後書き）

響鬼編プロローグ終了です。

感想で「響鬼が悩むなんて考えられない。」と皆様仰っていました。が、今回の話でその理由がわかったと思います。

歌舞鬼の「人間の心は悪魔だ。」はデビルマンの原作版を参考にしています。

わかりましたよ？

歌舞鬼は…すみません、こんな役割しか与えられませんでした。

それに一番可哀そうな役割になる予定はやられ役に定評のあるあの鬼でしょうし…。

ついでに、歌舞鬼を殺した男達は出番はもうない予定です。

ただの名前の無い登場人物ですし…。

次回から本編にはいります。

沖・スーパー1が登場するかは微妙ですが、スーパー1から彼らを登場させる予定です。

さて、皆様はわかりますかね？

ヒント…というよりもほぼ答えですが子供達が出ます。

追記・時間系列の間違いが酷かったです…。

修正しました。本当にすみませんでした。

それではこれより下は名台詞コーナーです。

・キン肉マン&キン肉マン?世 名&迷ゼリフコーナー・

最近この後書きのスペースがただのネガティブスペースになっている様な気がします。

やはりこれでは読み手の皆様も不快な思いになってしまう。

それではいけないと思い、皆さまの様に、歌や名ゼリフを載せていきたいなと考え、このコーナーを始める事にしました。

ただし、知識に乏しい私には皆さまの様な沢山の作品の名ゼリフを知っているわけではありません。

ですが、漫画を全巻持っている「ジヨジヨの奇妙な冒険」及び「キン肉マン&キン肉マン?世」移管する知識ならば豊富だと自負しております。

そこで今年一番の盛り上がりを見せている「ジヨジヨの奇妙な冒険」にするか迷いましたが、キン肉マンをもっと皆さんに知ってほしいと考えキンクマンの名台詞を紹介する事にしました。

それでは記念すべき1回目です。

『心に愛がなければ 真のスーパーヒーローにはなれない』

キン肉マン初代OP・キン肉マン?世3巻 第25回「怒りの力^{パワー}は額の文字に！」 キン肉万太郎談

この台詞は言わずと知れたキン肉マン初代OP「キン肉マンGO

Fight!」での歌詞の1部が基になっているセリフ。

CATVでアニメのキン肉マンを初めて見た時、この歌に惚れてキン肉マンが好きになってしまいました。

その他にもキン肉マン？世で、初代キン肉マン・キン肉スグルの息子であるキン肉万太郎も同様の台詞を言っている。

最も、その時は微妙に上記に記載した者と言いつつ回しが違うが…。

自分より容姿や技、力、それに人気など、どれをとっても圧倒的に上回っている悪行超人チエック・メイトに打ちのめされ、万太郎は動けなくなる程の重傷を負ってしまう。

しかし、チエック・メイトは師匠であるサンシャインに手を上げ、観客の子供にも手を上げた。

その姿を見た万太郎は再び立ち上がり、敵であるサンシャインをチエックメイトから救い、その一言を言い放った。

今、万太郎の逆転劇が始まろうとしていた。

ついでに、この台詞はキン肉マン「夢の超人タッグ編」でもキン肉スグルが「キン肉マンGo Fight!」を歌いながら復活する場面で、歌の歌詞として使われている。

この台詞はキン肉マンのみならず、どのヒーローにも当てはまっている事だと思えます。

仮面ライダーやウルトラマンに愛が無ければ、それは巨大な力を持っただけの存在。

彼らの心に愛があつたからこそ、人類から愛されるヒーローだと私は信じています。

だからこそこれはヒーローすべてに当てはまる名台詞なんです。

最後に余談であるが、PSP専用ソフト「キン肉マン マッスルジエネレーション」ではキン肉スグルとキン肉万太郎のオリジナルボイスでこの台詞は聞く事が出来ます。

それだけでもこのゲームは買う価値があるだろう…。

と、こんな感じやっていきます。
もしこれを見て不快に感じた方がいたらならば言うてください。
直ぐに止めます。

それではエレメントブレイドでした。

A part (前書き)

更新遅れてすみません。

テストが…テストが襲ってきます…。

急いで書いたため凄く雑な文章になっています。

しかもテストが終わるまでは不定期更新が続きます…。
本当にすみません。

今回響鬼もスーパー1もあまり出ません。

その代わりに彼らが出ます。

皆さん、彼らが誰かわかりますかね？

A part

第5地区

恐らくこの世界で一番緑が残っているであろう場所。

だがそれは無理もない事であった。

何故なら、この第5地区がこの世界に残った唯一の山だからだ。

木々が周囲を覆い隠し獣道もない山奥で、この場に似つかない奇妙な服装をした7人の子供と2人の女性がいた。

子供達は皆青いベストを着用しており、頭には赤い瞳が付いている何かの生物を模したようなヘルメットを被っており、首にもヘルメットと同じデザインをしたペンダントが巻かれていた。

彼ら不思議そうに周囲を見渡していた。

「ねえ、姉ちゃん、ここってどこなんだろう?」

1人の少年がそう聞くと、彼の隣の女性は「さあ? わからないわよ。」と答える。

奇妙な話だが、彼らは誰1人としてこの場所が何処なのか、更には今何時なのかも知らない。

「でもさ、僕達ジュニアライダー隊はジンドグマの壊滅と一也さんの宇宙への出発を祝って谷モーターショップでパーティーの準備をしていた筈だよ。なのにどうしてこんな場所にいるんだろう?」

ジュニアライダー隊……
それは先程会話をしていた女性 草波ハルミ を隊長とし、弟 草波良 とその友人達で結成された仮面ライダースーパー1のサポート部隊である。
皆、子供でありながら仮面ライダースーパー1と共に地球制服を論む組織 ジンドグマ と戦い抜いた、勇気ある少年達であった。

彼らは先程ジュニアライダー隊の一員の 田中タケシ が言っていた通り、仮面ライダースーパー1 沖一也 がジンドグマを壊滅させ、それを祝つてのパーティーの準備をしていた。
一也もやって来ていよいよパーティー……そう思っていたが、彼らの目の前に突如として銀色のオーロラが現れた。

何だか分からないけど離れないと……。

そう思い逃げようとするジュニアライダー隊隊員達であったが、一瞬にしてオーロラが一也を飲み込んでしまった。

それを見たハルミは「待ってえ、一也さん!!」と叫び、一也を追つてオーロラの中へと入っていった。

ジュニアライダー隊はその光景を見て、ハルミの後を追うオーロラの中へと入っていったのだ。

その後の事はよく覚えていない……。
気が付いた時にはこの山奥で気を失っていた。

「はあ、あのオーロラさえ現れなければ今頃パーティーでご馳走を食べてたのに……。」

肩をがっくりと落とす巨漢の少年 秋田大助^{あきぬま}。

今日はパーティーだから…と朝食を抜いてしまった事を今さら後悔
してしまう。

「ねえ、ハルミ、私たちどうなっちゃうのお？」

「もう、そんな泣きそうな声で言わないでよ。子供達だって泣い
てないのよ。」

情けない声を出すハルミの親友の、ショートカットが特徴の女性
水沼マサコ。

普通ならここで泣きそうになるのもわかるが、マサコはジュニアラ
イダー隊の副隊長である。

もうちょっと副隊長らしい態度を見せて貰いたいものだが…。

「でもさ、でもさ、あのオーロラって何だったんだろう？ それに同
じオーロラに入った一也さんは何処に行ったんだろう？」

「さあ、わからないな…？」

そう話しているのはジュニアライダー隊の一員であり、大助に比べ
細い体つきが特徴の 松岡シゲル と、顎に手を当てながら首を傾
げる 村山マモル である。

「考えても分かんないな。そもそも姉ちゃんがオーロラの中に入
ったからいけないんじゃないの？」

「な、なによお！！ だって、また一也さんがいなくなって悲しい
思いをするなんていやだったんだもん！！」

良の言葉にハルミは赤面になりながら叫んだ。

先の、悪魔元帥とスーパー1との戦いで、ハルミはスーパー1の死
を告げられた。

スーパー1の死体を宇宙に捨て去るといふ悪魔元帥の言葉に、ハルミは死ぬなら一也と一緒に…と自らも宇宙に捨てるように願った。結局、スーパー1が無事生きていた為そんな事にはならなかったが、ハルミにとって一也は掛け替えのない男性ひとになっていた。

一也がオーロラに入った時も、このままではもう2度と会えないよ
うな気がした。

だからこそ、危険を顧みずオーロラの中へと入ったのだ。

今だって眼を覚ましたら一也がいなかった事で、何かあったのではないか…と、心配でしようがないのだ。

姉弟喧嘩を続けていると「止めるよ。」と皆が2人を止めた。

「今は喧嘩してる場合じゃないだろう。」

「そうだよ、一也さんを皆で探るのが先だろう。」

そう言われハルミと良は我に返る。

確かに今は喧嘩している場合ではない。

同じオーロラに入ったのならば一也だってこの山の何処かに居る筈
…。

ならば、一也を探すの今一番すべき事だ。

そうすれば、この場所が何処だかもわかり、元の場所に戻ることに
って出来る筈…。

「そうよね、一也さんは絶対無事よね…、なんだって仮面ライダー
スーパー1だもん…。」

ハルミは自分に言い聞かせるようにそう呟いた。次に顔を上げた時には、先程の暗い顔とは違い、普段の直ぐ事件に首を突っ込むお転婆娘の顔になっていた。

「よし、それじゃあ、ジュニアライダー隊、皆で一致団結して一也さんを見つけるわよお!!」

ジュニアライダー達隊長としてそう宣言すると、良達は「おお!!」と腕を上げ大きな返事をした。

かくしてジュニアライダー隊の山道搜索が始まった。

山道歩き始めてから30分以上が経つ…。

獣道さえも無い山道を、木や草をかき分けながら進んで行くジュニアライダー隊の面々であったが、森特有の高温高湿気により、体中から汗が湧きでてくる…。

それにより、異常なほど喉が渴く…。

皆息を切らし、重たい脚を引きずりながら歩いていた。

「はあ…、俺達の自転車があつたらよかつたのに…。」

「いや…山の中じゃ意味無いんじゃないかな？」

大助の言葉にシゲルがそう突っ込みを入れた。

確かにこんな山道ではジュニアライダー隊が何時も使用する自転車だと歩くより動きづらい。

恐らく降りて自転車を引きずりながら歩く事になり、無いほうがましな状況になってしまう。

「そうだよな〜。…」と大助が答えると、誰も喋らなくなる。最初は「一也さ〜ん!!」と叫びながら歩いていたが、今はもう喋る体力すら残っていないかった。喋る力が余っていても、体を動かす力の方に使ってしまう…。

「お〜い、待ってくれ〜。」

後ろから声が聞こえてくる。

またか…。

そう思いながら後ろを振り向くと、ジュニアライダー隊最年少であり唯一の低学年である 石川マサル がゆっくりと歩いていた。体が小さいだけあり、歩く速さも遅い…。

既に、何十回と彼の声により歩を止められている。

「も〜う、しょうがないんだから〜。」

ジュニアライダー隊メンバーの紅一点、ツインテールにした髪が特徴でありマサルの姉 石川ミチルが来た道を戻りマサルの元へと駆け寄った。

「酷いでしゆ、僕を何度も置いて行くなんて。」

「誰も、追って行ってないでしょう、ほら行くわよ。」

まだ幼く呂律が上手く回らない口調で文句を言うマサルだが、そんなこと気にせずミチルはマサルの手を引っ張る。だが、マサルは動こうとしない。

「もう一步も動けないでしゅ、僕はもう歩きたくないでしゅ。」
「そんな、我がまま言わないでよ!！」

マサルを叱るミチルだが、それでも「駄目でしゅ。」とばかり言い泣き叫ぶ。

疲れてるのは誰だつて一緒なのに…。

そう思っていると良が重たい足を引きずりながらマサルの元へと駆け寄つて来た。

「後ちょっとだから頑張ろう…。ここで頑張らないとジュニアライダー隊じゃないぞ。」

力強くそう言われたマサルは「わかったでしゅ。」と答え、立ち上がり再び歩き出す。

ミチルは良に「ありがとう。」と言つとマサルを追つて歩き出した。

お礼を言われた良は照れて暫くの間、顔を真っ赤にしていた。

マサルも加えて再び歩き続ける面々だが、流石にもう体力が限界…。歩く力さえ残っていない…。

ここで休憩にしようか…。

そう思っていると、急にマサコが辺りを見回し始めた。

ハルミは「何してるのよ。」と聞いた。

「水の音が聞こえるのよ、ほら、聞こえるでしょう!！」

言われた通りに耳を研ぎ澄ませてみる。

すると確かに水の音が聞こえてきた。

「本当だ水の音だわ!!」

「ねえ、姉ちゃん、行ってみようよ!!」

先程までの疲れも忘れ、水の音が聞こえてきたという場所に向かって走りだす。

走っていくに連れて、木々の終点を示すかのように光が差し込んでくる。

光に向かって体を投げ出し林から出ると、耳に入るのは川のせせらぎ…。

眼に入るのは透明な水が太陽の光により、光り輝く…河。

それはただの河であるが、彼らにとっては希望の恵みであった。

「やった〜。」

口々にその声を上げると河へと走っていく。

河までもう少し…、あと少しで水を飲む事が出来る…。

すると、河に辿り着く寸前、目の前に奇妙な服装をした男女が現れた。

やっと人間に会う事が出来た。

誰もがそう考えていたが、彼らは可笑しなことを呟いていた。

「子供が7人に…、女性が2人…、丈夫な骨を持ってるか分からないけど、腹の足しにはなるんじゃないのか？」

「そうね、じゃあ…始めましょう…。」

徐々に男女の姿が変化していく。
体中に奇妙な模様が浮き出て、眼の色が黒から黄色に変わる

黒に近い緑色をしており、片腕にはそれぞれ大きな鉄を持っていた。
彼らはこの世界の怪人であり、その名を魔化魍。

今、現れたこの2人は巨大な魔化魍の飼育係 童子 と 姫 。

だが、そんな事をこの世界の住人では無いジュニアライダー隊が知る筈もない。

童子と姫の姿を見て思わず、自分達の世界の怪人である「ジンドグマ…。」と呟いてしまう。

「でも、ジンドグマは一也さんが滅ぼした筈だよね…。」

「でもさあ…だったらこいつ等は何なの？」

わかる筈がない…。

1つわかる事は自分達が恐らく狙われているであろう事だけ…。

すると突如、河の中から「ザババアアアアン」と巨大な音と水飛沫を上げて巨大な生物が現れる。

この生物は童子と姫が育てている怪人 バケガニ 。

名前の通り巨大な蟹の怪人。

バケガニは挨拶代りと言わんばかりに、背中から泡を噴出させた。

泡はジュニアライダー隊の手前で落ちたが、地面は噴出された泡により「ジュワ、ジュワ…」と奇妙な音を起して解け始めていた。

それを見たジュニアライダー隊達は驚きから悲鳴に近い声を上げてしまう。

「サア、骨ヲヨコセ。」

童子怪人体は鉄を前に出しジュニアライダー隊を威嚇する。
彼らはバケガニを育てる為に人間の骨を欲しており、先程のバケガニが嘔き出す泡で邪魔な肉体を解かし、骨だけ手に入れるのが目的だ。

「サア…。大人シクシロ…。」

姫怪人体はゆっくりと近づいてくる…。

急にこんな山奥に飛ばされたり、人間がジンドグマでは違う怪人に変身したり、巨大な蟹が現れ、更には骨をよこせと言っていたり…。
先程から、わけのわからないことばかりが起き、もう何が何だか分からないが、唯1つ…。
1つだけしなくてはいけない事がわかる…。

それは…。

「ジュニアライダー隊！！ 逃げろおお！！！」

今すべきこと…それは全力で逃げることだ。

その声と同時にジュニアライダー隊はバケガニとは逆の方向に走り出した。

逃げる彼らを見て童子と姫はゆっくりと追い掛け始める。

バケガニもその巨大な体を動かしジュニアライダー隊を追い掛ける。

怪人はゆっくり追いかけているとは言っても、人間からしたらそれは十二分に速い。

このままでは、1分もしないうちに追いつかれてしまう。

「きゃあっ!!」

するとハルミが小石に躓き転んでしまう。

それに気付いた良は走るのを止め、後ろを振り向き「姉ちゃん!!」と叫んだ。

他のジュニアライダー隊隊員達もそれを聞き、動きを止めてしまう。

「駄目!! 皆逃げて、じゃないと追いつかれちゃう!!」

大声でハルミが叫んだ。

既に童子達はハルミのすぐ近くまで迫っており、もし助けに来たならばその人まで襲われてしまう。

もう自分は助からない。

だけど皆には助かってほしかった。

童子達が遂にハルミまで到達する。

もう助からない…。

誰もがそう考えていると、茂みの中から人影が現れた。

その影は地面を勢い良く蹴り、一瞬にしてハルミの背後に…童子の前に降り立った。

「はああ!!」

影はそう叫びながら拳を振り落とした。

その拳は雷撃を纏っており、それを喰らった童子は断末魔の叫びを

上げ四方八方に爆発した。

一瞬の内に起きた出来事にハルミは啞然としながら童子を倒した影を見る。

緑色の体に、左腕にはリストバンドの様な物が巻かれており、顔の周りは銀色の縁取りが施されており、額には鬼の面、それに一本の角が生えていた。

銀色の拳で今度は姫を殴り飛ばすと、その人物は後ろを振り返り「大丈夫すつか。」と尋ねてきた。

「鬼…？」

急にその顔を直視したハルミは思わずそう呟いてしまった。額に生える角が鬼である事をどうしても連想させてしまう。

するとジュニアライダー隊が「鬼なんかじゃないよ！！」と叫んだ。

「仮面ライダーだよお！！」

「えっ。」と驚きながらももう一度確認してみると、確かにライダー象徴ともいえるベルトがはめられていた。

仮面ライダーにしては異形の姿だが、スーパー1と共に戦っていた仮面ライダーの中にも目の前のライダーに劣る勝らない位異姿をした者もいた。

そう考えると、この鬼のような外観をした者もライダーなのかもし

れない…。

そんな事を考えていると木々の中から高校生くらいの物腰優しそうな少年が現れる。

その少年は着物の様な服を纏っており、背中にはエレキギターのような物を背負っていた。

「轟鬼さん！！ 烈雷です！」

少年は奇妙な形をしたエレキギター 烈雷 をハルミの前の戦士

轟鬼 に投げた。

轟鬼はそれを見事キャッチした。

「明日夢君、ありがとうございます！！」

そう礼を言うと、雄叫びを上げて残ったバケガニへと向かって行った。

明日夢と呼ばれた少年は轟鬼がバケガニの注意を引いているうちに、ハルミの側に駆け寄った。

「大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

まるで医者のような口調でそう聞く明日夢に、ハルミは「足が…。」
と言いながら右足を見せる。

先程転んだため、左足の膝をすりむいて血が出ていた。

治療してあげたいのは山々だが、ここには治療道具が無い。

明日夢はハルミの腕を掴み、自分の肩に回した。

「今は我慢してください…。取りあえず、ここは危険なので非難し

ましよう。」

「さあ、皆さんも。」とジュニアライダー隊のメンバーにもここから離れるように促した。

それにしたがってジュニアライダー隊は轟鬼とバケガニから少し離れた岩場に逃げ込んだ。

良やシゲル達は轟鬼の戦いを見ながら明日夢に話しかける。

「ねえ、あのライダーってなんなの？」

「そもそも、さっきの怪人って何？」

「あのギター…ええくと、れつ…なんだっけ？」

「バカね、烈雷でしょ。」

「ねえええ、何でしょんな着物の様な服を着てるんでしゅか？」

「私たちを助けてくれた貴方達って何者なの？」

一斉に質問してくるジュニアライダー隊の面々に明日夢は慌てた様子で「落ち着いてください。」と言った。

「幾らなんでもそんな沢山の質問を一気に答えられませんかよ。」

確かに明日夢の言う通りである。

それじゃ…とジュニアライダー隊を代表して隊長であるハルミが質問しようとする。

だが、言い掛けた瞬間。

大きな…何かが崩れるような音が聞こえてきた。

それは轟鬼がバケガニの足を烈雷で叩き斬り、バケガニが体勢を崩し倒れた音であった。

「よし、今っす!!」

そう言い素早くバケガニの背中に飛び乗ると、烈雷をバケガニの背中に勢いよく突き刺した。

そのれと同時に烈雷の刃が展開し、完全なエレキギターの形に変わった。

ベルトに装着されている弦が付いているバックルを烈雷の中央にはめると、腕でそれを弾いた。

辺りには烈雷が醸し出す鋭い音が響いた。

「音撃斬!! 雷電激震!!」

そう叫ぶと烈雷の弦を勢いよく弾き始めた。

烈雷から発せられる激しい音により大地が揺れ、辺りにはその音色しか聞こえなくなり、バケガニの体の中に清めの音が入り込んでくる。

バケガニは苦しそうに暴れ轟鬼を振り落とそうとするが、轟鬼はそれを耐え烈雷を一心不乱に弾き続けた。

「はああああああ…はあっ、はあああっ!!」

最後にもう一度力強く烈雷を鳴らすと、バケガニは体の力が全て抜けたかのように腕を地面に下ろし、木っ端微塵に爆発していった。

バケガニから勝利を収めた、轟鬼は「やったっす!!」と声を上げ、再び烈雷を弾き始めた。

それは先程バケガニを倒した演奏とは違い、普通の演奏にも見えるが…。

「ねえ、あれって最後もやらないと駄目なの？」

不思議そうにタケシが明日夢に聞いた。

「いや…そんなわけではないんですけど…。あれは轟鬼さんが言うには、大地を清める行為らしいですよ…。」

明日夢は苦笑を浮かべながらと答えた。

一同は暫くの間、轟鬼の本来なら全くする必要のない行為を見続けた。

轟鬼の演奏が終わり、明日夢がもう一度ジュニアライダー隊から質問攻めに遭い、この場所ではなんだから…と場所を移動するのはもう少し後の話…。

そして彼らは最後まで気が付かなかった。

その場所には鬼への変身の為に必要な2本の音角が落ちている事…。

河から数十メートル移動した場所…。

そこにはテントが張っており、中から1人の男が出てくる。

先程消滅した服の代わりに、別の服を身に纏い、気分を入れ替え大きく体を伸ばした。

「見つけたぞ…。」

すると背後から低い声が聞こえてきた。
効き覚えのない声に男が後ろを振り向くと、そこには奇妙な姿をしたライダーが立っていた。

W型の触角に青く発光する瞳…一見飾り気のないシンプルな姿にも見えるが問題なのはその色だ。

体の中央に銀色のラインが入っており、そこから左側は赤、右側は薄い緑色と別々の色に分けられていた。

そのライダーを見た事が無い男は「誰だ…。」と呟いた。

「俺に…質問するな…。」

そう答えると、そのライダーは体と同じ色のUSBメモリが差さっているベルトを展開した状態から閉じた。

その瞬間、煙と風が吹き荒れ、ライダーの体が鍍金を外すかのように消滅していく。

ライダーの変身が解けその場に赤いライダースファッシュの若い男が残った。

先程の姿もそうだが、この人物も男は知らなかった。

新敵の敵…。

だとしたら、変身を解く理由はない筈…。

「やれやれ、好きな地区に行ける能力があると言っても、最初に何処にいるかわからない君を探さなきゃいけないだろう？ 君を探すのは手が焼けるよ…日高仁志、いやヒビキって呼んだ方が良さんだ

「つたね？」

突如オーロラが出現しその中から少年 来人 が現れた。

男 ヒビキ はもちろん、来人の事を知っていた。

そう言えば来人がライダーに変身する為に相棒を連れてきた…そんな話を聞いた事がった。

恐らく、赤いライダースファツシヨンの男はその相棒であろう。

「よっ、久しぶりだな。」

気さくにあいさつするヒビキだったが、赤いライダースファツシヨンの男はいらついた表情で「挨拶なんて言い…。」と言う。

「とつとと本題に入ったらどうだ？ 俺はこんな山奥に居る趣味は無いんでな？」

それを聞いた来人は「わかったよ…。」と答えた。

「今日は会議に出席しなかった君にある事を伝えにこんな山奥まで来たのだ。」

来人は静かにこの世界で起こった異変について話し始めた。

その話を真剣な表情でヒビキは聞き続けた。

山の中心部…。

そこには赤い瞳をした銀色の仮面ライダーが戦闘態勢をとりながら辺りを見回していた。

木々の中に居る敵が何時襲ってくるか分からない…。
感覚を研ぎ澄まして、敵が攻めてくる場所を探る…。

風が吹くと、辺りが一気に静まり返る…。

ザツ、ザツ

木々の中を自由に動き回る音が聞こえてくる。

来る！！

「はあああああ！！！」

黒の体に、赤く縁取られて顔が特徴の鬼 裁鬼。
裁鬼は手に持つエレキギターの形状をした音撃斬 閻魔 を大きく
振り落とした。

銀色の仮面ライダーは右腕で見事閻魔を受け止めた。

「何だと！！！」

受け止めるなどという予想外の行動に思わず声を上げてしまつ。
力強く閻魔を引き抜こうとするが、幾ら引つ張っても抜く事が出来
ない…。

あり得ない…

こんな力、先程までは無かった筈…。

そう言えば、この銀色のライダー、先程までは銀色の腕をしていた

ような気がするが、今は赤色の腕になっている…。
これは…？

そう考えている間に、銀色の仮面ライダーは閻魔から腕を放した。

「赤心少林拳！！ 3点突き！！」

刹那、銀色の仮面ライダーは裁鬼の体の3か所に鋭い突きを喰らわせた。

本来人間へと喰らわし効果を發揮する技だが、元が人間である裁鬼にも効果は發揮された。

一撃目、体が動かなくなり…。

二撃目、体が痙攣し、力が抜けていき抵抗出来なくなる…。

三撃目、痛みも感じるよりも速く、体が後方に吹き飛ばされた。

これぞ、銀色の仮面ライダーが得意とする赤心少林拳の1つであり、人間の急所を突く技… 3点突きである。

幾つもの木々に激突し、体中を撃ちつけた裁鬼は倒れ動かなくなる。命までとはっていない…。
気を失っているだけだ。

銀色の仮面ライダーは裁鬼がもう襲ってこない事を確認すると安心したように肩を下ろした。

「まさか仮面ライダーが襲ってくるとは…、本郷先輩が言っていたライダーが敵と言うのは本当だったのか…。」

古代より受け継がれた技と、最新の技術を併せ持った銀色の仮面ライダー仮面ライダースーパー1 は静かにそう呟いた。

A part (後書き)

まさかのジュニアライダー隊全員登場です。

少年仮面ライダー隊ではありませんよ、ジュニアライダー隊です。

最近の映画で活躍してたのが少年ライダー隊なので、その時からジュニアライダー隊を出したいと思い登場させました。

性格わけが凄く難しかったです…。

恐らく凄く変になっています…。

今回の主役ライダーは轟鬼です。

PS2のゲームでも轟鬼ばかり使っていましたし、轟鬼はかなり好きなキャラなので…。

師匠である斬鬼さんの登場は…まだ秘密です。

Wの片割れは…もうお分かりですよね？

ハーフボイルドの探偵はちゃんと生きてますよ。

W編で登場する予定です。

そして最後に、裁鬼さんファンの方々本当にすみません！！

私も嫌いではありませんが、どうやらられている姿が浮かぶもので…。

前書きにも書きましたが来週は更新できないと思います。

本当にすみません。

それではこれより下はキン肉マンの名台詞コーナーです。

エレメントブレイドでした。

キン肉マン名台詞&迷台詞コーナー

と言うわけで記念すべき第2回目です。

最初に第1回目で書き忘れた事をかきますが、時間系列等はバラバラで書いて行きたいと思います。

だからキン肉マン?世をやったと思えば、次は初期の最初の方の名台詞だったりするわけです。

それでは第2回目です。

『おちこぼれのどこが悪い 世の中ウルトラマンやゴジラばかりじゃないわい』

文庫版キン肉マン1巻「孤独のドジ怪獣の巻」 キン肉マン(本名・キン肉スグル)談

まだ初期の巨大化して怪獣退治を専門とし、人々から「ダメ超人」と罵られていた頃のキン肉マンの名台詞。

キン肉マンは、人々から「こんなのが本当にヒーローなのかね。」や「ダメ超人」と言われ石礫を投げられる悪夢に毎晩魘されていた。そんなある日、まさかの総理大臣!?より街に怪獣が現れたという連絡が入る。

現場に急行したキン肉マンが見たのは、一向に街を襲わず泣いてばかりいる怪獣ナチグロンの姿。

怪獣でありながら、その弱々しいナチグロンはダメ超人であるキン肉マンに一瞬で負けてしまう程…。

その後、ナチグロンは余りの弱さから人々に「ダメ怪獣」や「弱虫」

と罵られ石礫を投げられてしまう。

怪獣にだつて自分みたいなやつはいる…と泣いて訴えるナチグロンの姿が、キン肉マンが每晚見ている悪夢と重なって見えてしまう。

次の瞬間、キン肉マンはナチグロンを人々から守り、上の台詞を言い放った。

その後ナチグロンはキン肉マンに静かに暮らすように言われ、何処へと去っていく…。

ヒーローや怪獣が皆が、格好よく強いわけではない…。

中にはどんなに頑張ったって、情けなく弱い奴だっている。

果たして彼らを「格好悪い」などと言ってもいいのか？

彼らは彼らで頑張っている、それをわかってあがなくてはいけない。そんな事を教えてくれる名台詞です。

余談ですが、このナチグロンと言う怪獣は原作とアニメ（アニメでは登場エピソードが全く違うが…）共々、後にキン肉マンの舎弟になる。

ただし、原作版ではVSライメンマンを最後にいつの間にか消えていたが、アニメ版では王位争奪戦の最後まで残っているという奇跡…。

彼の活躍の場はアニメだったのだろうか…。

B part (前書き)

お久しぶりです、エレメントブレイドです。
…更新が遅れました。

テスト終わったと思ったたらすぐそのあとに模試テストがありました
…。

しかも、私の家にはパソコンが一台しかなく、しかもそのパソコン
が置いてある部屋がクーラーなし、扇風機はコンセントの空きがな
く使えない、しかも昼間は直射日光で室内温度34度と…夏には最
悪な条件がそろった部屋でした…。

それで暑くて書けませんでした…。
団扇だけじゃ無理です…。

それでもちよくちよく執筆してやっと響鬼編・B part が完成し
ました。

アギト編は8話も続きました、響鬼編はどこまで続くのか…。
なるべく、アギト編よりは短くしたいです。

今回も前回と引き続き、ジュニアライダー隊がメインの話となっ
ています。

そのため、戦闘シーンは無しです。

今回、急いで書いた為、可笑しい文章があるかもしれませんが、そ
れはいずれ修正します。

B part

沖一也・スーパー1と共に謎のオーロラに呑みこまれ別世界へと飛ばされたジュニアライダー隊。

辺りを見わして、木々ばかりの山奥に飛ばされたジュニアライダー隊は、この世界に存在する怪人 魔化魍 バケガニに襲われていたところ、鬼のライダー 轟鬼 と着物を着た少年 安達明日夢 に助けられた。

一体ここがどこなのか？

何が起ころうとしているのか？

それを聞く為に一同は明日夢達の拠点へと場所を移すことにしたのであった。

河から歩き出し数十分後…。

目の前に柵に囲まれた小さな村が見えてきた。

当然と言えば当然だが、この山には電気が通っていない。

その為に電柱が1個も見当たらない。

民家も木で作られた田舎で見かけそうな物ばかり…。

まさか、タイムスリップしてしまったのではないだろうか？

そんな錯覚まで感じてしまう。

取りあえずやっと村に付いた…。

これで休める…。

そう思いながらシゲルとマモルが柵を乗り越えて村に入ろうとすると、明日夢が驚いたように「ダメですよ。」と叫んだ。

急にの大声に驚いた2人は動きを止めてしまう。

「何で駄目なの？ だって何処から村に入ったって同じでしょ。」

ミチルがそう聞くとトドロキが「それが無理なんすよ。」と答えた。

ついでに現在トドロキは頭だけ鬼の変身を解いていた。

その為、首から下は緑色の鬼の体というとても奇妙な格好になっていた。

先程、大助がその事について質問したら「鬼に変身すると服が消滅するんすよお。」という驚きの言葉が返ってきた。

奇妙な能力を持ったライダーもいるんだな。と、ジユニアライダー隊の全員が感じた。

「この村には鬼を連れて入れないんです。僕達の住んでいる場所はあそこです。」

そう言いながら明日夢が指さしたのは、良く言えば味がある、悪く言えば幽霊が出そうな小さな屋敷…。

あんな場所に住んでるのか…。

思わず明日夢達に同乗してしまった。

「えっ、でも何で村に入っちゃいけないの？ だって貴方達は人類の味方なんでしょう？」

ハルミがそう言うと、明日夢とトドロキは驚いたような顔をしていった。

何か悪い事を変な聞いてしまったのか？

なんだかよくわからないが謝った方が良いかもしれない…。

謝ろうとすると、それよりも先に明日夢が「謝らなくて良いですよ。」

ただ…ちよつと驚いて…。」と答えた。

「取りあえず、僕は村に戻った事と皆さんの事を伝えに行くんで…トドロキさん、皆さんを頼んでもいいでしょうか？」

トドロキが「わかつたつす!!」と返事をすると、明日夢は「お願いします。」と足を怪我しているハルミを任せて、村の表門へと向かって行った。

残されたジュニアライダー隊の面々はトドロキの後に付いて行き屋敷へと向い始めた。

近づけば近づくほど屋敷がボロボロであるということが浮き彫りになっていく。

もし、台風でも来たら一発で吹き飛ばされそうである…。

誰もがそう感じていると、トドロキは申し訳なさそうに「いや、中は結構綺麗っすよ…。」と言った。

そうは言われても…。

皆、ただただ苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

明日夢は皆がいなくなったのを見送ると、表門から村へと足を踏み入れた。

先程の位置からでは分からなかったが、村の中心部はあの事件により半分以上が破壊されていた。

それでも、これだけで済んだのが奇跡なのかもしれない…。

そう考えながら、返り血で所々が赤くなった地面を歩きながら村長の元へと向かって行った。

屋敷に付いたトドロキは「戻ったつすよ。」と元気よく戸を開けた。

中は畳20枚がぎっしりと引き締められており、端には数枚の窓と小さな小部屋が設置されていた。

恐らく小部屋は着替え部屋やトイレである。

確かに外で見るよりは綺麗である。

だが、畳の上には無造作に投げ捨てられた着物や緑や青色をしたデイスクが部屋を狭く見せていた。

トドロキは畳へと上がると急いでそれらを端へと寄せて、ある程度のスペースを作った。

「聞こって、トドロキさんと明日夢君が2人で暮らしてるの?」

「いや、他にもいる筈なんっすけど…多分出払ってるんっすよ。」

トドロキは辺りをきよろきよろと見回して答えた。

出払っているという事は、一体何人がここで暮らしているのでしょうか?

そんな大人数で暮らしている様にも思えないが…。

「トドロキさん、帰ってきてるんですかあ?」

誰もがそう考えていると小部屋の1つから声が聞こえてきた。

一同が振り向くと、その部屋より上半身を曝け出した、明日夢と同一年位の男が出てきた。

風呂でも入っていたのか？

男の体中からは湯気が立っている…。

暫しの沈黙が流れる…。

この男は沢山の子供と女性2人を見て、驚きで目を丸くしていた。同じようにジュニアライダー隊も、突如現れた上半身を曝け出した男を驚いたように見ていた。

「す、すつ、すすみません!!」

男は顔を真っ赤にし急いで上の着物を羽織った。

その行動が可笑しくて面白かったジュニアライダー隊の子供達は声を上げて笑ってしまった。

それを見て笑ってはいけないと、トドロキは必死に笑いを堪えていた。

「ええ〜と、き、京介君、俺ちよつと着替えてくるんで、み、皆を見て貰えないっすか？」

「えつ、皆を見てるって…、というか、この人達って誰!？」

戸惑いながら叫ぶ男 桐谷京介 に構わず、トドロキは着替える為に小部屋へと入っていった。

暫く気まずい雰囲気が出る。

「取りあえず、適当に座ってください。」

この沈黙を打ち破る為に、京介はそう切り出した。

それを聞いたジュニアライダー隊は「疲れた〜。」などと言いながら畳に腰を下ろす。

慣れない山道を歩き、果てには怪人に襲われて心身ともに疲れ果てていた。

京介はも彼らの前で座る。

再び気まずい雰囲気の流れる…。

そもそも自分はこの少年や女性達が一体何者なのか分からない。

それなのに初対面で上半身を曝け出すという、失礼な姿を見せてしまった。

下の方を着ていたのが不幸中の幸いの様な気もするが…。

取りあえず、何か話題を切り出さなければ…。

そう考えていると子供達が着ている服や、被っているヘルメットに眼がいく。

変な衣装だ…。

ヘルメットやペンダントに付いている赤い複眼は、まるで何か生物を表しているかのようだ…。

赤い複眼？

それが妙に頭の中で妙に引っ掛かる…。

赤い複眼…。

何だか思い出せない…。

確か赤い複眼と言えば…。

「でも明日夢君とトドロキさんの様な、親切な人に出会えて本当にラッキーよねえ。」

「本当よお、あのままじゃ一也さんに会う前にジュニアライダー隊全員が野たれ死ぬところだったわよお。」

不意に聞こえてきたマサコとハルミの会話…。

その言葉は京介の頭の中で引っ掛かっていた疑問を解決へと導いた。

京介は「思い出した!!」と叫び立ち上がった。

「赤い複眼にライダー…お前等もライダーの手先か!!」

この地区では「仮面ライダー」の事を「鬼」と呼ぶ。

だからこそ忘れていた。

自分達がこうなってしまった原因を作ったライダー　クウガ　の存在を…。

確か、クウガの瞳は赤かった。

「ちょっと待ってよお、それって何のことよ!!」

「五月蠅い!!　子供だからって油断していたけど、今考えれば、怪しいからな。ジュニアライダー隊とか、特にその服装。それは俺達の村の服装じゃない、他の場所から来たんだろ…。そして、そんなこと出来るのはただ1人…ディケイドDCDだ…。」

反論するハルミに京介が吐き捨てるように言った。

彼らがディケイド率いるライダーの手先であり、別地区から自分達を殺す為にやって来た。

京介はそう思い込んでいた。

本当は別地区などではなく、別世界から来たのだが…。

「ねえねえ、でいけいど…って何のこと？」

「わからないよ、それにライダーの手先って…。」

「でも僕達ジュニアライダー隊ってライダーの味方なのは事実だよ
ね？」

「確かに、そうだよね…。」

「でも、何か可笑しいわよ…、まるでライダーが敵みたい…。」

良や大助達は京介の言葉を聞き不思議そうに話します。

その会話を聞くと「やはり、ライダーの…ディケイドの仲間か。」
呟き、着物にしまっていた音角を取り出す。

京介から殺気のようなものを感じたジュニアライダー隊は立ち上がり、
数歩後ろへと下がった。

音角を鳴らそうとした瞬間、「ガラー」と音を起てて扉が開いた。

扉を開けたのは村に報告を告げて戻って来た明日夢であった。

「何やってるんですか!!! 桐谷君!!!」

音角を構える京介に、体を震わせて京介と距離をとるジュニアライ
ダー隊…。

その光景をお見て、明日夢は驚きの声を上げた。

騒ぎを聞いて、着替えを済ませたトドロキが小部屋から出てくる。

その光景にトドロキも明日夢と同じように驚いた。

「明日夢、お前一体誰を連れてきたんだよ…。こいつ等ライダーの…
…ディケイドの仲間だって言ってるぞ…。」
「ライダー…の…。」

そう言えば、先程から「鬼」ではなく「仮面ライダー」と呼ばれた
事を思い出す。

確かに、村人たちは自分達の事を「仮面ライダー」などと呼びはし
ない…。
すると、彼らは…。

辺りを張り詰めた空気が包み込む。

この空気を打破する為に京介が音角を鳴らそうとすると、「ちよっ
と、待ってください。」と明日夢が制止する。

「何するんだよ、明日夢。こいつ等はライダーの仲間なんだぞ…！」

京介は明日夢を振り払おうとする。

「彼らは魔化魍に襲われていたんですよ…！ ディケイドの仲間が
襲われますか…！」

「魔化魍に襲われていたのか…？」

そんな事初めて知った。

だが、それは仕方がない事…。

行き成り戻って来たトドロキに押しつけられたようなものなのだ。

「それにこの人達は、仮面ライダーは人類の味方だって言ったんで
す…。そんなこと言ってくれる人は今までいましたか？」

ライダー
鬼は悪魔の手先などと好き勝手暴言を言う人はいたが、人類の味方だと言ってくれる人物は1人もいなかった。
横を見てみると、トドロキは黙って頷いた。
どうやら、この話は真実の様だ。

その様子を見ていたハルミは「ねえ…。」と明日夢たちに話しかけた。

「さつきから、デイケイドって一体何の事なの？ それにライダーの仲間だといけない理由ってなんなの？」

先程から彼らの言葉の意味が理解できない…。
何か会話に壁の様な物があるように感じる。

しかし、それは明日夢達も同じ事…。
彼らにもジュニアライダー隊の事が理解出来なかった。

「一回…話しあってみませんか？」

明日夢がそう提案すると、一同は自分達の現状について話し合うことにした。

ジュニアライダー隊は自分達の世界で起きた出来事を、順を追って話した。

過去幾多の秘密結社が世界征服を狙い、その度に人類と世界を守るため、悪の秘密結社と戦い抜いた戦士 仮面ライダー が現れた事…。

ジュニアライダー隊は9人目のライダー・スーパー1と共にジンドグマと戦った事…。

謎のオーロラに巻き込まれて、気付いたらこの世界に居た事を…。

明日夢達も同じように自分達の事情を話した。

過去から鬼の力を持つ陰陽師が戦っていたが、近年何らかの影響で鬼に変身する力を得た事…。

この世界の最初のライダー・クウガが暴走し、人々から仮面ライダーは恐怖の対象と見られている事…。

鬼も例外なく差別され、それが基で人間に反旗を翻す鬼と、人間を守る鬼に分裂した事…。

1週間前ディケイドが現れ、ライダーを従えて人間を抹殺している事…。

その際に街を幾つもの地区に分割した、不思議な力で出られなくした事を…。

「そんな…ライダーが敵だなんて…。」

話を聞き終えハルミは驚いたように呟いた。

ジュニアライダー隊にとってはライダーが敵なんて事実が信じられなかった。

彼らにとってライダーとは人類の自由と平和の為に戦う存在なのだ。

「いや、僕達も信じられませんよ、9人のライダーとか、オーロラを潜ったらこの山に居たとか…。」

先程バケガニに襲われた際に転んで怪我をしたハルミの足を消毒しながら明日夢が言う。

消毒液を塗り、足に包帯を巻き処置が終了する。

ハルミが「ありがとう。」と礼を言つと、明日夢は照れたように「いえ、大したことはしてません。」と答えた。

「でも、どちらも真実だと思いますよ。」

すると屋敷の中に別の女性の声が響き渡った。

扉の方を振り向くと、「唯今、戻ってきました。」と元気よく挨拶をする女性がいた。

更にその後ろから、眼鏡を掛けた男性が「随分と、ややこしいことになってるなあ。」と言いながら入って来た。

「日菜香さんに、ダンキさん、何時からそこに居たんですか？」

「いやあ、その人達が話し出した所からいたんですけど、入るタイミングを失くしちゃいまして。」

明日夢が驚いたように聞くと、女性 立花日菜香 は照れたようにそう答えた。

突如現れた男女に良は明日夢に「この人達誰？」と尋ねた。

「あつ、紹介しますね。トドロキさんや桐谷君と同じ鬼…ええ」とライダーの方が良いんでしたっけ？ ライダーの1人のダンキさんです。それでこちらの女性はライダーの監視及びサポートをする立花日菜香さんです。」

そう説明する眼鏡を掛けた男性 ダンキ と日菜香は「よろしく。」と挨拶をする。

それにジュニアライダー隊も「よろしくお願いします。」と挨拶を返した。

「真実だと思うって…どういう意味なんすか？」

先程の言葉に付いて質問すると、「そうそう、その話なんですけど…。」と日菜香は話し始める。

「前に姉上に、世界は幾つにも広がっていてその中にはこことは全く異なった世界があるって聞いた事があるんですよ。多分、皆さんもそれなんじゃないでしょうか？」

日菜香が言っているのは平行世界説パラレルワールドの事である。

確かに、それなら辻褄が合う…。」

「でも、そんな簡単に別の世界から別の世界に行けるんですか？」

「うーん、私もわからないのがそれなんですよね。」

世界が幾つもあるとしても、それはそれぞれ独立し互いに干渉することは出来ない。

もしそんな簡単に世界を渡る事が出来ると言うなら、世界はパニツクになってしまう。

だからこそ、わからなかった…。」

ジュニアライダー隊が何故この世界に飛ばされたのか…。」

「うーん、分からないな。こんな時に、ヒビキさんやザンキさんがいてくれたらな。」

そう言ってしまった後、「しまった!!」と京介は感じた。

2人の前でこの言葉は禁句であった。

恐る恐る隣を見てみると、トドロキと明日夢の表情が暗くなっていた。

そんな2人の豹変ぶりにシゲルはダンキに「ザンキとヒビキって誰？」と聞いてみた。

その声が聞こえたトドロキは「ザンキさんは…。」と話します。

「ザンキさんは俺の師匠つす…。俺にいろんな事を教えてくれたんですけど…。あの日デイケイドに殺されたんつす…。」

忘れもしない。

デイケイドがこの村に来た時、自分達は必死に戦った…。

だが、その圧倒的な力の前になす術なく敗れてしまった。

逃げる事も出来たが、ザンキはデイケイドに襲われていた村人を守り、刃が心臓を貫通し…。

息を引き取ってしまった…。

ザンキは最後まで人を守ろうとしていた。

例え人間からどんな罵倒を浴びせられようが、必死で人間を守った。

「だから俺決めたんつす。ザンキさんの分まで、ザンキさんが最後まで守った人間を守ろうつて!!」

壁に掛けているザンキ愛用の音撃弦 烈斬 を見ながら力強く宣言した。

「でも、酷いわよ。鬼はそこまで人間を守ろうとしてるのに、何時までも敵扱いされるなんて…。」

ライダー
鬼は人間を守ろうとしているが、人間には何時まで経ってもその思いが届かない…。

ライダー
何時まで経つても鬼は差別され、恐怖の対象なのだ…。

それらの事がハルミ達ジュニアライダー隊は悔しかった。

出来る事なら、この村…いや、この世界の人間全員に「ライダーは味方だ。」と言ってやりたかった。

「それなんですよね…。」と明日夢が不意に呟いた。

「鬼が2勢力に分かれたのも…、ヒビキさんがディケイドの仲間になったのも…。」

ヒビキ…。

それは先程の会話に出てきた、もう1人の人物であった。

だが、ジュニアライダー隊は誰の事を言っているのかさっぱり分からない。

それに気付いた京介が重苦しい口調で「ヒビキさんは…。」と答える。

「俺の師匠で、明日夢の恩人だよ。」

明日夢は鬼ではなく人間であるにも関わらず、鬼であるヒビキの事が好きであった。

それは、師弟などではなく、人間として…人生の先輩として好きであった。

この山から下りて、医療を学びたい…。

そんな明日夢の夢を真剣に聞いてくれたのはヒビキだけであった。

明日夢にとってヒビキは掛け替えのいない存在であった。

だからこそ、信じられなかった。

ヒビキが「わからなくなった…。」と言って自分達の前から姿を消

した事が…。

次にヒビキと出会った時、彼がディケイドの仲間になっていた事が…。

「ヒビキさんは…人間が守っていい存在なのかわからなくなっただよな…。だからこそ俺達の前から姿を消し…、俺達の敵になる立場で現れた…。」

ダンキや京介もヒビキが敵として現れる事が信じられない…。

だが、それが真実なのだ…。

今はもう…彼は人類の敵なのだ…。

倒さなければ、いけない存在なのだ。

「だけど…。」と再び明日夢が話し始める。

「僕はヒビキさんが敵になったなんて思えない。だって、ヒビキさんはあの時だって、鬼も、人間すら殺さなかったんだ…。人間を殺していたのは見た事もないライダー達だけ…。だから…。」

そこで言葉が止まってしまった。

自信がなかった。

言えなかった。

いつか、絶対に戻って来てくれる。

と…。

その頃、山奥で農業に営む1人の男性がいた。鋤を持ち、額に汗を浮かびながら黙々と作業を続けていく。

彼の近くに立つ木の上には黄色や金色といった派手な着物を着た男がいた。

風が吹く度に木が揺れ、派手な格好をした男から「チャリン、チャリン」と小銭の音が聞こえる。

「なあ、ハバタキ…。」

木に登る男が農業に営む男性　ハバタキ　に話しかけ始める。

「なんか、トドロキが変な格好をした子供を連れて行ってたでえ。

あれは、絶対に何かあったんや？　もしや、埋蔵金が見つかったとかそんな事やないやろうか？」

派手な格好をした男はハバタキに「なあ、どう思う？」と意見を求めた。

しかし、ハバタキはそれには答えず黙々と作業を続けていく。

その光景を見て派手な格好をした男は「なあ、無視するなやあ。」と駄々を捏ねる子供の様に言う。

すると、ハバタキは派手な格好をした男を見ずに「止めてください。」と言い放った。

「もう俺は鬼じゃない。あんな生活はもう嫌なんだ!!」

名前からわかるようにハバタキは以前は鬼であった。

それも、人間に下剋上を狙う側の鬼…。

下剋上を狙う側の鬼は毎回血にまみれる生活であった。
人間を襲い、同じ鬼と戦う…。

やっている事自体は今のディケイドと大差ないのだ。
それなのに、鬼がディケイドの傘下にならないのは恐らく人間抹殺
と、人間の服従という目的の違いなのであろう。

そんな生活が嫌になり鬼から足を洗い、人間として生きること
に決めた。

だが、鬼を止めたからといって「元鬼」という理由から村に戻る事
は出来ず、自尊心から敵であったトドロキ達を頼るわけにはいかず、
誰にも会わない様にこんな山奥で暮らすことにしたのだ。

「…もう来ないでくれ。」

静かにそう言うと、派手な格好をした男は「つまらんなあ。」と言
い残し、木から木に飛び移り何処へ行ってしまう。
それを横目で見送った。

「子供達か…。何かあったのだろうか…。いや、もう俺は鬼じゃ
ないんだ、例えディケイドがここをどうしようが…、戦士ではない
俺には関係のない事だ…。」

再び鍬を振り下ろした。

全てを振り払うように、再び作業に没頭し続けた。

「951…952…。」

来人が去った後、ヒビキは黙々と修行をしていた。
現在しているのは片腕だけの腕立て伏せであり、体からは滝の様に汗が流れていた。

別世界から来た鬼ライダーにあの青年アギトが殺された。

しかも、そのライダーの仲間との1人がこの地区にいるらしい…。

その話を聞いてから、どうも落ち着かない…。

何かを楽しみに待っているのでしょうか？

彼らが自分の悩みに対する答えを教えてくれるでも言うのであろうか？

「998…999…1000…。」

兎に角、体を鍛えていたほうが落ち着く…。

その為に一心不乱に修行に取り込んでいた。

腕立てを終えると、次の修行に入ろうとする。

すると、こちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

ついに来たか…。

そう思いながら、その方向を振り向くと茂みの中より天然パーマのジヤケットを着た1人の青年が現れる。

服の上からでもわかる…。

その男のはち切れんばかりの筋肉が…。

自分と同様にこの男も体を鍛えている…。

そして、それと同じ事を男も感じていた。

男はヒビキを見ながら「貴方が…。」と呟いた。

「貴方が、本郷先輩が言っていた、この世界を支配する仮面ライダーですか？」

「よっ、その通りだ。待ってたぞ、青年。」

男 沖一也 に向かい、ヒビキは腕を敬礼の様に「シュツ!!」と気さく挨拶しながら答えた。

B part (後書き)

私はこの響鬼編ではなるべく沢山の鬼を登場させようと思っていました。

そのためにダンキヤ、ハバタキ、それに関西弁の鬼を登場させました。

ザンキさんは…すみません、やはり原作通り死亡してもらいました。本当は、たまたま山を下りていて、別のライダー編で登場させる予定でしたが…。

トドロキの決心の為に、その予定はなくなってしまいました。

ついでに京介は鬼の予定ですが…名前どうしましょうか？

Wikiで書いてあった通り「強鬼」にするか…。

それとも「京介（鬼）」にするか…。

皆さんはどっちの方がいいですか？

途中に登場した、ハバタキと関西弁の鬼…。

ハバタキは映画版とは違い妻はいません。

1人で暮らしている設定です。

関西弁の鬼は…誰かわかりますよね？

彼は自由気ままに行動している設定です。

最後に出会ったヒビキと沖…。

次回から戦闘シーンとなります。

それではこれより下はキン名コーナーです。

エレメントブレイドでした。

キン肉マン名台詞&迷台詞コーナー

『自分の戦いは記録されるためにあるんじゃない 宇宙の平和のためにあるんだ』

キン肉マン？世1巻 伝説の序章5「偉大なる父・スグルを超えて！」 キン肉スグル談（代弁者はウルフマン）

偉大なる伝説超人である、キン肉スグルは最後の戦い王位争奪戦の後、自分が戦った映像を全て燃やしてしまった。

その際に「もつたいない。」などと言う仲間達に言ったのが上の台詞。

ヒーローにとって大事なのは、人々からの名声や語り継がれる伝説ではない…。

大事なのは、皆を守ったという結果なのだ。

そんな事を教えてくれる台詞。

恐らく仮面ライダーやウルトラマンより、サイボーグ009に当てはまる言葉だと思います。

彼らは決して人知れず人類のために、時にはその命を落としながらも戦い抜いた。

決して人々から名声や、憧れの眼差しを浴びる事は無いんです。

それでも戦い抜いたのは、やはり人類の平和のため…。

正にこの台詞通りだと思います。

ついでに、キン肉スグルがこんな行為をした理由がもう1つあります。

それは、自分の戦っている映像を見たら、父親の偉大さに息子であ

るキン肉万太郎がプレッシャーを感じてしまう…。
息子にはのびのびと育てほしい…。そう思ってたの事です。
だが、万太郎にはその思いは届かず裏目に出てしまい、父親・キン
肉スグルの事を「本当は強く無いダメ超人」と認識してしまったも
よう…。
彼が父の偉大さに気付くのは更に後の話であった…。

C part (前書き)

すみません、更新が遅くなりました。

一応、私は受験生なので、志願理由書の作成なので忙しくて…。

今回、戦闘シーンが入る予定でしたが、次回に先送りになりました。戦闘シーンが入ると、一万文字を軽く、越えて二万文字に突破しそ…うだったのでは…。

それから、受験が終わるまで、名台詞コーナーは休みにしたいと思います。

楽しみにしていた方がいたら、本当にすみません。

C part

第5地区、木々の多い茂、その山の最深部で。

仮面ライダーが、人類を守る世界からやって来た、沖一也。

そして、仮面ライダーが人類を襲う、この世界のライダー、ヒビキ。その2人が出会ってしまった。

沖に挨拶を交わしたヒビキは木に掛けてあったタオルを取り、修行で流した汗を拭き始めた。

暫くして顔を拭き終わると、「フツ」と笑いながら沖を見た。

「こんなところじゃなんだし、良かったら場所を変えないか？ まあ、といっても俺のテントの近くで何も無いけど、お茶ぐらいならあるし、立ちっぱなしよりはましだろ？」

これから戦うことになるかもしれないのに、ヒビキからは殺気や敵意が全く感じられない。

それに気付いた沖は、普段と同じ態度で「別に構いません。」と答えた。

「よしっ、決まりだな…。」「そう言つと、ヒビキは場所を移動すべく歩き始める。

沖は黙って、その後を黙って着いていく。

その間、沖はヒビキの背中を見ながら、不思議な感情を、抱いていた。

何だか妙な気分だ…。

敵意という物が感じられない。

逆に、この男には不思議な魅力が感じられる。

本当に…この男が人間を襲おうとしているなんて、とてもじゃないが信じられない…。

もしかしたら、話し合いで、どうにかなる相手かもしれない。

そんな希望まで感じていた。

歩いて5分と掛らずヒビキのテントへと到着した。

テントの前には、昨日、焚き火をしたと思わせる、木々の燃えカスが落ちていた。

ヒビキは、沖をテントの前にある切り倒され、横になった大木の上に座るように勧めた。

それに応じた沖は黙ってその丸太に腰を下ろし、ヒビキはその間にテントに入ってしまった。

丸太に座り、辺りを確認してみる。

先程、ヒビキと出会った場所も山奥だったが、ここは更に山奥であり、人はおるか、獣さえも余り近づかない事がわかる。

それに、ヒビキが先程入った青いテントの中も、人が住む場所というよりも、その大きさから物を置く場所…。

あくまで拠点としているだけ…。

そんな印象が感じられた。

「よっ、待たせたな。」

すると、ヒビキがテントから出てくる。

その手には、アルミで出来た銀のコップが2つ、それに保温効果のある水筒が握られていた。

沖の隣へと腰を下ろすと、水筒を開けてアルミのコップに真っ黒な液体を注いでいく。

独特の苦みの匂いが、鼻へと届く。

直ぐに、その黒い液体が、珈琲コーヒーである事に気付いた。

コップに注ぎ終わると、ヒビキは「飲めよ。」とそれを渡した。

沖は、それを受け取ると、「頂きます。」と礼を言い、ゆっくりと珈琲を口に含んだ。

甘さの全く感じられない苦みから、これが黒珈琲ブラックであるという事がわかった。

半分ほど飲み終え口からコップを話すと、ヒビキが「へえ〜。」と、驚いたような、そして嬉しそうに、沖を見ていた。

「疑わないの？ 一応お前にとって、俺は敵で、悪い奴なんだろう？ それに毒が入ってるかもしれないだろう？」

言われてみればその通りである。

だが、沖は「いや〜。」と答える。

「なんとなくわかりました。貴方が、そんな姑息な真似をしない事が…。」

「成程ねえ…。」

納得したように呟くと、ヒビキも珈琲を飲み始める。

「何故なんだ…？」

急に沖が口を開いた。

ヒビキは「何が、何故なんだ？」と不思議そうに聞き返した。

「何故、貴方は人間を襲う？ 貴方は俺が見てきた中でもかなりの人格者だ。そんな貴方が、何で人間を襲う？」

理解が出来なかった。

出会った時から感じていたが、とてもじゃないがヒビキが人間を襲うように思えない。

すると、ヒビキは遠くを眺めながら「わからないんだよね…。」と、答えた。

その答えに、沖は思わず「わからない？」と、聞き返した。

「そう、昔はわかっていた…、いや、昔もわかっていたつもりだったか…。人間の誠実さも、汚さも、全部分かっているつもりだった…。」

そう語るヒビキの瞳には、何処か、寂しさや、悲しさの様な物が浮かんでいた。

人間の弱さを知り、鬼として守っていく事に迷いはなかった。

どんな事があるうか、その決意は揺るがない自信があった。

だけど、戦っているうちにヒビキが見たのは、人間の弱さではなく、人間の汚さばかり…。

そして、歌舞鬼の死を目の当たりにした際に、全てが音を起てて崩れた。

何だこれは…。

こんな自分勝手な存在を守るために、鬼になったのか？

こんな…人間を守るために。

その後、山を下り、当てもなく彷徨っていた際に出会ったのが、デイケイドだ。

デイケイドのやろうとしている事は、はっきり言うと、ヒビキは共感出来なかった。

幾ら、人間が分からないと言っても、ヒビキには人間に対する殺意はない。

ただ、他に行くあてもない上に、自分と似たような境遇のライダーたちに出会い、取りあえずはデイケイドの仲間になったのだ。

しかし、デイケイドには、「絶対に俺は人を殺さない。」、そう約束だけはしていた。

だから、あの時、デイケイドはヒビキに着いて行き、この山を襲ったのだ。

デイケイドが人間を襲い、ヒビキは街をや山を破壊するために。

話し終え、ヒビキは珈琲をもう一口飲んだ。

「青年はどうなんだ？ もし、人間がライダーを拒んで、俺たちみたいに迫害されたらどうする？ それでも、人間の為に戦えるって言えるか？」

自分に振られた、この議題…。

もし、自分が、この男と同じ立場だったらどうしたか？

そんな事…考えるまでもない。

沖は真直ぐと、ヒビキを見た。

「この拳は人間の夢の為に造られた体だ…。だからこそ人間を守る、どんなになっても人間を信じる…。俺はそう…誓ったんだ。」

力強く答えた。

人間の夢…宇宙への探索の為に改造してもらったこの身体。
そして、人間を守るために作られた古来より、伝わる拳法、赤心少林拳。

だからこそ、人間を守る。

だからこそ、人間を信じる。

だからこそ、何があっても、戦い抜く。

ドグマ帝国と戦う前に、沖はそう誓っていた。

それを聞いたヒビキは満足そうに「そうか…。」と笑った。

「じゃあさ、教えてくれよ。その誓い…ってやつを。」

「言葉…では無いんですよね？」

「…当然。」

沖もわかっている。

この男が、自分と戦う事を祈ってるという事を…。

少しの間、眼を瞑ると、空になったコップを置き、沖はゆっくりと立ち上がった。

「わかりました。この拳で…、貴方を救って見せます。必ず。」

続いて「流石…。」と言いながら、ヒビキも立ち上がった。

「一応聞いておくけど…武器の使用はありだよな？」

沖は黙って頷いた。

それを見たヒビキは、テントの近くに置かれていた刃 音叉剣 を手に持つ。

武器を使う事は卑怯ひみじな事ではない。

これが彼の戦い方なのだ。
ならば…。

自分も全力で行くまでだ。

ヒビキと数メートルの距離を取ると、右腕を垂直にし、左腕を右腕の手首に当てる。

それを、一気に目の前に移動させると、次は半開きにした右腕を前に出し、左腕をその下に右腕とは逆にし、添えるように合わせた。ゆっくりと前を出していく。

「変身!!」

両手を一気に時計回りに180度回転させた。
それと同時に、沖の体虹色の光に包まれた。

余りの眩しさに、ヒビキは眼を半分閉めてしまった。
それでもわかる。

黒のスーツを身に纏い、銀色の胸部のグローブにブーツ。
腰には、両端に5つの色のスイッチが入り、中央に銀色のバックル
が付いたベルト サイクロード。
雀蜂すずめばちを模した黒の模様が入った仮面には、大きな赤い瞳が光を放ち、
美しく輝いていた。

これが、青年の鬼なのか。

それを見た、ヒビキも変身するために、音角を取り出し、近くの木
にそれを当てた。

辺りに澄んだ音色が鳴り響き、ゆっくりと己の額に持ていく。
額に鬼の面が出現すると同時に、体が紫色の炎に包まれた。

「はあああああああ……てりやあああああ!!」

右腕を大きく振り、体に纏っていた炎を払うと、そこには紫色の鬼
の姿があった。

互いに変身が完了した。

2人の仮面ライダーは、どちらが言うわけでもなく、互いに戦闘態
勢をとった。

「そう言えば……」

ふと、ある事を思い出した。

これから死闘を繰り広げる戦士同士。

これを知らないのは可笑しな話だ。

「青年、名前はなんて言うんだ？」

そう尋ねると、直ぐに返事を変ええてきた。

「赤心少林拳、沖一也。…そして…。」

胸を張って答える。

自信の名前を…。

この、人類の夢の為に生まれた、この身体の名前を。

「仮面ライダー…スーパー1!!」

フリジンが付いた右腕を前に出し、左腕を曲げて、頭の後ろまで引き、仮面ライダースーパー1は誇らしげに叫んだ。

「良いねえ。」と、沖に出会ってから何度目になるか分からない、笑みを浮かべた。

「俺は響鬼だ。よろしく。」

シュツと敬礼の様なポーズをとり、響鬼が自らの名前を告げると同時に…。

どちらが言うわけでもなく、両者同時に、互いへと走り出した。

その頃、明日夢達とジュニアライダーはスーパー1と響鬼の激闘を

知らず、互いの現状についての話しを続けていた。

ジュニアライダー隊は、仮面ライダースーパー1・沖一也が自分達と同じでこの山の何処かに居る筈だけど見た事は無いか？

そう明日夢達に質問しても、見た事が無いという答えが返って来た。

次第に話は行き詰っていき、一向に進展する事がない。

その状況に飽きてきた子供達はトドロキとダンキと遊んでおり、気付いたらハルミやマサコも明日夢や日菜香と雑談をしていた。

「でも、ここって山奥なのに、包帯とか、傷薬もあるのね？」

ハルミは先程明日夢が持ってきた、小瓶に入った傷薬や包帯を見ながらそう呟いた。

山奥で、こんな昔の暮らしを続ける村には、このような物は不似合いの様に感じたのだ。

「いや、この村はこんななんですけど、山を下りれば普通に車とかが走ってますよ。一応、トドロキさんも車やバイクなら持ってますし。」

「私達、鬼のサポートは山から下りる事が許されているんですよ。それで月に何回か、ガソリンとか、消毒薬とか必要な物を買に行くんですよ。」

明日夢に続いて日菜香が答える。

そもそも、この村は文明も拒み昔のままに残しているが、山全体に文化が無いわけではない。

特に鬼達は文明を受け入れていた。

魔化魍と戦い重傷を負う時だったある。

魔化魍が山奥に居る時もある…。
仲間と連絡手段がとれない時もある…。

そんな時には必要となるのが、文明の産物である。
その為、月に1回、山を下りてそれらの物を購入していた。

「でも、デイケイドの所^{せい}為で、山から降りられなくなっちゃったんですけどね…。」

時期が悪かった。

デイケイドがライダーを引き連れて、人々を襲い始めたのは山を降りる前日…。

今月分の物資は購入出来ていない。

それに、デイケイドに傷を負わされた人や、鬼の治療のために傷薬や包帯を多様使用した。

その為、薬は底を尽きかけていた。

それだけではなく、移動手段のために使っていた、車や、バイクも、ガソリンが少ないという理由からここぞという時以外は使用せず、基本的に徒歩で魔化魍の場所へと向かっていた。

足腰の良い修行になる、と鋭鬼は言っていたが、往復だけで毎回クタクタになってしまう。

「あれ、でも鬼^{ライダー}って迫害されてて、勝手に外に出られないんじゃないの？ それなのに、薬とか買いに山を下りれるの？」

マサコが不思議そうに聞くと、京介が「ああ、そんなことが…。」と話し始める。

「確かに、俺達鬼は勝手に山を下りれない。それどころか、勝手にこの屋敷から外にも出れない。でも、村から選ばれた監視役が鬼と行動して、その内容を村に報告すれば多少の自由が許される…ってわけだ。」

その監視役というのが、立花日菜香や安達明日夢達だ。

もともと、日菜香の場合は昔から鬼と縁があった家計の為、姉も一緒に鬼のサポート及び監視をしているが、明日夢はそれとは違う。明日夢は鬼のサポートや監視を進んで立候補したのであった。

自分の夢を応援してくれた、ヒビキの力になりたかった…。鬼のサポートとしてヒビキの為に戦っている時が一番心安らぐ時であった。

ただどあの日、ヒビキはカブキに呼ばれて、皆に黙ってあの場所へと向かった。

そして…人間がわからなくなり、姿を消した…。

「でも、本当に頭に来るわあ。人間を守っているのに、監視役がないと勝手に外に出ちゃいけないなんて!!」

「しょうがないんですよ。それがハルミさん達のライダーと、僕達のライダーの認識の違いですから…。」

しょうがないで済ませて良い事なのか？

違う!!

そんな言葉で済ましていいわけがない。

ハルミはそう口に出そうとする。

「皆、大変よ!!」

すると、それよりも速く扉が開いて1人の女性が入ってくる。

その女性を見た日菜香は「姉上!! どうしたんですか?」と尋ねた。

日菜香の姉でありであり、同じ鬼のサポート及び監視役の女性 立花香須実 は「兎に角大変なの。皆ちよつと来て!!」と急いで皆を外に出るように促した。

何があつたかはわからないが、余りの焦り具合に、言われた通りに外へと出る明日夢達。

それに続いてジュニアライダー隊も外に出る。

その際に、香須実はジュニアライダー隊を見て「あれ? この人達は...?」と不思議そうに聞いてきたが、日菜香が「姉上には後で話しますよ。」と答えた。

屋敷の外では小柄な男が明日夢達を待っていた。

「エイキさん、何があつたんですか?」

トドロキ達と共に、人間を守る側の鬼である小柄な男 エイキ はそれを聞いて「あれを見てみる!!」と焦つたようにある場所を指さした。

指さした方向は緑が多い茂る山。

…の筈だつた。

「山が…赤い？ いや、燃えてる…？」

かなり遠く離れているが、それでもわかる。

新緑の木々が多い茂る山の一部分が、赤く染まっており、空まで赤く染まっていた。

何故山が赤く染まるのか？

原因は1つ。

その場所で炎が燃え盛っているのだ。

そこで、山火事が起きているのだ。

「でも、何であの場所で山火事が起こってるんすか？」

「もしかして、魔化魍じゃないんですかあ？」

トドロキと日菜香が疑問に起こった事を口に出した。

あんな人里離れた場所で山火事が起きるなんて余り考えられない。

ならば、魔化魍の仕業ではないだろうか？

すると、エイキは「いや、違うな…。」と答えた。

「人も滅多やたらに近づかないあんな山奥で、魔化魍が好き好んで活動するわけがないだろ。京介、明日夢…お前らなら心当たりがあるんじゃないか？」

行き成り答えを委ねられ、考える明日夢と京介。

山火事を起こす程の炎…。

人里離れた場所で、魔化魍では無い…。

そこで明日夢と京介は「あっ！！」と同時に、ある人物の名前が浮かぶ。

「もしかして…ヒビキさん…？」

思わず口に出してしまった。

京介もそれに続いて、「じゃあ、あれは…紅？」と呟いた。それを聞いた香須実は首を縦に振った。

「多分2人の言う通りヒビキさんの紅だと思うわ…。だから、魔化魍を倒し終えた私達は、それに気付いて戻って来たの。」

エイキと香須実が、魔化魍の討伐をしていた最中に、あの山火事に気付いた。

最初は2人も誰の仕業かわからなかったが、直ぐに響鬼の来名前が浮かんで来た。

それで魔化魍を討伐し、急いで戻って来たのだ。

すると、ヒビキの仕業と聞いたトドロキが「でも可笑しくないとすか？」と尋ねた。

「だってヒビキさんが紅になるのって化け猫とか河童とか…明らかに、どうにもならない魔化魍を相手にする時だけっすよね？ あんな山奥だと魔化魍は確認されませんし、一体誰と戦ってるんっすか？」

それが問題であった。

この世界の魔化魍はあんな山奥では一切活動はしない。

普通の魔化魍ではありえない事かもしれないが、この世界の魔化魍

は普通と違つのであった。

明日夢達が頭を悩ませていると、マモルが良に「もしかしたら…。」と耳打ちをする。

それを聞いた良は顔を輝かせ「絶対にそうだよ。」と答えた。

「スーパーだよ!! ヒビキっ…と言うライダーと戦ってるのは、一也さん!! 仮面ライダースーパーだよ!!」

良の叫び声に辺りは静かになった。

だが、直ぐにジュニアライダー隊は「そうだよ、そうに違いないよ!!」と騒ぎだした。

その時、ジュニアライダー隊の事がわからず、仮面ライダースーパー1の事を知らない、エイキと香須実はただ啞然としていた。それに気付いた日菜香は、再び「後で話しますよ。」と2人に言った。

「ねえ、あそこいけないの!!」

「いや…、行けますけど。あんな山奥じゃ時間が…。」

シゲルの問いに、明日夢は返答に困っていた。

すると、日菜香が急いで屋敷へと戻っていった。

直ぐに戻ってきたが、手には車の鍵が握られていた。

「不知火と雷神を使えば、すぐですよ。」

「でも、2台とも、もうガソリンが少ないからいざって時にしか使わないんじゃないか…。」

「今が、その使い時ですよ。」

横を見てみると、トドロキ達も同じことを考えているようで黙って頷いた。

「でも…。」とあまり積極的では無い、明日夢。
すると、トドロキが明日夢の肩を掴んだ。

「ヒビキさんに会えるかもしれないんすよ。明日夢君は、会いたくないんすか!！」

会いたくないわけではない。

でも、正直に言つと、会うのが怖い…。

もう自分の知っているヒビキとは違うのかもしれない…。

考えるだけで、体が恐怖から震えてくる。

だけど…。

僕は…。

明日夢はゆつくりと顔を上げた。

「僕は…ヒビキさんに会いたいです。」

明日夢は静かに、だけど、力強く宣言した。

皆、その答えを待っていたと言わんばかりに、笑顔になっていた。

「それじゃあ、皆で行きましょう!！」

「皆で…って、ハルミさん達も来るんですか!！」

「当然よお、だって、一也さんがいるかもしれないのよ。」

断つても、着いてくるんだらうなあ…。
思わず、苦笑を浮かべてしまった。

ジュニアライダー隊を含めた、鬼達は、山へと向かう為に、屋敷の裏に停められていた車までやってくる。被されていたビニールシーを、とると、大きな移動用の4輪車が姿を現した。

「さてと、じゃあ、私が不知火を運転するから、日菜香は雷神を
お願い。」

「わかりました。」と、日菜香は元気よく答えた。

人数が多い為、とてもじゃないが、1台では足りない。

そこで、念の為、トドロキとエイキを別々の車に乗せ、戦力のないジュニアライダー隊達も半分に分かれて乗る事になった。

いざ、出発しよう。

そう思った時、目の前に3人の人影が現れた。

1人は小柄な体に肩まで伸びた長い特徴の青年。

その横には、取り巻きの様に、坊主頭と太った男が着いてきていた。

明日夢はそ男達を見た途端、唇を尖らせた。
こいつらを、忘れる筈がない。

この長い髪の青年こそが、歌舞鬼を殺した張本人なのだから。

「これは、これは。皆さん、お揃いで、何処か行くんですか？」

その問いに、何も答えずに車に乗り込もうとする。しかし、坊主頭の男と太った男が、それぞれドアの前に立ち、彼らを制止した。

長い髪の青年は「あれ。」と山を指さした。

「鬼達の仕業ですよ。だから、僕はずっと言っていたんです。鬼の危険性を…。」

鬼の悪口を続けていくこの男。

ヒビキがいなくなった後。

この男はヒビキに襲われたと、村人に言いまわした。しかも、その言葉の半分以上は嘘。

自分達が山で山荘採りをしていたら、歌舞鬼と響鬼が戦っており、歌舞鬼を倒した響鬼が、その凶暴性から、自分達に襲いかかった…。そんな風に言ったのだ。

明日夢は必死にそれは嘘だと言ったが、分が悪かった。

この男は村長の息子…。

村人は皆、彼を信じてしまった。

そこから鬼の立場が更に悪くなったとは…言うまでもない。

「あんたたち、言わせおけばねえ…。」

顔を真っ赤にさせ、ハルミはこの青年へと近寄っていった。

「鬼の悪口ばかり言ってるのよー!!」
「鬼が居なければ、皆、あの怪物にやられちゃってるのよー!!」

大声で叫ぶハルミだが、青年は不敵に笑った。

「あの怪物ねえ…。ですが、鬼が居なければ、あの怪物も現れないんじゃないでしょうか？」

頭にきた。

思わず、ハルミはこの男を叩こうと、手を上げた。

「おっと…待ちなさい。」

すると、ここにいる誰とも違う、別の声が聞こえてきた。

声の方を振り向くと、1人の眼鏡を掛けた、50過ぎの男性がこちらに向かつて来ていた。

老人を見た瞬間、日菜香は「父上…。」と呟いた。

「立花勢地郎さん…。何で、ここに…?」

青年は青ざめた顔で、その人物 立花勢地郎 に聞いた。

勢地郎は「それを聞きたいのは、こっちだよ。」と返した。

「君達の方こそ、ここは一般の人は立入禁止だろう。それに、私の方は鬼の監視役の総監督として…用があつてね。」

笑顔で青年たちにそう答えた。

何か言つてやりたかった、青年たちだが、勢地郎は村人から一目置かれていた存在。

揉め事などは起こしたくはなかった。

「行くぞ…。」というと、青年は去っていく。

その後を、「待ってください。」と言いながら、太った男と、坊主頭の男が追いかけていった。

辺りに再び静寂が訪れた。

勢地郎は香須実と日菜香の側に寄った。

「父上、…どうしたんですか？」

鬼の監視役の総監督と言っても、滅多にここにはやってこない。それなのに、この場に来た事に、日菜香が不思議そうに聞いた。

「いや、大変なことになってるという事がわかったからね。これを私に来たんだよ。」

勢地郎は布に巻かれた木箱を香須実へと渡した。

「以前、街にDISCAニマルや音撃鼓の予備をもらった時に渡された品でね…。きつと役に立つと思うし、持っていつてくれないか？」

それを受け取ると、香須実と日菜香姉妹は「ありがとうございます。」と頭を下げた。

勢地郎は「いいんだよ。」と笑った。

「本当は付いて行くべきだろうけど…。この老体じゃ、足手纏いになるだけだからね。皆の活躍…期待してるよ。」

明日夢達やジュニアライダー隊を見ながら、嬉しそうに、そうに言った。

それは、これから、山に登り、最悪、響鬼と戦うことになるかもし

れない。

そう考え、と緊張していた一同の胸をなでおろした。

皆、次こそ車に乗り込んだ。

人数が多いため、後部座席が狭いようで、雑踏の様な物が響き渡った。

その様子を、外で勢地郎は笑顔で見っていた。

「それじゃあ、行ってきます。」

「ああ、くれぐれも気を付けるんだよ。」

その会話を終わると同時に、2台の車は走り出し、一直線に山を登っていく。

窓からジュニアライダー達が、手を振っているのが見える。

勢地郎は笑顔で手を振り返した。

山を登り車が見えなくなった。

あの炎は山の最深部からだから、途中で車を降りなければいけないだろう…。

「皆、無事に帰って来るんだよ。」

勢地郎は、彼らだけではなく、あの山に居るかもしれないという、ヒビキの無事までも祈った。

祈る事。

それが自分に出来る、精一杯の事と、知っていたからだ。

誰も気付かなかったが、その様子を遠くから見ている人物がいた。彼は、車が移動したことに気付くと、その体系に似合わず、木々を渡り、後を着いていった。後には、鈴のような音が鳴り響いた。

C part (後書き)

両者、会話メインのC Partです。

さて、人間側についてる鬼ですが、トドロキ、ダンキ、エイキ、それに京介で全部です。

人間側、少なさ！！

後は全部、人間の反逆者側です。

メインの、もう1人の青色の鬼も…反逆者側です。

一番苦労したのは、ヒビキと沖の会話の場面です。

何の会話をさせようか、必死に悩んだ結果がこれですよ。

ヒビキは、デイケイドの仲間であって、仲間ではない、といった状況です。

沖の変身シーンは…わかりにくい方がいたら、本当にすみません。あの返信ポーズを書くのは、凄く難しいです。

勢地郎さんが、渡したあの箱や、最後に出た男は誰かわかりますかね？

ヒントは、特殊な刃と、関西弁の男です。

それでは次回も、更新が遅くなると思いますが、よろしくお願います。

エレメントブレイドでした。

D part (前書き)

1か月以上更新にかかってしまいました…。

しかし、それには理由があります、活動報告にも書きましたが、大学入試などがありました…。

大学に合格しましたが、セミナーや書類制作など忙しくて…。

そして一番びっくりしたのは、更新停止中にお気に入り登録が一気に上がった事です。

私の執筆した作品の中で、一番高いので本当に驚きを感じたと共に、皆さんに感謝を感じました。

皆さん、本当にありがとうございます。

今回から更新再開です。

手に汗握らないバトル中心です。

キン肉マン台詞コーナーは次回から始めます。

大学入試の際の応援してくださった皆様や、更新を心待ちにしていた皆様、こんなダメ作者の小説によるしく願います。

D part

足リ…ナ…イ…

マダ…マダ…ダ…

アイツ…ニヤ…ラレタ傷ガ…癒エナイ…

木々を破壊していき、ゆつくりと這いずるように動く巨大な生物。動物、昆虫さえ、全ての生物が、彼の放つ禍々しい気配を感じ逃げていく。

しかし、彼の体から幾つも生えた、蛇…と言つには生優しく、大蛇と呼ぶに相応しい頭が、逃げだす生物を追いかけて、巨大な口を開け、噛み砕いた。

幾つもの大蛇から生温かい鮮血が飛び散る。

彼 幾度も噛み砕き、手当たり次第の生物を栄養へと変えていく。それでも、彼はまだ餓えていた。

決して満たされることはない。

幾つもの大蛇が生物を捕食をしていく最中、中央の一本の大蛇が空を仰ぐ。

この蛇は他とは違う瞳をしていた。

キサマハ…殺ス…キサマダケハ…

全てを飲み込む、憎悪に満ちた、赤い瞳が光る。

そして、彼の体は徐々に成長していく。
否、再生していく。

ただ、元よりは、より凶悪に、より凶暴な姿へと再生していく

スウウウウウウパアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ン！！

時同じくして、森の最深部。

この場所からも、2人の激闘に巻き込まれまいと、鳥や小動物達は逃げてしまい、彼ら以外の生物は既になくなっていった。

聞こえてくるのは、風の音と…。
それに互いの体が傷つく音…。

「はあああああああ！！」

響鬼は、両腕で持つ音叉剣を振り翳した。

しかし、音叉剣は空気を切っただけで、辺りに乾いた音だけが響いた。

先程から斬激が彼の体を切り刻む事は1度たりともない。

それでも、響鬼は、まるでその結果が満足そうに「ほおう。」と笑い、対戦相手であるスーパー1へと眼を向けた。

迷う響鬼

鬼が正しいのか？

それとも人間が正しいのか？

それがわからなくなってしまった、響鬼。

別世界からやって来た、人間を守るために戦うライダー　スーパー

1　と戦いの中で、何かが見つかる筈…。

そう考えた響鬼は、スーパー1へと戦いを挑んだのだ。

深く息を吸い、呼吸を整える。

落ち着け…。

焦っていては駄目だ、落ち着け…。

先程から、音叉剣がスーパー1の体を切り刻む事はない。

だけれども、焦ってはいけない。

焦っては、当たる攻撃さえも当たらなくなってしまふ。

自分にそう言い聞かせると、音叉剣を握り直した。

傷一つないその刃に、ゆつくりと一定の型をとるスーパー1が映し出された。

それを確認すると、響鬼は走り出した。

「ふん！！　はあ！！　たあっ！！」

3度…。

3度スーパー1へと音叉剣を振り翳した。

しかし、一度たりともスーパー1へと直撃することはなかった。

力の限りに響鬼が振り翳した音叉剣を、全て受け流したのだ。

それは、強風に煽られる柳の木の様に、決して力に逆らわない華麗

な動き。

スーパー1は響鬼の攻撃を、全てを受け流すことだけに集中していた。

決して反撃には出ない。

反撃に出ることで、それから隙が生じ、相手の攻撃を受けてしまうことなんてよくある事…。

だからこそ、待つ。

響鬼の体に強烈な一撃を放てる、決定的な反撃の機会を…。

「はあっ!!」

横振りから、縦振りへと変え、スーパー1の頭から音叉剣を振り下ろした。

当然、これも受け流すのだろう…、と響鬼も考えていた。

「赤心少林拳、極意、真剣白刃取り!!」

だけど、違った。

スーパー1は振り下ろされた音叉剣を、平手にした両腕で受け止めた。

鬼の力で、力強く振り下ろされたのを受け止めたのだ。

あの威力は、岩石をも豆腐のように切り裂く程。

それを白羽取りで受け止めるなど信じられなかった。

その事に、思わず響鬼は普段なら見せない焦りを見せてしまい、力任せにスーパー1の両腕に挟まれた音叉剣を引き抜こうとしてしまった。

それが互いに決して見せまいと見せていた隙となる。

スーパー1は「はああああ……。」と、小さく声を上げながら、抑える腕に力を込める。

そして、腕を思いつきり曲げた。

パキン。

そんな音が響き渡った。

強靱な刃を持つ音叉剣が。

魔化魎さえも、豆腐の様に切り裂く事の出来る音叉剣が。

決して手入れを劣ることなく、欠かさず手入れをしていた音叉剣が。

折れた。

刃の中心から、真つ二つに折れてしまった。

響鬼は音叉剣が折れた衝撃、それに驚きとショックが手伝い、後ろへとよろめいた。

隙が出来た。

音叉剣の刃を地面へと投げ捨てる。

そして、スーパー1は呼吸を整え、ゆっくりと構えをとる。

それは、守るべき者を大切に包み込むように、何かを守るための構え 梅の花 の型。

「赤心少林拳諸手打!!」

両腕を水平に出し、響鬼の頭部を挟み込むかのように、手刀を浴びせた。

響鬼の頭に、鋭い衝撃が走り、立ってはいられなくなる。

そして、更に鋭い突きを浴びせる。

続けざまに技を喰らい、口から血を吐くと、響鬼は後ろへと倒れた。不様に尻もちを付いている間にも、スーパー1は追撃を狙ってくる。

響鬼は手で思いつきり地面を叩き、新体操の選手のように華麗に立ちあがると、一定の距離を取った。

面白い…。

鬼の面の下で、響鬼は笑みを浮かべる。

こんな、楽しい戦いは、何時ぶりだ…。

そう考えながら、スーパー1へと目を向ける。

更なる一撃を喰らわすために、大地を蹴って、拳を振り上げながら向かってくるスーパー1。

響鬼は、鬼の面の口元が裂けるかのように、大きく口を開いた。

そして大きく息を吸い…吐き出した。

「はあああああああ！！」

口から、紫色の炎が放出される。

これは、目を纏う鬼が持つ能力の1つ。

鬼幻術・鬼火。

鬼火がスーパー1の体を焼け焦がそうとした瞬間、スーパー1は慌てずに右腕を前に出し大きく回転させる。

「チェーンジ、冷熱バンド！！」

回転させた右腕に左腕を添え、サイクロードの左端に装着されている小さな5色の箱に当てる。

するとフリジンの付いた銀色の両腕から、手の甲に発射口が緑色の

拳へと変わった。

これは惑星開発用に作られたスーパー1が、宇宙の様々な障害に対抗するために与えられた特殊装備、そして、ドグマ、ジンドグマと2代組織との戦いで必要不可欠であった腕。
5つの能力を持つ、スーパー1の愛の腕。ファイブハンド

格闘に優れた銀のスーパーハンドから、緑の冷熱ハンドへと交換する。

そして、その右腕を前に突き出す。

「超高温火炎!!!」

冷熱バンドの噴出口から、赤い火炎放射が発射される。

鬼火と火炎放射が、文字通り火花を散らしぶつかり合う。

炎同士がぶつかり合い、黒い煙が巻きあがり、2人の視界が遮られる。

鬼火を拭きだすのを止めると同時に、スーパー1も火炎放射を止める。

そして、いつまでも空中に留まること出来ないスーパー1は、そのまま黒煙の中を突き進み、響鬼へと向かって行く。

黒煙の中では、赤色の鉢 音撃棒・烈火 を構え、向かってくるスーパー1を待ち構える響鬼がいた。

「はぁあ!!!」

力任せに、向かってくるスーパー1へと烈火を振り下ろした。

咄嗟に、左腕を盾にし体への直撃を防いだが、その衝撃は凄まじく、響鬼は地面へと叩きつけられ、倒れこんだ。

左腕から、体全体へと激しい痛みを感じ、もう片方の手で抑える。
…左腕は、激しい痙攣をおこしている。

迂闊だった。

火炎放射を発射する際に片腕を使うスーパー1とは違い、響鬼の鬼火は口から吐く。

その為に、その間、響鬼は両腕を一切使わない。

鬼火を吐きながら、音叉剣に変わる新たな武器を構える事くらい雑作ない事…。

それを見落としてしまった。

スーパー1は倒れながら、響鬼を見る。

響鬼は、倒れるスーパー1を、右腕に持つ烈火をクルクルと回しながら、気楽に構えながら見下ろしていた。

「どうした青年？ 今の一撃がそんなに痛かったか？」

「まあ、さっきの諸手打も中々だったけどな…。」と、軽く頭に手を当てながら、響鬼は言う。

それを聞き、スーパー1は左腕を抑えながら、「大丈夫だ…。」と言いながら、ゆっくりと立ち上がる

左上の痛みは、まだ消えていないが…、動けない程ではない、骨も折れたわけでもない、機械が故障したわけでもない。

まだ、十二分に戦える。

後ろへとステップを踏み、響鬼から数歩下がると、構えを取る。

それは、赤心少林拳の型。

そうこなくちゃ…、それを見た響鬼は笑みを浮かべると、烈火を構える。

そして、その場でスーパー1に向けて、烈火を振り下ろした。

その瞬間、烈火から火炎弾が放たれた。

鬼棒術・烈火弾。

瞬時に、スーパー1は横へと転がり、烈火弾を回避した。

「烈火^{これ}には、こんな使い方もあるんでね。」

そして、「ほおら、どんどん行くぞお！！」と、続けて烈火を振り、烈火弾を放った。

最初は避け続けていたが、一向に止まない攻撃に、避けていては、きりが無いという事に気付く。

スーパー1は、それを回避するのではなく、その場で一回、深呼吸をすると、手の甲で烈火弾を弾いた。

弾いた烈火弾は、辺りの大木や、植物に直撃し、灼熱に燃え盛った。

まさか、弾くとは…。

その行動に驚いていた響鬼。

しかし、そんな事関係ないように、烈火弾を放つ続けた。

スーパー1は次々に放たれる烈火弾を弾きながら、響鬼へと駆け寄っていく。

だが、響鬼は特に慌ててはいない。

慌てるどころか、不敵に笑っていた。

その行動を待っていた…、そう言わんばかりであった。

響鬼は、次なる烈火弾を、スーパー1へと放つ。

…のではなく、地面へと叩きつけるかのように放った。

辺り一面に泥や、砂埃が舞い上がる。

常人ならば、この砂埃の所為で、暫くの間は、視界が遮られ、辺りが確認出来なくなる。

しかし、惑星開発用に開発されたスーパー1の瞳は、暗闇の中でも真昼同然に見る事が出来る。

こんな砂埃では、スーパー1の眼を誤魔化せるのは一瞬。その、一瞬で十分。

砂埃の中からも2発の烈火弾が飛んでくるが、それを慌てず、先程の様に弾いた。

その直後、スーパー1は体に違和感を感じる。

まるで、吸盤の様な何かが、胸部に張り付かれた感触。

思わず、下を向いてみると、そこでは、腰を落とし、スーパー1の体に、先程まで自分の腰に着いていた、小型の太鼓 音撃鼓・かえんつ火炎鼓^{づみ}を貼り付ける響鬼の姿。

先程の一瞬の間で、2発の火炎弾を飛ばし、スーパー1の意識を一点に集中させ、文字通り人間とは桁違いの馬力を駆使し、一気にスーパー1へと接近し、火炎鼓を張り付けたのだ。

火炎鼓が、体を束縛し、スーパー1は動けなくなる。

「爆裂強打の型!!!」

響鬼が叫ぶと同時に、張り付けられた火炎鼓が巨大化する。

「はあああああ…たあっ！！」と、掛け声を上げ、火炎鼓を、烈火で何度も叩き始めた。

鉢である烈火の使用法は、人を叩く事や、火炎弾を飛ばすことではない。

本来の使用法は、鉢の正しい使い方の通り、太鼓をリズムよく叩く事。

それが、鬼だけが持つ、魔化魍を倒すために生み出された、音撃。

太鼓の力強い音が響く。

火炎鼓が烈火で叩かれると同時に、スーパー1の体全体に、耐えがたい痛みが広がっていく。

太鼓の衝撃が、体内で爆発していくかのような苦痛。

まるで、人工心臓や様々な精密機械が、体内で飛び落ちるかのような感覚。

耐えられない苦しさに、体が勝手にもがき苦しみ出す。

この太鼓が叩き終える前に何とかしなければ…。

消えてしまいそうな意識の中、スーパー1は動かない体を必死に動かし、横から左腕を響鬼へと向けた。

一か八かの、賭け…。

「れ、冷凍ガス…。」

現在スーパー1の腕は、緑の冷熱バンド。

左腕の噴出口からは、白い超低温ガスが発射される。

その煙に驚き、響鬼の火炎鼓を叩く腕が止まる。

今だ!!

「えええい!!」

足に力を込め、自力で火炎鼓の束縛を解き放ち、その足で、響鬼を蹴った。

更に次は、腕に力を込め、体に装着されている、火炎鼓を掴む。

力任せに剥がすと「バリ、バリ」と、何かを引き裂く音が聞こえて来るとともに、痛みも襲ってくる。

だが…それでも、構わない。

激しい痛みを感じながら火炎鼓を体から外すと、束縛からも解放される。

掴んでいる火炎鼓を投げ捨てると、スーパー1は大地を力強く蹴り、飛び上がる。

空中で、赤心少林拳から伝授された4つの型を取る。

「スーパーライダアアア…。」

更に空中で3回前方回転をする。

その回転はある花を空中に咲かした。

花は梅。

梅花の型。

何かをしようとしている事に気づき、慌てて烈火弾を飛ばす響鬼だが、スーパー1はそれらを弾きながら、右足を突き出す。

「梅花：2段キイイイイック！」

猛スピードで響鬼へと向かっていく。

厳しい精神修行の末に身に付けた、優しく包み込み、弱き者を守るための技。

咄嗟に烈火を十字にし、スーパーライダー梅花2段キックを受け止め、直撃を防ぐ。

が、余りの衝撃に烈火が吹き飛び、鋭い一撃が体に直撃した。

烈火で受け止め、衝撃を抑えた筈だが、響鬼は痛みを感じるとともに、激しく回転し、地面に何度も叩きつけられながら飛ばされていた。

それは、技の威力を物語っていた。

響鬼を吹き飛ばしたスーパー1は、その反動を利用し、宙返りをし、地面へと着した。

そして、既に回転も止まり、地面へと倒れる響鬼へと目を向ける。

響鬼は右手で頭を押さえながら、ノロノロと立ち上がった。

「火炎鼓を強制的に解除するとは…、やるなあ、青年。」

言いながら、泥で汚れた体を「パン、パン。」と手で叩く。それを聞いたスーパー1は「貴方こそ…。」と、返した。

両者、口元は吐血痕が残っている。

変身を解いたならば、口元が真赤に染まっている事は確かであった。

「だけど、その力は…お前が人間を守るための誓いでもあるんだよ

な…。」

人間を守るための拳だと、戦う前にスーパー1は語っていた。その決意こそが、力であり、技なのだ。その問いに、スーパー1は黙って頷いた。

そうか…。

そう答えると、響鬼は落ちていた烈火を拾い上げる。スーパー1は近くに落ちていたもう1本の烈火を拾い上げ、響鬼へと投げ渡した。

響鬼は「ありがと。」と、烈火を受け止める。

「じゃあ、俺も見せるとしますか。青年とは違って、人間の味方にも、ライダーの味方にもなれない、中途半端な男の力を…。」

刹那。

空気が張り詰め、先程の烈火弾で燃え盛っていた炎が、急に激しさを増し激しく燃え上がる。

そして、響鬼の体を、変身の時とは違う、灼熱の炎が包み込む。

スーパー1が感じるのは、辺りの異様な熱さ。

本来、宇宙での太陽に対応するために、スーパー1の体は熱に強く出来ており、このぐらいの炎なら、何ともない筈である。

しかし、爆裂強打の型を喰らい、体の熱管理システムが破壊れてしまっている。

その為、この異常な温度の変化を体全体に感じる。

「はああああああ…。」

響鬼を纏っていた炎が、勢いを増す中で、着実に響鬼の体は変化し

ていく。
体に纏わり付いていた装飾物は炎で消滅し、鋼の様な筋肉が晒し出される。

「…てりやあつー！」

変身の時と同じように、手で炎を拭い去った。
それと同時に、激しい爆発音が鳴り響き、響鬼の後ろの炎が爆発するかの勢いで燃え上がった。

それは、今までの紫色の鬼ではない。
燃え盛る炎のように、体を紅染め、赤い熱気が渦を巻いている。
これが、激しい修行の末に到達した、響鬼強化形態。

響鬼・紅。

その響鬼の姿を見たスーパー1は、明らかに先程までとは違い、全ての身体能力が格段に跳ね上がったことを感じる。

「チエーンジ…パワーバンド!!」

その紅に対抗するため。
冷熱バンドから、響鬼・紅と同じ赤い腕、力に特化したパワーバンドへと交換する。

激しく燃え盛る炎に取り囲まれたその場所に、静寂が訪れる。
互いの呼吸音だけが、不気味に聞こえてくる。

「それじゃ、第2回戦…開始としますか。」

始まりの時と同じように、同時に互いへと向かって駆け出す。

だが、最初と違うのは、今回はどちらも小細工は使わない。相手のミスを待ってはいない。

ギリギリまで接近し、響鬼は烈火で、スーパー1はその力強い拳で、火花を散らしぶつかり合っていた。

もし、この戦いを普通の人が見ていたならば、どちらの太刀筋も見るとは出来ない。

互いに、残像が残る程の素早さであり、恐らくわかるのは、鈍い音と、何かが軋む音だけが聞こえてくるだけであろう。

互いに、相手の体へと強烈な一撃を決めるべく、繰り出す、それはギリギリで防がれ、直撃することはない。

烈火が一撃当たれば、響鬼の勝利は目の前に見えてくるが、先程の事もあり、スーパー1烈火を弾いていく。

そして、パワーバンドで強化された拳で、水平チョップを繰り出す、響鬼は烈火でそれを受け止める。

だが、響鬼が持っていた烈火が1本、弾き飛ばされた。

取りに行けない距離ではない…が、今の状況で行ける筈がない。

こちらも拳で戦わなければならない…か。

修行を積み続けた事だけあり、響鬼はたった1本の烈火でありながら、形勢を変えることはない。

スーパー1も、それを感じ、決して手を緩めることなくぶつかり合う。

「なあ…青年。」

その最中、響鬼が急に口を開いた。
勿論、その時も手を緩めてはいない。
スーパーは「何だ？」と聞き返した。

「青年には夢ってあるか？」

「夢…。」

急に何を言っているんだ？

自分の気を緩める為の誘導作戦であろうか…。

それとも、ただ単純に、その内容について急に気になったのだろうか？

どちらだとしても、答えて損になるわけではない。

スーパーは「ある。」と答えた。

「やっぱりあるよな。さつき、夢のために造られたって言ってたしな。なら…その夢は叶ったのか？」

夢…。

幼き頃、両親を失い、いつしか両親の夢であった宇宙開発が自分の夢になっていた。

夢を叶えるために育ての親であるヘンリー博士が進めていた、改造人間開発の実験に志願した。

実験は見事成功し、改造人間・スーパーとなった。
これで、夢が叶う…。

あの時は、ただ単純にそう思っていた…。

「…叶ってはいない。」

冷静にそう返した。

改造が成功した後、ドグマ帝国が改造人であるスーパー1を差し出すことをヘンリー博士に命じた。

それを断った為に、ドグマ帝国の怪人ファイヤーコングの襲撃に遭い、国際宇宙開発研究所は、研究員は全員殺され、壊滅。

変身装置も壊され、変身さえ出来なくなった自分の無力さを、あの時ほど呪った事はない…。

その後、赤心少林拳の呼吸を習得し、変身が可能となったが、その時には自分の夢は変わっていた。

宇宙開発のために造られたこの体が、一度も宇宙に飛ぶことはなく、その夢が、ドグマ帝国、及びジンドグマから人類を守る事になっ
ていた。

それでも、その夢は、もう叶うところまで届いていた。

「そうか…。叶ってないのか…。」

小さく呟いた。

何がしたいのか、さっぱりわからない。

すると、響鬼は「俺にも夢があったんだ。」と答えた。

あった…。

過去形…、つまり今は無いということだ。

「俺の夢はな…、鬼になって人間を守ることだったんだ。」

そこから、響鬼は懐かしそうに語り始める。

昔、1人の鬼に助けられ、そこから鬼を目指すようになった事。家族に猛反対されたが、自分の夢を貫くために、家族と縁を切つてまで、鬼に弟子入りした事。

その後、家族は村人から避けられるようになり、耐えられなくなり、山を下りていき、今は行方いがわからない事。

「青年はさ、人間を救うつて言った時、迷いが無かつただらう？俺にも、そんな時期があつたからさ…。だから、戦えばその時の気持ちを出せるかなつて…。」

歌舞鬼の死後、その時の人間を守りたいと思つていた気持ちは無くなつていた。

人間を守ることに意味があるのか迷う。

スーパー1なら、それを教えてくれると思つていた。

「でもさ、それはもう無理かもな…。少なくとも、この戦いは青年の負けだからさ…。」

2人の拳が、同時に繰り出されていた。

スーパー1の拳は、響鬼の顔面に直撃。

…していなかった。

「あ…ぐう…う…。」

スーパー1の喘ぎ声が聞こえてくる。

彼の腹部には、響鬼の鋭い爪が生えた右腕が直撃していた。

鬼闘術・鬼爪。

鬼爪がスーパー1の腹部へと深々と刺さり、スーパー1の拳を寸での所で止めたのだ。

特殊スーツを切り裂き、腹部から血液が滴る。

響鬼は鬼爪を引き抜く。

その瞬間、滝の様に鮮血が飛び散る。

どん。

太鼓を叩く音が聞こえてくる。

烈火がスーパー1の胸部を叩いた音だ。

音が広がると同時に、胸部に炎の太鼓が現れる。

響鬼・紅は、通常地の姿と異なり火炎鼓を用いない。

一度、音撃を叩きこめば、炎が音撃鼓を生み出す。

しまっ…。

身の危険を感じるが、先程の様に脱出するすべはない。

…そもそも、そんな力はもう残ってはいない。

響鬼は、静かに放った。

「音撃打…灼熱真紅の型!!」

蠢く巨大な黒い影…。

彼はその巨体を動かしながら笑っていた。

遂に、見つけた。

目標である男をついに見つけたのだ。

嬉しくて笑いが止まらなかった。

見…ツ…ケ…タ…ゾ…

遂二見ツケタゾ…

殺ス…キサマハ…魂スラ残サン…

幾つもの、薄気味悪く輝く赤い瞳が、全て目標を捉えていた。

彼は、その巨体を大きく動かし、目標へと向かって行った。

第5地区のまた別の場所で、半分の色を持つライダーが、その巨体を見ていた。

彼には全てを感じる事が出来る。

今、あの生物が何を思っているのか。

どんなことを目標とし、何を言動として動いているのか、手に取るかの様にわかる。

新型のメモリだが…上手く適合したようだ。

思えば、自分がこの場所に来た時、このメモリが 彼の場所へと導いた。

もしかしたら、メモリには所有者を選ぶ能力があるのかもしれない

…。

まあ、そんな事はどうでもいい。

あのメモリは、所有者の恨み、嫉妬、妬み…それに復讐心が大きければ大きい程、効力が働く…。
今、彼の、その気持ちは最高潮にある。

メモリと、感情のシンクロの実験には最適すぎる。
このライダーは不気味に笑った。

「^{リベンジ}復讐メモリ…その効力を、^{ちから}もっと見せてくれよ…。」

D part (後書き)

今回は最初に描いた通り、バトル中心です。

響鬼の戦い方もですが、スーパー1も難しかったです。

スーパー1を10話以上見返した結果がこれです。

スーパー1の技は、どれもこれも、一度しか使っていないマイナー技ばかり…。

でも好きなんですよね、ロンリーウルフとの対決の際に編み出した白刃取りや、劇場版の諸手打も…。

ただ、諸手打はSpiritsでマジヨリングを倒したのでは、今はもう有名かもしれませんね。

音撃を普通のライダーが喰らったらどうなるのかは、想像で書きました。

多分、体で音が爆発するかのような衝撃だろうな〜と考えています。

ヒビキの過去はアギト同様に原作とは違います。

この語、原作同様に歩んでいき、今の様になった設定です。

戦いの結果は…響鬼に…。

さて、次回どうなるでしょうか？

皆さん想像してください。

さて、ここまでで響鬼編、前半部分終了です。

まだ、前半！！とか、突っ込みは無しで…お願いします。

最初と最後に登場した - 彼ーや、ライダーについてはあえて何も語

りません。
それではみなさん、次回もよろしくお願いします。

E part (前書き)

最後の更新から1カ月と1日…。
本当にすみませんでした！！

毎回、この前書きで謝ってばかりの様な気がしますが…。
赤点無くテストが終わりいざ書き始めようとした後、色々あったんです。

理由は…、聞かないください。

これから不定期になる事が多いと思いますが、どうにか完結させるので、どうかよろしく願います。

今回は、スーパー1に登場したあの悪魔の蛇が大暴れします。
そして、半分こライダーも登場します。

乱雑さが目立つ文章ですが、よろしく願います。

「音撃打：灼熱深紅の型！！」

スーパー1の体に現れた、炎の音撃鼓を力強く叩きだす。戦いの中で、烈火を片方飛ばされてしまい、残った一本で叩いているが、それでも威力は変わらず發揮される。

「はあ…たあっ！！」

何度も、何度も、何度も…。烈火を振り下ろし、音撃鼓を叩く。

それは、リズムこそ悪いものの、確実にスーパー1の体を破壊していく。

爆裂強打の型よりも、鈍く、激しい痛みが全身に広がっていく。それにも増して、今回は体の内から火を付けられ、体内から燃やされる様な感覚にも襲われる。

「ふん…はあ…。」

先程よりもリズムが速くなっていく。

その一撃、一撃に耐えきれずスーパー1の仮面や、特殊装甲は「バチバチ」と音を起てながら、亀裂が走る。口元から大量の血が吐き出される。

全身の力が抜ける…。

もう、抗う事も出来ない。

このまま、されるがままにやられるしかない。

次の一撃…。

それで、全てが決まるだろう…。

響鬼は、この戦いを思い返す。

短い戦いであったが、それは久々に味わった感覚だった。

出来れば、違う場所で、違う出会い方をしたかったものだ。
いや、そんな願望は叶う筈はない…か。

烈火に力強く握り直す。

「はあああああ…。」

大きく烈火を振り上げる。

戦いを終わらす、最後の一撃。

どしん、どしん…。

すると、何か巨大な生物が近づいてくる、大きな音が聞こえてきた。
しかも、音は自分たちのすぐ近くまで迫っている。

普段なら、気付く位大きな音だった。

互いに戦いに夢中になりすぎて、気付かなかった。

来る…。

刹那、何かが響鬼へと直撃した。
その素早い動きに、防御を取る事も出来ずに、響鬼は吹き飛ばされた。

響鬼が、吹き飛ばされたことにより、灼熱深紅の型が強制的に解除され、スーパー1の体に纏わり付いていた炎の音撃鼓が消滅する。束縛が解除され、地面に倒れていくその体を、彼が捕えた。

彼は、体に生える無数の大蛇の1つで、スーパー1の体を締め付けた。

力強く締められ、「あ…あ…。」とスーパー1の喘ぎ声が漏れる。

「苦シイカ？ スーパー1…。」

大蛇はスーパー1を睨みつける。
その漆黒の瞳には見覚えがあった。
否、忘れる筈がない。

「ま…さか…。そんな筈…が。」

ゆっくりと、首だけではなく彼の全身が、この場へと到着する。その姿を目撃した響鬼は、「何だよ…こいつ…？」と呟いた。

胴体は人間と同じ大きさだが、胴体から生える無数の大蛇を支える事が出来ず、大蛇に引きずられている。

問題なのは、無数の大蛇だ。

付け根の部分で何重にも絡まり、そこで1つの巨大な塊が出来ており、5メートルを超す大蛇がそれぞれ別々に暴れている。

胴体と不釣り合いの大きさだが、それが不気味さを醸し出している。全体の大きさで言えば、バケガ二を軽々超えていた。

大蛇^{オロチ}…。

響鬼の頭に伝説の魔化魍の名が過る。

ただ、大蛇^{オロチ}は唯の伝説の筈…。

ならば、この化物は何だというのだ？

魔化魍とは、とてもじゃないが思えない。

言葉が出ない…。

「ぐあああ…あああ…」

「バキバキ」と、音と共に叫び声が聞こえてきた。

視線を移せば、大蛇が力を込めスーパー1を締め付け、粉々に潰そうとしていた。

体が勝手に動いた。

響鬼は、転がっていた烈火を拾い、両手にそれぞれ握ると、力強く地面を蹴り上げた。

「はあああ！！」

スーパー1を締め付ける大蛇の頭に烈火を振り下ろす。

大蛇は声にならない叫びを上げ、絞め上げていたスーパー1を解放した。

力無く地面へと落ちていくスーパー1を、地面に叩きつけられる前に、響鬼が受け止めた。

「すまない…。」と謝るスーパー1に、響鬼は「気にしなくていいよ。」といったもの調子で答えた。

で…。

「何なんだよ、あの化物は？ 青年に因縁があるようだけど。」

響鬼は大蛇の怪物に眼を向けた。

苦しそうに蠢く大蛇を除けば、全ての大蛇が2人を…、厳密に言えばスーパー1を睨みつけている。

スーパー1は傷ついた体を動かし、ゆっくりと立ち上がりながら「あいつは…。」と呟き始めた。

「俺の世界で、地球征服を目論んでいた人類の敵…悪魔元帥だ。」

人類を恐怖で支配しようと目論んでいた、11番目の悪の組織「ジンドグマ」。

その首領の名を悪魔元帥^{あくまげんすい}。

その正体は、B26暗黒星雲より送り込まれた宇宙生命体、幾つもの蛇が体に巻きついたような姿が特徴の怪人「サタンスネーク」。

あの暗闇のように真黒な瞳や、地獄から吐き出されたかのような邪悪な雰囲気忘れられない。

目の前の怪物は、大きさや、より凶暴に変化した体など、違いはあるが、悪魔元帥^{サタンスネーク}で間違い無い。

何故奴がこの世界に…？

そもそもあいつは…。

「地球征服ねえ…。今さら、そんな野望を見ている奴もいるんだな…。」

「まあ、俺達がしている事は似たようなものか…。」そう続けた後、

響鬼は隣のスーパー1に「つまり…。」と問いかけた。

「あいつも青年と同じで、別の世界ってやつから追ってきた…ってことだろう。青年を追って？」

スーパー1を含む、別世界の仮面ライダーがこの世界に来るといってあり得ない事が起こったのだ。

その世界から、仮面ライダー以外の人物が来ることも可能性としては十二分にあり得る。

実際に2人は知らないが、仮面ライダーではない、ジュニアライダー隊もこの世界に来ている。

つまり、仮面ライダーではない、スーパー1の宿敵である悪魔元帥サタンズネークがこの場所にいたとしても不思議ではない。

だが、それはあり得ない事。

その事でスーパー1は驚いたわけではない。もっと、根本的な事で衝撃を受けたのだ。

「何故、お前が生きて…いるんだ！！ お前は、あの時、確かにこの腕で倒した筈だ！！」

悪魔元帥サタンズネークに向かって、力強く叫んだ。

あの時、それは富士の樹海での最後の戦い。

スーパー1は魔女参謀から奪った稲妻電光剣マシヨリンガで、悪魔元帥サタンズネークの首を切

り刻み、確かに倒した。

その感触は、まだこの腕に残っている。
なのに、どうして生きている…。

それを聞いた、サタンズネーク悪魔元帥の全ての大蛇が、一斉に笑いだした。
その声は、とても不気味で、聞く者全てに恐怖を感じさせるような
笑だった。

「確…カニ、私ハキサマニ殺サレタ。ダガ、蛇ノ命ハシブトイ…。
キサマニ切り落トサレタ頭ノ一部ハ…マダ生キテイタ…モットモ、
虫ノ息デアッタ…ガナ。」

蛇の化身である、サタンズネーク悪魔元帥の生命力は強く、瀕死の状態であったが、
首一本で生きていた。

スーパー沖一也への恨み。

スーパー沖一也への憎しみ。

何よりも、スーパー沖一也への復讐心。

その憎悪を原動力とし、体を動かし、スーパー1へと復讐を試みよ
うとしたが、この状態のサタンズネーク悪魔元帥には戦う力は無かった。

途中で力尽き、その命をゆっくりと終わらせる筈であった。

あのオーロラが現れなければ…。

沖やジュニアライダー隊が呑み込まれたオーロラ。

それに、サタンズネーク悪魔元帥もスーパー1を追い、藁を掴む思いで、オーロラ
へと飛び込んだ。

オーロラを潜り、この第5地区へとやって来たが、もう動く力すら
残っておらず、今度こそ、その命は終わりへと向かっていた。

激しい憎悪を抱き続け、混濁としていく意識の中で、彼等に出会った。

既に視力を殆ど失っているため、彼等の事はボヤケテ見えており、瞳一杯に赤と緑の色が映っていた。

彼等は、何かを呟いていたが、悪魔元帥には、何を言っているか理解できなかった。

既に、脳は死んでおり、単語1つ1つの意味はわかっても、その繋がりが全く把握出来なくなっていたのだ。

彼らは悪魔元帥へと、禍々しいネイルが施された細い筒を挿入した途端、死んでいた脳が急速に再生し始めた。

体の内から、力が漲って来る。

五官が徐々に蘇り始め、動けなかった体が動けるようになる。

その直後に、感じたのは抑え切れない空腹。

それに耐えきれず、手当たり次第に、近くにいた野兔を噛み砕き、呑み込んだ。

だが、足りない。

更に、素早い動きで接近し、手当たり次第に近くにいた生物を、動物、昆虫問わず噛み砕き、呑み込んだ。

それだけでは無く、辺りに生えていた雑草も、植物さえも食したが、全然足りない。

体全体が栄養を欲しているのだ。

血を、骨を、肉を、皮膚を、失った全ての体を造るための栄養を。

栄養を求める悪魔元帥は目の前に立つ、彼等に気付く。

今度は、はつきりと 彼等 の姿を確認出来た。

驚きを受け、その姿を見た瞬間、飛び掛かった。

彼等の姿が、殺しても、殺したりない宿敵スーパーの姿にそっくりだったからだ。

それから何かが起きたかは、覚えていない。

気付いたら、地面に伏していた。

上を見ると、彼等は興味深そうに顎に手を当て、悪魔元帥サタンズネークを見下ろしていた。

『いいかい、僕達が欲しいのは君に使用したメモリの情報だ。まだ、試作段階の代物だから、僕等もその効力は良く分かってはいない。本来なら、拒絶反応の心配もあるけど…。どうやら、その心配はなさそう。』

先程までは頭しかなかった、悪魔元帥サタンズネークに徐々に新しい体が生えてくる。

その光景に満足したように、「このメモリは上手く君に適合したようだね。」と笑みを浮かべた。

『これからは、君の好きにするといい。何をしても文句は言わない。ただ、暫くは体の再生に時間を使うだろうが…。まあ、それも君なら短時間で行えるだろう。』

そう言うと、彼等は背を向け歩きだす。

その途中で、何かを思い出したように「そうだ…。」と振り返る。

『君が僕達に襲いかかった理由は、この仮面フェイスライダーの姿に強い恨みでも抱いているんだろう。僕の推測だけど、もし、君とそのライ

ダーが同じ次元の壁を越えてきたのなら、この山の何処かに君が追ってきたライダーはいるだろう。』

『後は君次第さ……。』と、最後に言い残すと、 彼等 は今度こそ姿を消した。

今の言葉は本当だろうか……。
ならば…一刻も早く、体の再生をしなければ…。

そして、奴に復讐する。

ただ殺すだけでは生温い。

生まれた事を後悔させ、地獄よりも恐ろしい恐怖を楽しませてやる。
待っている…。

スーパー1…。

「今…覚エバ、全テ八夢ダツタノカモシレナイ…。ダガ、ソナ事ハドウデモイイ、キサマニコウシテ復讐出来ルノナラバナ！」

言い終わると同時に、サタンズネーク悪魔元帥の2匹の大蛇が突っ込んでくる。
避けようと体を動かそうとするスーパー1だが、体を激痛が襲う。
先程、響鬼から受けた傷が後を引き動けない。

直撃するのを免れないと感じていると、響鬼がスーパー1の手を引いた。

大蛇は地面へと直撃し、辺り爆発したような衝撃と共に、地面を大

きく揺らした。

スーパー1と響鬼は、その衝撃で地面を転がった。

先程の場所を見てみると、ミサイルが落ちたかのような大きな穴があいていた。

もし、避けなかったら、木端微塵になっていただろう…。

仮面の下で、冷や汗が流れた。

眼の前の怪物に恐怖を感じながらも、響鬼は起き上がり、立て膝の体勢を取る。

隣を見てみると、スーパー1も立ち上がるうとしていたが、体を起こそうとする腕が痙攣しており、重みに耐えられずに、再び地面へと崩れた。

響鬼は「大丈夫か。」と、スーパー1へと手を差ししたが、「大丈夫です…。」と断り、自力で立ち上がった。

だが、今のスーパー1は強化服の至る所に、傷が入り、仮面やベルトには無数の亀裂が走っている。

お世辞にも、まだまだ大丈夫とは言えず、誰がどう見ても立っているだけでやっとの状況であった。

それも、まだ戦おうとしている。

響鬼は足を「パン」と手で叩き、足に力を込め、立て膝の状態から立ち上がると、スーパーの隣に立った。

スーパー1は隣に来た響鬼へと目を向け、「すみません…。」と声を掛けた。

突如、謝られたことに、響鬼は「どうしたんだ、急に？」と聞き返した。

「2度…貴方に助けられました。敵である筈の俺を…。やはりあなたは、悪い人じゃ…。」
「おっと、それは違うな。」

そこまで言うと、響鬼が言葉を途中で遮った。

「俺にとって青年が敵であることには変わりない。その逆も同じだ。それに、やっぱり俺は悪い人なんだろうからな。」

はっきりとそう言い切った。

スーパー1は「しかし。」と言いつ返そうとしたが、その前に「ただ…。」と言葉を続けた。

「目の前で傷ついて、殺されそうになってる奴は見捨てられない性分だね…。だから、助けたんだ。」

歌舞鬼を殺された悪夢は未だに消えていない。

思い返すのは後悔ばかり。

あの時、歌舞鬼を置いて行かなければ…。
もう少し周りに気を配っていれば…。

未来は少しでも変わったかもしれない。
見殺しにするような真似はしなかった。

だから、スーパー1を助けた。

もう2度と、歌舞鬼のように、傷つき、
なぶ 蹴り殺される奴を自分の前で起こさない為に…。

それが響鬼の考えだ。

先程のスーパー1との戦いでも、その命までとる気はなかった。

だから1度、人間を制圧する際にデイケイドが着いてきたんだ。

誰も殺しはしないという考えを話した時に、「甘い考えだな。」と一蹴された時があつたが…。

ならば、それでいい。

「それにさ、悪魔元帥あいつを倒さないと、俺達の戦いに決着は付けられないだろう？ 悪魔元帥あいつを倒すまでは一時休戦で、共同戦線というか？ 勿論、青年次第だけどな。」

拳を出し、賛同をスーパー1に求めた。

スーパー1はその拳に、自身の拳を当てた。

「わかりました。お願いします。」

互いに仮面の下で笑みを見せた。

そして、目の前の悪魔元帥巨大な化物へと目を映した。

悪魔元帥サタンズネークの大蛇が天に向かって一斉に吠えた。

鼓膜を破るかのように叫びや、振動が体に押し掛かる。

「スウウウウパアアアアア1…スウウウウウウパアアアアアアア
ワアアアアアアアン…殺ス、キサマダケハ絶対二殺スウウウ
！！」

大蛇が一斉に暴れ出し、スーパー1へと迫つて来た。

2人は大地を蹴つて、横へ跳び、それを避けた。

「逃ガサン…決シテ逃ガサンゾオオオオ!!!」

方向を転換し、全て大蛇がスーパー1の後を追う。再び大地を蹴って空へと逃げるが、大蛇は一向に追い掛けるを止めない。

逃げているも限きりがないと感じ、右腕を大きく旋回させ、ファイブハンドをパワーハンドから交換チェンジする。

「チェンジンジ…冷熱バンド!!!」

交換チェンジしたのは、冷気冷と炎熱を操る緑色の腕。動きを止めず、後ろを振り向き、両腕を大蛇へと向けた。

「高温火炎、冷凍ガス、同時発射!!!」

右腕の噴出口からは火炎放射が、左腕の噴出口からは冷凍ガスが、それぞれ同時に発射された。

火炎放射を浴びた大蛇は体が燃え始め、冷凍ガスを浴びた大蛇は体が凍り始め、動かなくなっていく。更なる、追い討ちを掛けるべく、スーパー1は空へと跳んだ。

「スーパーライダアアアア…。」

空中で4つの型を順に決めていく。

狙うは、唯一スーパー1へと語りかけてくる、悪魔元帥サタンズネークの司令塔となっサタンズネークているであろう大蛇。

急サタンズネークにの行動に対処しきれず、悪魔元帥にはそれを避ける事が出来ない。

無数の大蛇を盾にする手もあるが…、スーパー1の体が2重にも3

重にも見え、対処できない。

「…旋風キイイクー!!」

見事、サタンズネーク悪魔元帥の中枢であろう、大蛇の脳天に炸裂した。

辺りには爆風が起こり、悪魔元帥は雄叫びに近い悲痛の叫びを上げた。

…筈だった。

「今…何カシタカ?」

現実には、何も起こってはいなかった。

スーパーライダー旋風キツクが、悪魔元帥の大蛇に直撃したのは現実だが、ただ直撃しただけだ。

爆風は起きておらず、サタンズネーク悪魔元帥は痛みに苦しむ声さえも上げていない。

辺りには、力強いキツクを喰わせた音すら響いていなかった。

驚くスーパー1を、サタンズネーク悪魔元帥は頭を大きく揺らし地面へと叩き落としました。

受け身を取る事が出来ず、スーパー1は情けなく大の字で倒れた。

サタンズネーク悪魔元帥は、スーパー1を見て嘲笑った。

「不様ダナ…キサマハ、カラダ機械ノ肉体ノ機能ヲ極限マデ落トシテイルノダロウ? 動ケナイ機械カラダの肉体ヲ無理ヤリ動カス為ニナ。」

改造人間であるスーパー1は、防御、倍力、視覚を極限まで高める事が出来る。

それらを極限まで高めることで、体の動きは、数倍も良くなり、その五官も高まり、闘いを優勢に進める事が出来る。

無論その逆も可能。

それが、今のスーパー1の状態だった。

全ての感覚神経を極限まで落とした状態になる事で、体の痛みは誤魔化せ、傷ついた状態でも十分に動き回る事が出来る。

しかし、その代償に、体から様々な反応が失われる。

痛みは感じ難くなったが、大地を蹴る感覚や、技を出す時の感覚も一緒に感じ難くなる。

先程、スーパーライダー旋風キックが、全く悪魔元帥サタンズネークに傷を負わせなかったのは、これが原因であった。

スーパー1は全力で放ったつもりだったが、現実では石礫いしつぶてが当たった程度のダメージし与えていなかったのだ。

ドーピングのような方法で、かなりリスクを背負うが、こうでもしなければ、響鬼との戦いで傷ついた体を動かし悪魔元帥サタンズネークと戦う事が出来なかった。

これを悟られない様にする為、短時間で悪魔元帥サタンズネークとの戦いの決着を付けるつもりだった。

だが、気付かれてしまった

仮面の下で悔しそうな表情を浮かべるスーパー1だが、今さら後悔しても遅かった。

「ダガ…キサマガドンナ状態デアロウト関係ナイ。コレデ、キサマヲ殺ス事ガ出来ルノダカラナ。サア、ソノ痛ミガ感ジ難イ体ヲ甚振ニクツタラ、何時死ヌノダロウカナ…。」

大きな口を開け笑うと、スーパー1を噛殺すべく素早い動きで迫って来た。

「て…りやあああ!!！」

すると、その大蛇に向かって響鬼が烈火を振り下ろした。

力強く叩かれただけであつたが、悪魔元帥サタンズネークの全身を耐えきれない痛みが襲つた。

「何ダ…？ 熱イ…。ナ…何ダコノ痛ミハアアア…!!！」

声にならない叫びと同時に、苦しそうに体を蠢かせそう呟いた。

響鬼の烈火を喰らつたのは、これで2度目。

1度目も、激しい痛みを感じ、後一步で倒せる筈であつたスーパー1を離してしまつた。

あの時と同じ痛みだ。

まるで、全身を焼き尽くされるかのような地獄の痛み。

その様子を見ていた響鬼は「成程な…。」と呟いた。

「お前、さつき片つ端から生物を喰つたつて言つてたけど、魔化魍も食つたな。」

「マカモウ…アノ怪人ノ名力…？」

体が動けるようになってから悪魔元帥は、本能が言うままに生物たちを捕食し続けた。

様々な生物を食らったが、中でも一番体を再構する生物は、この地区に生息する怪人、魔化魍だった。

無論、魔化魍は易々と捕食されないと言うかのように抵抗してきたが、悪魔元帥はそれを制し、食らいついた。

すると体の中で、今まで感じた事が無いエネルギーを感じ、次第に魔化魍ばかりを求めて、力へと変えていった。

それが原因となり、過去の悪魔元帥よりも、巨体になり、より禍々しい姿になったのだ。

その代償に、魔化魍の弱点である音撃に弱いという性質までも取り込んでしまっていた。

その為に、響鬼の音撃を喰らい、体に激痛が走ったのだ。

しかも、力が倍以上に跳ね上がっている響鬼・紅の音撃を喰らったのだ…、魔化魍の性質を取り込んだ悪魔元帥にとって、それがどれほど苦痛に与えたか、安易に想像する事が出来る。

「音撃が弱点とは…、どうやら簡単に倒す事が出来そうだな。」

響鬼は烈火を構え直す。

明らかに不敵の笑みを鬼の面の下で浮かべている事がわかり、悪魔元帥は憎々しい眼で響鬼を「オノレエ…。」と睨んだ。

「キサマノ事ナド眼中ニナイ…。宿敵ハスーパー1タダ1人ダガ、ソナニ死ニタイノナラバ、先ズキサマカラ殺シテヤル!!」

無数の大蛇が響鬼に迫って来る、倒れているスーパー1を救うため、スーパー1から離れるように走り出した。

慌てる必要はない…。

弱点が音撃である事はわかったのだ。

今は青年を救うことが先決だ。

スーパー1に比べて、体のダメージが少ない響鬼は素早く動き、大蛇を翻弄していく。

そんな響鬼の余裕の行動に痺れを切らし、動いたのは司令塔である大蛇だった。

大蛇が口を大きく開くと、喉の底から鋭く光る刃が現れる。

「稲妻…電光剣!!」

それは、悪魔元帥がこの世界に来る前から使用していた剣。

魔女参謀に貸し与えていた為、スーパー1との戦いでは、悪魔元帥が使う事が無かった代物である。

厳密に言えば、この稲妻電光剣も本物では無く、今の悪魔元帥が造り出した模造品であるが、その切れ味や輝きは全て本物であった。

今の悪魔元帥に合わせて、巨大化した稲妻電光剣を口に食わえ、響鬼へと斬りかかった。

それに気付き、瞬時に避ける響鬼だが、その場所はたった一振りで地面が削られ、幾多の木々が消滅した。

「反則的な威力だな…。」

左腕を抑えながら思わず呟いてしまった。

響鬼の左腕は、その衝撃だけで、黒く焼け焦げていた。

衝撃でだけであるにも関わらず、この威力。もしも、スーパー1の様に白羽取りをしようというものなら、こちらの体が消滅してしまう。

どうする事も出来ないこの状況の最中で、大蛇は続けて響鬼へと斬りかかる。

万事休すか…。

そう思った直後、何か稲妻電光剣に向かって飛んで来た。飛んで来た物は、大蛇の軌道を大きく変え、稲妻電光剣は空を切り、衝撃に耐えきれず、口元から離れ、後方へと吹き飛んだ。

それと対照的に、それ エレキギターのような形をした物は、持ち主の手元へと、ブーメランのように戻っていく。

「あれは、烈雷…ってことは…。」

響鬼はそれが戻っていく方向を振り返った。

そこには、戻って来た烈雷をキャッチする緑色の鬼 轟鬼 の姿があった。

「2人共、大丈夫ですか!!」

轟鬼は2人に向かって叫んだ。

響鬼はその言葉に、何も答える事が出来なかった。

勝手に轟鬼達の仲間を抜けた自分が、何を答えればいいのか分からなかったのだ。

「でかい魔化魍だな…。でも蛇だけに、蛇魔ヘビマってことかな。」

そんな事を言いながら、現れたのは、小柄の体格をした茶色い体。それに、強張った角や水色で縁取った顔のネイルや、腕の装備が特徴の鬼 鋭鬼^{エイキ}。

「いやあ、それは面白くないと思うぜえ。」

響鬼よりも細い体系をした、青色の縁取られたネイルや、腕の装備が特徴の鬼 弾鬼^{ダンキ}。

彼の腕には、青い鉢 音撃棒・那智黒 が握られており、戦闘態勢万全な状態になっていた。

「轟鬼さん、弾鬼さん、鋭鬼さん、大丈夫ですかあ！！」

その後ろから明日夢やジュニアライダー隊と共に走って来たのは、響鬼にそっくりな鬼。

銀色の体と、4本の金色の角や装飾が特徴である、桐谷京介が変身した鬼である。

その名を、強鬼^{キョウキ}。

ただし、これは響鬼が去った後、師匠代わりになった弾鬼や鋭鬼が授けた名であり、本人は響鬼が認めてくれるまでは名乗らないと、決めていた。

途中まで不知火^{ケルマ}と雷電で向かっていたが、次第に車が走れない程の入り組んだ道になったため、車を降りて走っていくことにした。

その際に、3人の鬼は先にその場所へと向かい、強鬼だけは何か遭った時のために、ジュニアライダー隊と共にこの場所に向かう事になったのだ。

「一也さあーん！！」

強鬼を先頭に、走って来るジュニアライダー隊や、鬼をサポートする明日夢達。

ハルミはボロボロに傷ついた姿のスーパー1を見た途端、大声で叫んだ。

そして、ジュニアライダー隊もそれに続き「スーパー1！」と叫んだ。

「ハルミ…、それに皆も…何故…？」

ハルミや、ジュニアライダー隊がいる事に、スーパー1は驚いた。しかし、悪魔元帥サタンズネークがこの場に居るのならば、ジュニアライダー隊達がこの世界に来てても不思議ではない。そう結論を付けた。

「響鬼さん…。」

明日夢はかつて師匠であり、夢を導いてくれた恩師である響鬼を見て、小さく呟いた。

久しぶりにその姿を見て嬉しいという思いもあったが、まだ、恐れの方持の方が強く、何を話していいのか分からなかった。

それは明日夢だけでは無く、事実上の弟子である強鬼や、仲間であり後輩であった轟鬼達も同じ気持ちだった。

その時、ハルミはスーパー1や響鬼に襲いかかる蛇の怪物の姿に、そして、その殺気立つ眼つきに気付いた。

この怪物を見た事がある…。

ハルミの体は恐怖で震えだし「嘘…。」という言葉が自然と口から洩れた。

悪魔元帥サタンズネークも、その見覚えがある顔に気付き、大蛇の口元が歪んだ。

「ホオウ…アノ時ノ人間力…。何故ココニイルノカ…。マア、ソ
ナノドウデモイイ…。スーパー1ヲ血祭りニ上ゲタ後、ドノ道、皆
殺シニシテヤルカラナ…。」

そのまま不敵な笑いを上げた。

それを見たスーパー1は傷ついた体を動かし立ち上がると、左腕を
右腕の肘に当てて右腕を垂直に構えた。

「皆…隠れるんだ…。悪魔元帥は…必ず倒す…。」

戦闘態勢を取ると静かに言った。

悪魔元帥は「ホザケエ!!」と叫び、再度スーパー1へと襲いかか
った。

轟鬼達もそれを見て、自分達も戦う為に、それぞれの専用武器へと
手を当てた。

「話は聞いたつす!! 音撃が弱点なら、6人で挑めばどうにかな
るつす!!」

轟鬼は悪魔元帥を指さしながらそう叫んだ。

鬼の驚異的な聴力を駆使し、悪魔元帥の弱点が音撃だという会話は
聞いていた。

弾鬼の「行くぞお!!」と掛け声と同時に、悪魔元帥へと向かった。

CYCLONE…MAXIMUMDRIVE

刹那、電子音が響き渡り、悪魔元帥へと向かっていた鬼達の辺り一帯に、竜巻が吹き荒れた。

その風に弾き飛ばされ、鬼達は後ろへと吹き飛んだ。

仰向けに倒れた轟鬼は「何っすか…今の…？」と言いながら、竜巻が起こった場所へと眼を移した。

『やれやれ、困るんだよ。大切な実験材料を破壊されちゃ…。』

空から、赤色の柄の巨大な大剣を持った彼等がその場所へと下り立った。

彼等 右と左で、それぞれ別々の色をした体に、青色の複眼、それに純白のマフラーを靡かせる仮面ライダー。

鬼達、それにスーパーすらこんなライダーは、見た事が無かった。

悪魔元帥は「キサマハ…。」と 彼等の登場を驚いたように見ていた。

『ああ、僕達には構わなくてもいいよ。君は君で好きにしていると
言い…。』

彼等 はそう言うと、鬼達へと眼を移した。

やはり、弱いな…。

まあ、暫くは眠っていて貰おうかな…。

そんな事を考えながら、鬼達へと近づいて行く。

すると、自身に振り下ろされた物に気付き、左手に握りしめる大剣で受け止めた。

辺りに「ガキーン」と鋭い音が響き渡った。

『どついつつもりだい？ 日高仁志。』

烈火を振り下ろした響鬼に対して、冷淡にそう言つと、「それはこつちの台詞だろ。」という言葉が返された。

「この場所は俺に任せて、お前は帰つたじゃなかったのかい、少年？」

響鬼がそう言つと、彼等 はワザとらしく大きく溜息を吐いた。そして、『君は馬鹿かい？』と一言い放つた。

『一部始終を、^彼悪魔元帥の眼から見せて貰つたけど、君は甘すぎるよ。敵であるスーパ^{改造人間}ー1を助け、一緒に戦うなんて…。何もしなれば^彼悪魔元帥は君に危害を加えることは無かつたんだよ…。それなのに…。』

「そんな事、俺の勝手だろう…。」

腕に力を込め、烈火を振り下ろそうとするが、全く振り下ろす事が出来ない。

彼等 の力は紅の状態である響鬼の力を圧倒的に凌駕していた。

『勝手じゃないよ。僕達は彼の為に動いているんだ。それなのに、君みたいな誰も殺さないなんて甘い考え…。それが、彼の計画を遅らせているんだよ。』

^{ブレード}大剣に力を込めて、烈火を軽々と弾き飛ばし、体制を大きく崩した、響鬼の腹部に向かつて、右腕を突きだした。風の力と、加速の力が込められる拳。

それを喰らい、響鬼は後方へと吹き飛び、大木へと衝突し、悲痛の声を上げる間もなく、そのまま気を失つた。

『紅の状態が、体に負荷を与えていたのかな…。フォームチェンジが体に負荷を与えるというのは中々興味深いね、今度ゆっくりと調べるとしよう。まあ、今は暫くの間、眠っていて貰おうかな。そして、今後、どうするか十分に考えておくんだね…。』

そう吐き捨てる、鬼達へと視線を戻した。

傷ついた体だったとはいえ、あの響鬼を一撃で倒すその力。しかも、彼等はまだ、全然力を使っていない様子だった。

『さあ、次は君達の番だよ。何もせずに、悪魔元帥彼があのスーパ改造人ー1を殺すところを見ているというなら…見逃すけど、どうする？』

そう投げかけるが、答えるまでもない。

鬼達はそれぞれの武器を握り直した。

それを見た 彼等 は再び大きな溜息を吐き「無駄な事をする奴ばかりだね…。」と呟いた。

その余裕な態度に苛立ちを感じながら、鋭鬼は「お前、一体何なんだ？」と聞いた。

すると、 彼等 は不敵に笑った。

『僕達は、仮面ライダーW。さあ…、振り切るよ。』

「そんな、どうすればいいのよ…。」

眼前で繰り広げられる状況を見て香須美が呟いた。

悪魔元帥サタンズネークに攻撃に対して、避けるだけが精一杯のスーパー1。
突如現れた謎のライダー、仮面ライダーWに一撃で倒された響鬼。
そして、Wに抵抗はするが、全く相手にされておらず、一方的に痛めつけられる轟鬼達。

「ただ、戦う力のない自分達にはどうする事も出来ない。
自分達に出来る事は、勝利を祈り、ただこの現状を見ているだけ。
それが悔しかった。」

すると、ハルミが何かを思い出したように「そうよ。」と言った。
そして、明日夢へと向き返った。

「確か、鬼ってまだいるのよね。その人達も一緒に戦えば、あの仮面ライダーも、悪魔元帥も倒せるんじゃないかしら!!!」

逆転満塁ホームランを打ったかのような満面の笑みを浮かべながら、
そう提案した。

「無論、その顔に焦りは見せているが...。
しかし、明日夢は言い難にくそうに「ですが...。」と話し始めた。

「それは無理ですよ...。人間達を恨んでいるイブキさん達がそんな簡単に力を貸してくれると思えませんし...。それに、僕達には、その鬼達が何処どこにいるかわからないんです...。」

分裂した鬼が、今どこを拠点にしているのかは、明日夢達にはわからなかった。

この山の何処どこかにいるであろうことは確かであるので、探せば見つかるかもしれない。

でも、それには時間が掛かり過ぎる。

その間に、全滅してしまふ。

提案が一蹴され「そんな…。」とハルミが落胆していると、「教えてやってもええよ。」と陽気な声が聞こえてきた。

急に聞こえてきた声に驚いていると、木から飛びおり、関西弁を喋る、派手な着物の青年が現れた。

青年が動く度に「チャリン」と金が掠り合う音が聞こえてきた。

明日夢はその人物を見て驚いていた。

「ニシキさん、何でここに？」

派手な格好をした青年 ニシキ、その人物の事がよくわからないジユニアライダー隊は日菜香に「誰？」と聞いた。

「ニシキさんは、鬼の仲間にも、人間の仲間にもならないで、お金の為だけに動く鬼ですよ。普段は、余り顔を見せないんですけど…、何でいるんですか？」

「まあまあ、細かい事は後、後…。それより、どうするんや？ 知りたくないんか、鬼達の居場所。」

何が面白いのか、笑みを浮かべながら聞いてくる。

正直に言えば教えて貰いたかったが、明日夢達はニシキがタダでは教えてくれない事を知っていた。

しかも、この話には確証がない、嘘かもしれない。

「何や、疑がつとるんか？ 大丈夫、ちゃんと知つとる。」

厳密に言えば、人間に敵対する鬼の場所を知っている奴を知っているのだが…。

その事は隠していた。

「本当に教えてくれるの？」

「ああ、教えたる。ただし…。」

ニシキは一瞬言葉を溜めて、ジュニアライダー隊を指さした。

「埋蔵金の場所は教えて貰うで…！」

「はっ？」とジュニアライダー隊は呆気にとられた。

「なんや、その顔は？ こっちはわかっとなるんやで、お前等が埋蔵金を隠し持つとるってこと…。」

ニシキは、ジュニアライダー隊の奇抜な服を見て、勝手にそう思い込んでいた。

実際には、この世界に来て1日も経っていないジュニアライダー隊が知る筈もないのだが…。

その表情を見て、「何や、無いんか？」と尋ねるニシキに対して、ハルミは「あるわよ。」と答えた。

「いいわ、もし私達の事を手伝ってくれたなら、全部上げるわよ。」
「ホンマか？ なら契約成立や。」

満面の笑みで喜び手を差し伸べて、ハルミと両手で握手をした。
明日夢は心配そうに「良いんですか？ そんな約束して…。」と小声で聞いてきた。

「大丈夫よ…、それに一也さんを救うにはこれしかない物…。」

ハルミも小声で明日夢にそういい返した。

今はもうこうするしかない…。

終わった後の事は、後で考えればいい…。

そうでなければ、今の現状を覆し、スーパード板面ライダー1や鬼達を救う事が出来ない。

「案内したる。着いてき。」

ニシキは身軽に体を動かすと、山道を登っていった。

「ちよつと、待てよお！！」と叫びハルミは明日夢達の方を見た。

「皆、必ず、鬼達を連れて来て見せるから。待ってて…。」

ハルミはそう言い残すと、ニシキの後を追いかけ始めた。

「姉ちゃん、俺も行くよお！！」

「僕も！！」

「あつ、ちよつと待って、僕も行くから！！」

「私も！！」

その後を、良、シゲル、マモル、それにミチルが追い掛ける。

「勝手に言っただめですよ。」と子供達を止めようとする明日夢だが、それを聞かずに着いて行った。

明日夢に、もはや彼等を止める事が出来なかった。

皆、自分に出来る精一杯の事をしようとしている…。

それなのに、自分は何もしていない。

明日夢はある決心をすると、気を失っている響鬼の元へと走った。その手には勢地郎から、預かった木箱が握られていた。

E part (後書き)

はい、E part 終了です。

1万文字を軽々と越えましたが、ここまでいかないと話数が伸びてしまいますので…。

それに今までの更新停止期間を考えると、これくらいは書かないといけない気がしますし…。

響鬼編からちよくちよくと登場していた怪人は、ジンドグマ首領・悪魔元帥です。

時間系列的に、藤の樹海で倒した後の設定なので、登場させることにしました。

コミカルなキャラが強く、ネオショッカー首領の次に私が好きな首領なので、登場させました。

京介の鬼の名はWikiで知った強鬼に決定です。
これからはこの名前で通していきます。

改造人間が、機能を高めたり、下げたり出来るというのは小説「仮面ライダー1971-1973」を基に描きました。

この作品は、かなり好きなので密かにれメイクしている「世界の破壊者と始まりの戦士」で色濃く反映されています。

W登場です。

取りあえず、来人だけ喋らせました。

相棒は、皆さんわかっていると思いますが、もう少し伏せさせてもらいます。

では、次回も頑張ります。
エレメントブレイドでした。

キン肉マン名台詞&迷台詞コーナー

久しぶりのこのコーナー。

今回はこの台詞です。

『へのつっぱりは いらんですよ!!--』

文庫版キン肉マン1巻「宇宙怪獣襲来の巻」 キン肉スグル談

おお、言葉の意味はわからんが、とにかく凄い自信だ!!

…そんな言葉です。

他に説明がありません。

漫画版では、使用されなかった言葉ですが、TVアニメ版だとかなり使用され、度々言われた台詞です。

その為、キン肉マンとは言えば、この台詞と言う人が多いのではないのでしょうか？

ついでに、キン肉マン？世でも万太郎が数回父親を尊敬する試合の時リスベクトに言いました。

皆さんも、何か自信がある時に、言ってみてはいかがでしょう？
ついでに私のこの作品には何時まで経っても、へのつっぱりはいらん事は無いようです…。

F part (前書き)

どうも、エレメントブレイドです。

何とか投稿できる形にまで直しました…。

今回も1万文字以上です…。

それなのに、話が一步しか進んでおらず、凄く陳腐な文章力となっ
ています。

誤字脱字が多いかもしれませんが、明日明後日までは必ず修正し
ます。

しかも、響鬼編はアギト編よりも長くなる事が決定しました…。

山奥のその場所で、切り株に腰を掛け、ハバタキは今起きた嵐の様な出来事を思い返していた。

あれは、なんだったのだろうか…。

全て夢だったのかもしれない。

そんな錯覚さえ感じてしまうような、出来事だった。

突如、もう2度と来ないでくれ、と伝えた筈のニシキが女性と、子供達を連れてやって来た。

どうやら、彼女達が前に話していたトドロキ達が連れていた奇妙な格好の連中らしいが…。

その女性が、急に「鬼の居場所を教えて欲しい。」とお願いしてきた。

確かに、元は人間に反逆する鬼だった為、鬼の居場所は知っていたが、それを教えるわけにはいかなかった。

鬼を抜ける際に、絶対に鬼の場所を明かさないと約束しており、もし破ったのなら自分の命が危ない。

追い返そうとすると、女性は「時間が無いの!!」と力強く言ってきた。

子供達も「別世界からやってきた。」とか、「スーパー1が危ない。」とか、「大変なことになってるんだよ。」とか騒いでいた。

確かに、先程からどす黒い邪悪な気配を感じているが…。

だから何だとういうのだ？

鬼ではない自分には関係ない。

そう怒鳴るように言いつけると、女性の方が「そんなの、逃げているだけじゃない！」と叫んだ。

確かにその通りだ。

自分は理由を付けて逃げているだけ…。

そんなのは、わかっている。

だけど…どうすれば良いというのだ？

もう何をすればいいか、わからなかった。

仮面ライダーは味方でしょう。だから…助けて…。

あの時、彼女は泣いていた。

何故、泣いているのかわからなかった。

子供達も彼女につられる様に、頭を下げた。

絶対に手を貸さないつもりだった。

絶対に、鬼の場所を教えないつもりだった…。

だが、気付いたら、吐き捨てるようその場所を教えていた。
何故、教えたかは覚えていない。

ただ、仮面ライダー…即ち、鬼が人類の味方と言ってくれたことに
驚きを感じたのは覚えている。

その後、彼女や子供達はお礼を言い、ニシキと共にその場所へと向
かった。

全てを思い返し、ハバタキは疲れた様子で溜息を吐いた。

そして、ニシキ達が去っていた方向を見つめながら、拳を切り株に
叩きつけた。

切り株は、見事に砕け散った。

「何をやってるんだろう…。俺は…。」

誰に投げかけるわけでもなく、静かに、そして悲しそうに呟いた。

山の最深部の洞窟。

その場所は木々に覆い隠されており、しかも見晴らしが良よいという、
隠れ家としては最高の条件を持ち合わせていた。

もし、普通に訪れたならば、人間であるハルミやジュニアライダー
隊は撃退…下手すれば殺されていたかもしれないが、ハバタキと別
れた後、時間短縮の為、ニシキが4人を担いで走るといふ荒技を使
い、難なく到達する事が出来た。

どこの派閥にも属していないニシキが、行き成り人間を連れてこの場に来た事に、鬼である男達は明らかに不信感を抱いていた。誰も何も言っていないが、今帰ったなら見逃してやる、と眼で訴えていた。

しかし、ニシキが鬼にハルミを襲わない様にする事を告げ、そのお陰もあり、鬼は誰一人として襲ってはこなかった。

強い目つきで睨んでくる、鬼を横目に、大きく深呼吸をすると、中へと足を踏み入れた。

洞窟の中は予想以上に広く、中は人が住める程度には整備されていた。

奥に進んで行くと、そこには、物腰優しそうな顔つきをした青年がハルミ達の事を待っていた。

他の鬼に比べても明らかに若いこの男の名は、イブキ。

以前までは歌舞鬼が反逆を狙う鬼の頭領であったが、その死後、頭領のいない鬼達の中で、実質的な頭領と呼ばれているのがこのイブキであった。

ハルミ達は、今起こっている全ての状況を説明した。

焦りながらのたどたどしい説明ではあるが、別世界の事や、サタンズネ悪魔元帥イククの事、鬼が危険である事などを全てを話した。

それを聞いたイブキは、表情を変えずに答えた。

「話しはわかりました。ですが、手を貸す事は出来ません。」

明日夢の言っていた通り、鬼達は簡単に手を貸してくれる事は無かった。

見事に断られてしまった。

「何で！！」と言いかけた、ハルミの言葉を遮りイブキが「僕達は…。」と話し始める。

「人間に反旗を翻ひるがえした鬼なんです。そんな僕達が人間を守るなんて可笑しいでしょう。」

「可笑しいって…だって、貴方達は鬼仮面ライダー…何でしょう？」

仮面ライダー…。

忌々しい名だ。

その名のお陰で、どれだけ苦しい思いをしてきたか…。

「だからなんだって、言うんですか。貴方達の言う事が全部本当なら、仮面鬼ライダーは人類の味方って事になるんでしょうが、生憎あいにくですが、僕達は人類の味方ではありません。」

悪魔サタンズネーク元帥という怪人が暴れていようが関係ない。

もし、自分達が危険な状況に遭えば戦うが、立場上、敵対している轟鬼達と組む気はない。

「人類の味方じゃないって…。それじゃあ、何のために仮面ライダーになったのよ！！」

その言葉を聞いた直後、イブキの頭の中で何かが吹っ切れた。

気付いたら右腕に持っていた、トランペットを模した銃 烈風の引き金を引いていた。

烈風から放たれた青い空気弾は、ハルミの頬寸前を掠り、後ろの土の壁へと直撃した。
人に直撃する事は無かったが、その威力を表すかのように、後ろの壁には大きな窪みが出来ていた。

先程の表情とは一転し、イブキは、その存在通りである、正しく鬼のような表情でハルミを睨んでいた。
そして、「貴方に、何がわかる…。」と怒りが込もった声で呟いた。

「知ったような口を利かないください。貴方に、僕達のなにがわかるというんですか!!」
「わからないわよ!! わからないから、聞いてるんじゃないの!!」

ハルミ達には鬼の気持ちは決してわからない。
だからこそ、教えて欲しかった。

何故、仮面ライダーと人間の間にこんな深い溝があるのか。
明日夢からデイケイドやクウガの事、それに鬼への迫害の事は聞いていたが、どうにもそれだけではないように感じていた。
それ以前に、もっと、もっと大きな問題があるように感じた。

どちらも退こうとはしない。
そんな状況を破る為、イブキはゆっくりと烈風をハルミの顔へと向けた。

「出っ行って行って下さい…。」

もし、出ていかなければ、今度こそ撃ち殺す…。

そう、小声で告げた。

だが、ハルミやジュニアライダー隊は決して、逃げようともせず、怯えた表情すら見せようとはしなかった。ただ真直ぐと、イブキを見ていた。

沈黙が訪れる。

他の鬼も黙ってこの状況がどうなるのかを見ており、ニシキも決して交渉に手を出そうとはしなかった。

烈風を構える手が震える。

引金を引けばすべてが終わる。

前に、集落を襲撃した際に、自分達を殺そうとこの場所を探っていた人間を殺した事がある…。

今さら4人程度なんて事のない。

…なんて事のない筈なのだ。

叫び声を上げると、イブキは烈風を地面へと叩きつけ、後ろへと向き返った。

ハルミ達には、その時イブキがどんな表情をしているのかわからなかったが…。

小刻みに震えている肩から、泣いていたのがわかった。

「昔、僕には弟子がいました…。だけど、人間に殺された。」

まだ、鬼が分裂する以前の話。

イブキには、自ら鬼に志願した、天美あきらという女の子の弟子が

いた。

大の男ですら、苦痛に感じる修行にも耐え、あきらは日に日に鬼としての力を付けていった。

イブキは自分より、優秀な鬼になるかもしれないと感じながら、あきらの事を実の妹の様に可愛がっていた。

そんな、ある日。

魔化魍との実戦訓練の最中、あきらは何故かその場所にやって来た人間達を庇い、重傷を負った。

後で知った話だが、その人間達は、鬼を危険分子とみなし、魔化魍退治の後、疲れ切ったイブキを抹殺する為にその場所に来たらしい…。

イブキは急いで魔化魍を清めると、あきらを抱いて走った。

傷は深いがまだ助かる可能性はある、山を下りれば、設備が施されている病院だつてある。

そうすれば、助けられる。

だけど、まずは応急処置だけでもしなければ…。

だが、村に戻った直後つらい現実を知る事となった。

応急処置を頼んだが、集落の人々はそれを断った。

運悪く、その時、集落には明日夢などの、鬼達をサポートしてくれる存在が出払っていた。

鬼が怪我するのは自己責任であり、自分達には関係ない。

はっきりとそう言われたのを、昨日の様に覚えている。

更に聞けば、あきは親に先立たれ天涯孤独の身であった事を知った。つまり、身寄りもなく勝手に鬼へと入門した存在が、死のうが、生きようが関係のない事だと、いう事だった。

人間を守る為に傷ついたのか？

そう怒りのままに叫びたかったが、そんな事をしている間にも、あきらの呼吸は次第に小さくなっていく。

集落に背を向けると、イブキは山を下り始めた。軽い止血はしているが、医学について専門的な知識が無いイブキには、これが出る最低限の事であり、

あきはとても苦しそうだった。
時間が無い…。

気付いたら、あきらの眼から小さな滴が落ちていた。ふと、あきらの表情を見てみると、その表情は先程までの苦しそうな表情から、一変し穏やかな表情になっていた。そして今にも消えそうな小さな声で、話し始めた。

両親を魔化魍に殺され、その復讐心で鬼へと入門したが、イブキとの修行を通じて、復讐の念が薄れていった事…。
イブキを本当の兄の様に慕っており、本当に感謝していた事。
最後の言葉は今でも脳裏に焼き付き、忘れる事はない。

もつと、生きたかったです…

それが少女の最後の言葉だった。

イブキは、泣き叫んだ。

あの時、人間は同じ人間であった、あきらを見殺しにした。

鬼になったあきらには、生きる価値すらないのだと…。

「人間を守ろうとしていましたよ！！ 信じようとしていましたよ！！ ここにいる鬼達もそうです…。誰だって、好きで人間を殺そうとなんかしていません！！ でも、こうでもしなければ、鬼達僕達は生きていけないんです！！」

その後、イブキは自分と同じように人間に不信感を抱いている鬼、カブキと出会った。

人間に下剋上を起こす…。

そう聞かされても、最初は必死に人間を許そうとしていた為、断った。

だが、そんな事は無理だということに気付いた。

「幾ら僕達が人間へと1歩歩あゆみみ寄ろうとしても、そしたら人々は僕達から1歩遠ざかる。決して、その距離が縮まらない…。そんな状況でも、まだ…人を守れと言うんですか！！」

カブキとイブキを中心とし、同じ志を持つ鬼達が集まり、下剋上を起こした。

好きで人間を殺した事など1度もない。

でも、そうしなければ、今度は自分の命が危なかった。だから、殺さざるを得なかったのだ。

人間なんて、自分勝手に汚い生き物だ…。
そう思い続けることで、平常を保っていた。

ジュニアライダー隊に会う前までは…。

ハルミやジュニアライダー隊が、烈風を向けた際、少しでも不審な動きをしていたら迷わずに撃ち殺していた。
だは、ハルミやジュニアライダー隊は何もしようとはしていなかった。

だから、撃てなかったのだ。

すると、話を聞いて良が「だったら…。」と呟いた。

「僕達、ジュニアライダー隊が絶対に言って上げるよ。皆に、鬼は皆の味方だって。」

「そうよ。そして、絶対に皆に鬼の事を認めさせてあげるわよ!!」

良やミチルに続き、シゲルとマサルが「うん、絶対に約束するよ。」などの賛同の言葉を続けた。

「もし仮面ライダーが歩み寄っても、人間が一步離れていくなら…私たちが、絶対に無理矢理でも近づかせてあげるわよ!! だから…お願い。一也さん達を助けて。」

ハルミの言葉を聞き、イブキはその場に崩れた。
そして、「何故ですか…。」と呟いた。

「何故、貴方達は、そんなに鬼達の事を信用できるんですか…。」

今まで鬼として生きてきたが、人間達からこんな事を言われた事は1度もない。

人間達は、自分から遠ざかっていく…。

だけど、彼等は自分達へと無理矢理にでも近づいてきた。

ハルミは、その問いに迷いない瞳で答えた。

「だって、貴方達は…仮面ライダーだから。」

「はあああああ！！」

雄叫びを上げながら、轟鬼が烈雷を振り翳す^{かざ}。

が、Wは難無く右腕に持った大剣^{ブレイド}で受け止めた。

そして、残った左腕で轟鬼の頭を鷲掴みにし、音撃棒・緑勝^{ニヘン}を構え、正面から突っ込んでくる鋭鬼に向かって投げ飛ばした。

避けきれず轟鬼と激突する鋭鬼。

続いて、轟鬼が落とした烈雷を足で器用に掬い上げ、左腕で握りしめる。

そのまま、両腕を大きく振るい、左右から迫って来る弾鬼と強鬼を、大剣^{ブレイド}と烈雷で斬り付けた。

弾鬼と強鬼の腹部から、鮮血が飛び散り、後ろへと吹き飛ばされた。

Wは、そんな鬼達を興味なさそうに見つめていた。

『どうする…。まだ、やるのかい？』

傷ついた体を動かし、立ち上がりながら、Wへと目を向けた。

強すぎる…。

率直な感想だった。

先程から、自分達の攻撃が1度もWへと当たる事は無く、代わりに、鋭く重い攻撃を喰らわされている。

しかも、余裕な言葉や態度からして、Wは全く本気を出していない。そもそも、悪魔元帥サタンズネークの邪魔をさせない事が目的な為、本気を出す必要など無いのだ。

反則的なWの力を感じながら、なお尚も鬼達は立ち上がる。

彼等の、まだ勝利を諦めていない様子にWは苛立ちを感じていた。

結果が見えているのに、立ち向かってくる。

これより、無駄な事が何処にあるだろう？

握っていた烈雷を地面に落とし、無慈悲にもそれを踏み付けた。

轟鬼は「烈雷が…。」と、悲しそうに呟いた。

『これで、君達の勝てる可能性がまた一段と減った。もう限りなく0に近い勝利への可能性だ。諦めたらどうだい？』

言い切る前に、鬼達はWへと立ち向かっていた。

Wには、その行動が理解できなかった。

一方で、サタンズネーク悪魔元帥と死闘を繰り広げる仮面ライダースーパー1。

響鬼との戦いで傷つき、本来なら動けない程の重傷を負っているスーパー1は、出来るだけ制御装置システムを低下させ、何とか戦っている最悪な状態だった。

この最悪な状態で、最強の敵、サタンズネーク悪魔元帥と戦わなければならない。

サタンズネーク悪魔元帥が暴れるように攻撃を繰り出し、スーパー1が何とかそれを避けていた。

今の体でサタンズネーク悪魔元帥と互角に戦うなんて事は、スーパー1には不可能に近い事であった。

無数の大蛇が、スーパー1の体を食い千切ろうと、牙を向けて迫ってくる。

冷熱バンドで反撃を試みるが、どちらも出力が落ちており、大蛇の動きを止める事は出来ない。

急いで、大地を蹴り空へと逃げた。

何匹かはか避ける事が出来たが、一匹の大蛇がスーパー1の左足へと噛付いた。

スーパー1は、地面へと受け身も取れないまま追突する。

「あ……う……」

足から来る痛みに、苦痛の音が漏れた。

牙は強化服を突き破り、徐々にスーパー1の体へと侵入してくる。

やばい…。

苦痛を感じるよりも先に、大蛇の頭部へと拳を振り落とした。

様々な感覚を極限まで落としている状態であるが故に、この拳をどの程度の力で振り下ろしたのかはわからない。

下手すれば、全く力が込められておらず、大蛇はそのまま自分の足を食い千切られる。

すると、大蛇は痛みから大口を広げ、スーパー1の足から放れる。

どうやら、上手くいったらしい…。

巧に、両腕を駆使し、急いでその場から離れる。

その直後、今までいた場所に向かって、無数の大蛇が突っ込んできた。

後少し遅ければ、無数の大蛇に体中を食い千切られていた。

その様子を、サタンズネーク悪魔元帥は忌々しげに見ていた。

だが、自分が圧倒的に優勢であることに変わりはない。

ゆっくり…。

ゆっくりと追い詰めて…殺せばいい…。

急ぐ必要などは、何一つ無い。

薄気味悪い笑みを浮かべていると、「こん、こん」と小さな音が聞こえてくる。

視線をその音へと向けてみると、自身の体大蛇に石礫が当たっていた。

「止めるお!!! スーパー1から離れるお!!!」

石礮を投げているのは、この場に残っているジュニアライダー隊であった。

スーパー1が悪魔元帥サタンズネークに追い詰められている様子に、我慢できず、近くに落ちていた石礮を投げたのだ。

勿論、マサコや香須美は止めているのだが、子供達は「僕たちだって、ジュニアライダー隊なんだ。仮面ライダーの力になりたいんだ！」と、聞いてくはれなかった。

悪魔元帥サタンズネークには、石礮をぶつけられた処で、蠅はえが止まった位にしか感じない。

だが、未だにスーパー1の勝利を信じている、ジュニアライダー隊目障りに感じた。

無数の大蛇が一齐に、ジュニアライダー隊を睨みつけた。

その鋭い眼つきに睨まれた瞬間、死の恐怖を感じ、ジュニアライダー隊の石礮を投げる手が止まった。

「キサマ等ノ事ナド、スーパー1ヲ殺シタ後ニデモ、殺シテヤルツモリダツタガ…、死ニタイノナラ…殺シテヤル…。」

大蛇がジュニアライダー隊を目掛けて、大きな口を開き迫ってきた。響鬼やスーパー1と違い、戦闘能力や強靱な体を持っていないジュニアライダー隊や日菜香は、それを避ける事が出来ない。

殺される。

誰もがそう感じた直後、悪魔元帥サタンズネークの中枢である大蛇の瞳に小型ロケットが突っ込んできた。

小型ロケットは、サタンズネーク悪魔元帥の瞳に突き刺さり、爆発を起こした。

瞳を潰された痛みにより、サタンズネーク悪魔元帥は空に向かって雄叫びを上げた。残った片眼で忌々しげに、それ小型ロケットが飛んで来た方向を睨んだ。

そこでは、小刻みに震える右腕を左腕で抑えながら、サタンズネーク悪魔元帥へと向けて照準を定める、スーパー1の姿があった。

ファイブハンド発熱バンドその両腕は緑の腕から、金色のレーザーバンドへと交換していた。

レーザーバンドには、レータアイ小型ロケットが備え付けられている

本来は、空中へと噴出し、相手の居場所を探る為に使う代物だが、今回の様に相手にぶつけることで強力な武器へとして使用する事も出来る。

今のスーパー1にとって、威力も変わらずに扱う事の出来る、ただ只1つの武器である。

「悪魔元帥…、お前の相手は俺だ…!!」

立っている状況もやっとなのであるのに関わらず、静かに、そして、力強く言い切った。

サタンズネーク悪魔元帥は荒れ狂った。

痛みからではない。

憎悪からであった。

スーパー1に傷つけられた、この痛み。

圧倒的に優勢であったのにも関わらず、攻撃を受けてしまった。それが許せない…。

殺す…。
絶対に殺す！！

大きな雄叫びをあげると、大蛇が一変に暴れ出し、スーパー1へと襲いかかる。

その刹那、スーパー1の額のランプは赤く点滅し始める。

その直後、爆音を轟かせな、それは大蛇へと体当たりをした。

それは車両全体が青い車体をしており、車体後部に2本のアンテナが伸びているオフロード型のマシンバイク。

「ブルーバージョン！！」

その名を、ブルーバージョン。

スーパー1相手と共にこの世界へと辿り着いたバイクである。

ブルーバージョンは、スーパー1の電子指令を受ければ、どこにでも駆けつける万能機械マシン。

しかも、荒れた山道などの悪路に強く、小回りも利く。

このような状況には打って付けのマシンである。

スーパー1は、目の前を走るブルーバージョンへと飛び乗った。

そして、自動操縦から、手動操縦へと切り替えると、エンジンを何度も吹かした。

先程、悪魔元帥サタンスネークに噛まれた痛みから、右足が自由に動かない…。

ブルーバージョンには、文字通りスーパー1の足になってもらう為にこの場を呼んだ。

爆音を轟かせ、ブルーバージョンが大地を駆る。

さて…。

この体はどこまで持つか…。

Wは強鬼と弾鬼の猛攻を片手であしらいながら、スーパー1と悪魔^{サタン}スネーク元帥の戦いへと目を向けた。

一時は、改造人間^{スーパー1}が倒れるのも時間の問題と感じていたが…。突如現れたバイクにより、状況が変化した。

しかし、スーパー1の体は傷つき過ぎている事には変わらない。心配しなくとも長期戦に持ち込むだけで、悪魔元帥^{サタンスネーク}の勝利は決定する。

そう確信すると、右足で強鬼を、左腕で弾鬼を弾き飛ばした。2人は大きく回転をしながら吹き飛んでいく。

この鬼達は何時まで無駄な努力を続けているんだ…？

既に勝てないことなんて、眼に見えている筈…。これ以上、何をしても鬼達は自分を突破して、改造人間^{スーパー1}助けに行けない事など、解りきっている事だ。

『しょうがない…。少し痛いだろうけど…。眠っていて貰おうか…。』

Wは腰のベルトの挿入されている、赤いUSBメモリ型のそれを引

き抜く。

右腰部に備えられた装填口へと、それを差し込もうとする。

「うおおおおお!!」

すると、何を感じたのか、弾鬼がWに向かって正面から突っ込んできた。

策を練っても意味がないと感じて、破れかぶれになったのか？

そんな事をして、意味ない筈なのに…。

その理解不能な行動の意味を考えていた為、メモリを装填口へと挿入する動きを止めてしまっていた。

弾鬼は、腰に取り付けていた音角を手握ると、それを同じく腰の装着していた、様々な色の複数のディスクへと当てた。

澄んだ音色が聞こえてくると同時に、ディスクが様々な動物へと変化する。

緑色の猿に、茜色の鷹、鼠色の蛇、黄色の獅子…。

その様々な動物、鬼達の専用装備・ディスクアニマルがWへと襲いかかり、その瞳を一瞬であるが眩ませた。

直ぐにディスクアニマルを取り払うが、その直後、弾鬼がWの体を力強く掴んだ。

「今だ!!」

その掛け声と同時に、鋭鬼は緑勝を、轟鬼は雷を纏わせたその拳を、それぞれWへと振り落とした。

続いて、ダンキもWから離れると身軽な動きで、Wを蹴り飛ばした。

この戦いが始まって、初めてWが後ろへとよろめいた。

瞬時に体勢を立て直す、その隙を突き、強鬼がWを飛び越え、悪魔元帥と戦うスーパードクターの元へと走った。

そもそも、この行動が、強鬼をスーパードクターの場所へと向かわせる為の行動だと気付いた。

今なら止める事も簡単に来るが…。

そんな事よりも、自分に一撃も喰らわせられないだろうと言う考えが、崩された事の方が大事だ。

「褒めてあげるよ…。僕に一撃喰らわせられた事、それに僕の考えないような行動をした事にね。ただ、あんな未熟な鬼を行かせるなんて、間違えじゃないのかい？」

「違う。京介君は立派な鬼だ。未熟なんかじゃない。」

鋭鬼が言い返した。

まあ、そんな事どうでもいいのだが…。

「君達の犯した重大なミスは…、只でさえ絶望的な戦力を、さらに減少させてしまった事だ…。」

かちやり…。

Wは大剣の剣先を3人の鬼へと向けた。

そして、ゆっくりと歩いていった。

ブルーバージョンを巧みに操り、悪魔元帥サタンズネークの大蛇を避けていく。現在のスーパー1の腕は、電撃を操る青き腕、エレキバンドとなっており、襲いかかる大蛇に電撃を浴びせていた。

だが、今のスーパー1には体の負担が大きい、最大出力の電撃を放つ事が出来ない。

先程から浴びせている電撃も、致命傷となる程の威力ではない。

「チヨコマカト小賢シイ奴メ…。」

中枢の大蛇を残し、無数の大蛇が迫ってくる。

悪魔元帥サタンズネークのその行動を、スーパー1はそれを待っていた。

アクセルを吹かし、一気に駆け出したブルーバージョンは空へと飛び上がった。

悪魔元帥サタンズネークの頭より高い位置まで上がると、急ブレーキを掛けた。

その反応により、スーパー1の体は勢いよく、悪魔元帥サタンズネークへと投げ出された。

空中で1回転すると、右足を前へと突きだした。

「スーパーライダー…ブレエイクキイツク…！」

体の機能を殆ど停止させているスーパー1が、相棒ブルーバージョンと協力させて放つ力任せの必殺技。

見事、中枢の大蛇へと炸裂し、悪魔元帥サタンズネークの全ての大蛇が吠えた。

まだ終わらない。

更なる一撃を喰らわせるべく、全ての機能を活動させる。

体中に激しい痛みが走るが…耐える。
今耐えないで、何時耐えるというのか…。

大蛇の頭を蹴り、句中へと飛び上がった。
決めるは4つの型。

赤

心

少

林

順に決めていくと、空中で1回転する。

「スーパーライダーアアアア…月面キイイック!!」

悪魔元帥サタンズネークへと勢いよく降下していく。

スーパーライダー旋風キックの時と同様に、それは悪魔元帥サタンズネークの脳天へと炸裂した。

しかも、今度のは、身体機能をフル活動させて放つ必殺技であり、
辺りに衝撃波が起こった。

悪魔元帥サタンズネークも衝撃により、その巨体が大きく後ろへとよろめいた。

無数の大蛇が断末魔の叫びを上げた。

只1つ。

中枢の大蛇だけは、よろめいた体を動かし、地面へと降下していく

スーパー1を充血しきった眼で睨んだ。

死にそうな程の苦痛であるにも関わらず、まだ死ねない。
スーパー1に復讐リベンジするまでは…。

噛み付こうと口を開くと、その額に何かが張り付けられた。

「魔化魍を喰らってるなら、音撃じゃないと清められないよな…。」

それは強鬼の音撃鼓だった。

音撃鼓は巨大化していき、強鬼は音撃棒を大きく振り上げた。

「響鬼さん直伝。音撃打・一気火勢の型！！ はあっ！！」

音撃棒を振り下ろし、清めの音を叩き込んだ。

魔化魍を喰らい、音撃に弱くなった悪魔元帥サタンズネークにとって、これは地獄の苦しみの筈。

そろそろ、耐えられなくなり、体が四方八方に吹き飛ぶ。

…筈だった。

「何でだよ…？ 何で平気なんだよ？」

だが、悪魔元帥サタンズネークの体に全く変化はなかった。
それどころか、笑っていた…。

「邪魔だ…。」

強鬼は別の大蛇により叩き落とされた。

理由わけがわからなかった。
悪魔元帥サタンスネークは音撃に弱い筈ではなかったのか…。

すると、悪魔元帥サタンスネークは「成程ナ…。」と呟き、強鬼仮面ライダーとスーパー1に向
かって咆哮を上げた。
体に走る激しい痛み。

それに、体が四方八方に吹き飛びそうな感覚…。

「これって…まさか…。」
「音撃…だと…。」

その咆哮まきを紛れもなく音撃その物だった。

ありえない。
何故、悪魔元帥サタンスネークが音撃を駆使する事が出来るのだ。
そんな事…。

その時スーパー1は気付いた。
魔化魍を喰らい、その特性をも飲み込んだというのなら、もしや…。

「まさか…、鬼も喰らったのか？」

それを聞き、悪魔元帥サタンスネークは笑った。

「ソウダ、キサマノ言ウ通り鬼ヲ喰ラツテイル。」

悪魔元帥自分自身も忘れていた。
体を再生する際に、一度だけ傷だらけで動けない状態の人間2人を
喰らっていた。

彼等が鬼だったのだ。

スーパー1が知る由もないが、その2人は響鬼へと戦いを挑んだ、
反逆側の鬼、鬪鬼と凍鬼であった。
響鬼に敗れた後、傷ついた体を動かし、隠れ家に戻ろうとしていた
が、その際に、大蛇に襲われた。
大蛇に抗う力は既に残っておらず、難無く大蛇に捕食されてしまっ
たが…、それが運命を大きく変えた。

魔化魍の方が喰らった量が遙かに多かった為、その特性がいち早く
現れたが、今になって、鬼の特性も表れた。
自身の体の中で、何倍にも強力にした音撃を発し、一気火勢の型を
打ち消したのだ。

もう1度、悪魔元帥サタンズネークが咆哮を上げると、その姿が徐々に変化してい
った。

体から更に無数の大蛇が生え、その姿も鬼と魔化魍を合わせたよう
な、より凶暴に、より禍々しい姿へと変化した。
大きさも、先程の倍以上まで膨れ上がっていた。

「そんな…どうすればいいんだよ…。」

絶望を感じた強鬼が、青ざめた声で呟いた。

魔化魍の音撃でないと倒す事が出来ない特性を持ち、鬼の特性であ
る音撃を扱う能力を併せ持つ。

その為に、音撃が通じない。

矛盾した特性を併せ持つ、この不死身サタンズネークの怪物を倒す事が出来ない。

それを聞いていた轟鬼は「そんな…。」と呟いた。

仮面ライダー
鬼やスーパー1に声援を送っていたジュニアライダー隊や日菜香も言葉が出ない。

今までの努力は何だったというのだ…。

この絶望的な状況の中、Wが笑った。

それは、鬼とスーパー1を嘲笑うかのような、笑いだった。あざわら

『残念だったね…。もう君達の負けだよ…。』

ブレイド
大剣を地面へと向けた。

もう自分が戦う必要が無いという事の現れであった。

『今までの頑張りも、あのスーパー1の体を酷使してまでの行動全て無駄に終わったんだ…。後は、ゆっくりと…彼悪魔元帥に始末されるだけだね。』

大蛇が鬼達に襲いかかってきた。

轟鬼達は何とか避ける事が出来たが、見てみるとサタンズネーク悪魔元帥はスーパー1だけではなく、それに関わる全ての人物を襲っていた。

先程までは、自身悪魔元帥の復讐の相手であるスーパー1しか目に入っておらず、スーパー1への復讐だけで生きていた。

だが、今の最強の力を持ったサタンズネーク悪魔元帥は復讐リベンジメモリと完全に適合を果たした。

もうスーパー1の復讐だけで動く、サタンズネーク悪魔元帥ではない。

邪魔をした鬼に対して、復讐する。

仮面ライダーを応援したジュニアライダー隊に対して、復讐する。そして、何よりも一度自分を殺めたスーパー1へと対して。復讐する。

自分に邪魔する全てに対して復讐する、復讐の化身へ進化したのだ。

まさか、ここまで素晴らしい実験の成果を得られるなんて…。

W自身も感じていなかった結果に、笑いしか込み上げてこない。

さあ…、もつと暴れる。

その効力を僕達に、もつともつと見せてくれ…。

「大丈夫つすか、皆！！」

大蛇を振り払い、轟鬼はジュニアライダー隊のもとへと駆け寄った。復讐の化身になった悪魔元帥はジュニアライダー隊にも襲いかかってくる。

スーパー1もブルーバージョンに跨り、必死にジュニアライダー隊を守っているが、大蛇の数は先程もよりも増えており、幾ら蹴散らして限がなくなっていた。

しかも、この中で満身創痍ではない仮面ライダーはいない。このままでは殺されるのも時間の問題である。

『もう諦めたらどうだい？』

さも当然の様にWが言い放った。

もう戦う気はないようで、スーパー1や鬼達の大蛇と戦う様子をた

だ眺めているだけだった。

「この状況の中でまだ戦おうなんて…、馬鹿の考えだよ…。逆転する機会なんて来るわけないんだからさ…。奇跡でも起きない限り…。」

「

言った直後、大蛇とWに向かって青い空気弾が放たれた。

それは1発だけでなく、何発も放たれ、ジュニアライダー隊や鬼を襲っていた大蛇を次々と蹴散らした。

空気弾が放たれた場所を見て、日菜香や鬼達は口を開けて驚いた。

黒い体に、青色で縁取られたネイルや装備が特徴の鬼が、トランプペット型の武器、片腕で持った烈風を構えていた。

「鬼を喰らったというのならば…、もう僕達も黙っていられませんか。」

青色の鬼 威吹鬼 を先頭に、絶対に来るはずないと思っていた、様々な鬼がその場に立っていた。

起きるはずの無い、奇跡が起きたのだ。

F part (後書き)

場面が変わりすぎでわかりにくいと思います…。
本当に許してください…。

先ずは、あきら好きの皆様申し訳ありません。

何か重要な役を与えたく、本当はイブキの補佐的な事をやらせるつもりでしたが、話の都合上こんな結果になってしまいました。

2人のトウキもですが…、プロローグ以降悪魔元帥に喰われる事はずっと前から決定していました。

それで、ピンチになるといった感じですが。

晴美と鬼の会話が一番疲れました…。

その部分で凄く時間がかかりました…。

今回は響鬼と明日夢君メインです。

それでは次回もよろしくお願いしますエレメントブレイドでした。

キン肉マン名台詞&迷台詞コーナー

『ナンバーワン』

文庫版キン肉マン9巻「死の制裁の巻」 ネプチューマン談

この世にいる様々な超人。

正義超人、残虐超人、悪魔超人。

そして、彼等の頂点こそが完璧超人。
パーフェクト

その首領^{トシ}ネプチューマン（のちに、本当の首領^{トシ}が出てきて、ネプチューマンは操り人形にすぎないと明かされましたが…）の決め台詞。

この台詞は初登場以外にも、マスク狩り予告が成功した時、試合に完勝した時など様々な場所で使われています。

正に自分が最強だという自信の表れの言葉。

皆さんも、自分が一番だと思う時に叫んでみてはどうでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396s/>

仮面ライダー Faight in Masked Rider Vs Masked Rider Another World

2011年11月18日04時47分発行